
とある科学の原点帰還(アトミックルーツ)

翔泳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の原点帰還
アトミックルーツ

【Nコード】

N3215N

【作者名】

翔泳

【あらすじ】

／第1章 学園戦争編 完結いたしました。第2章 現実殺し編
スタートです。／

／9月10日色々修正中です。前半の8話は少し内容が変わっています。全体の内容に変更はありません／

／これはとある魔術の禁書目録の世界で繰り広げられる1・5次創作物語です。人口230万人、その8割が学生で能力者の集まる学園都市。その学園都市で勃発する学園戦争。そしてそこで起きた小さな事件。しかしそれは後の大きな事件の始まりに過ぎなかった。

オリジナルキャラ、アトミックルーツ 原点帰還の能力を持つ神岡史貴を主人公に能力者達の物語が始まる。 /

/ 完全オリジナルなのでストーリーやキャラクターは原作と違います。ただ、舞台や学校名などはそのまま使用させてもらっている部分が多々です。ご了承下さい。 /

/ 最初の方は自信ないんで一度一通り読んで頂けると嬉しいです /

/ サブタイトル少し変わりました /

/ 今後、更新スピードが落ちます ; /

設定変更のお知らせ

とある科学の原点帰還アトミックルーツを読んで頂きありがとうございます。

9月2日以前から読まれて下さっている方に設定の変更のお知らせがございます。それ以降に読み始めて頂いた方には支障はございません。

このたび主人公の能力の詳細を変更させて頂きました。

能力名は原点帰還そのままです。

触れたモノを原子分解 触れたモノを帰還させる

簡単に説明いたしますと、例えば発火能力者の放った炎に触れた瞬間に能力の干渉を受ける前に帰還させ、消してしまう。と言った感じの能力です。

ただしこれは何かしらの異能の影響を受けているモノに限ります。

実は本来これが原点帰還の能力でした。

その為各話の会話内容や戦闘シーンも若干変わっております。

特に第5話、vs四天柱？は後半の戦闘シーンが変わっております。

物語の内容に変更はありません。

勝手な変更をご了承ください。

おかしな点がございましたら教えて頂けるとありがたいです

こんなことがありましたが、それでも読んで頂けるならうれしい限りです。

第1章 学園戦争編 無茶苦茶（前書き）

とある魔術の禁書目録の世界を舞台に繰り広げられる1・5次創作物語です。全てオリジナルのキャラクター、オリジナルの能力ですが名前が違っただけで中身は似ている所があるかもしれません。その辺りはご了承ください。

新米ですが、少しでも多くの方に楽しんでいただけたらと思っています。

最初だけでなく一通り読んで頂けるとありがたいです。

それではよろしく願いします。

第1章 学園戦争編 無茶苦茶

「いい加減にしてくれえええ」

既に30分、この夜の学園都市内を走り続けている。

もちろん夜間トレーニングの真っ最中と言う訳ではない。

トレーニングであれば音楽を聴きながら気持ちよく走れるのだが

……

「イヤよ！アンタこそいい加減にしなさい！」

夕方コンビニに急に飲みたくなった炭酸ジュースを買いに行ったのが何かの縁なのである。

普段飲まないモノを買いに行ったりするからこうなるのだ。

夜間のトレーニングなら喜んでやってもいい。

鬼ごっこだってこの年になってもやろうと思えば出来る。

ただ、これはそう言ったモノではない。捕まればはい鬼交代と言った可愛いモノではない。

「もう今日は十分だろ！？」

神岡史貴かみおか しぎは顔だけを相手に向けて叫ぶ。

走るのを止める訳にはいかない。ここはまだ街のど真ん中だ、周りには建物が多すぎるし夜の時間を楽しく過ごしているカップルの姿も見える。

相手が諦めてくれれば速い話なのだが……

「いいから止まりなさい！」

そんな様子は微塵もない。

学園都市でも5本の指に入るエリート校、常盤台中学の制服を纏った彼女は追いかけることを止めようとはしない。

お嬢様学校の可愛らしい制服を纏っているにも関わらず、その姿は獲物を追いかける猛獣をようである。

そんな猛獣に追いかけられながらさらに5分ほど逃走を続け、都市の端にある公園に辿りついた所で漸く史貴は足を止めた。

やっと撒けたかな、なんて後ろを振り向いたが

「やっと止まったわね」

そんな期待も空しく史貴が振り向いた先には、燃え上がるような赤い髪を靡かせて今にも飛びかかって来そうな女の子の姿があった。

最早ため息すら出ない。

「なあ、今日はもういいだろう？」

「ダメよ！ 私はまだ納得してないんだから！」

轟！ と彼女は燃える様に赤かった。いや、寧ろ燃えていた。

実を言うとこう言ったことはこれが初めてではない。初めてがいつだったかさえないほどこんなことを繰り返しているのだ。会ったたびにこんな事をされていてはこちらの体力が持ちそうになり。一刻も早くこの場を何とかしなければならぬ。

目の前の猛獣と言う名のお嬢様を宥めようとする

「学園都市に7人しかいないレベル5の1人、常盤台中学の灼熱炎「ロナ」帝オンの上坂茜かみさか あかねさんがそんなにムキにならなくても」

が……

「う・る・さあああい!!」

お嬢様には効果がないようだ。

言葉と同時に巨大な火球が神岡史貴に向かって飛んで来た。

その火球は神岡史貴に近づくにつれて酸素を取り込み形を大きくしながら向かって来ている。

一般人に向けてそれを放ってしまったら間違いなく一瞬で丸焦げ、いや最早形も残らないかもしれない。

しかし神岡史貴はそんな炎を目の前にしても慌てずに両手を前に出し火球を受け止める。

その瞬間、その火球は風船が破裂するように跡形もなく消えてしまった。

「あんただってその中の1人じゃないの!!」

上坂茜は怒鳴るように吐き捨てる。

レベル5。

学園都市に住む230万人もの学生は能力開発とされる時間割り（カリキュラム）によって何かしらの能力を持つ。全ての学生はレ

ベル0からレベル5の6段階に分けられ、その6割がレベル0である。その中でも最高位のレベル5は7名しかおらず、32万8571分の1の才能の持ち主と言っても良いかもしれない。

そう。神岡史貴も学園都市に7人しかいないレベル5の1人だ。

「アトミックルーツ原点帰還、パイロキネシス神岡史樹。私は発火能力者頂点の灼熱炎帝としてアンタに勝たなきゃならないの！」

「こんな所で火の玉投げてもし木にでも引火しらどうすんだよ！？
勝つって言ったって一体何度やれば気が済むんだよ！ て言うか、
そもそも何でそこまで勝ちにこだわるだ！」

周りにある建物は最新の技術で建てられている為、そう簡単には燃えないだろう。学園都市の端と言う事と夜と言うこともあり辺りに人もいない。しかしこの公園にある木に灼熱炎帝コロナリオンの炎が引火でもすれば忽ちここは火の海になってしまうだろう。

「な、何でって言われたって……そんなの関係無いでしょ！ アンタは大人しく私と勝負すればいいの！」

（無茶苦茶だ……）

「そんな無茶苦茶言うな！ な、十分やったから今日も引き分けていいだろ？」

そう。今日も、だ
決着など着いた事がない。

「そんなのダメよ」

辺り一面が炎に飲み込まれていく。

「今日こそアンタに勝ってやるんだから！」

確か牛は赤いモノを見ると突進してくる。

この子の前世はきっと牛に違いない。いや待てよ、自分が炎で真っ赤なだけで赤いモノを見ている訳でもないか。ああ自分の発した炎を見ているのか

そんなくだらない思考をしている間にも上坂茜が翳した両手には渦を巻く様に炎が集まって行く。

周りの事なんか知らない、と言わんばかりのその巨大な炎は既に周りのいくつかの木に引火してしまい、炎は徐々に公園全体へと広がっていた。

「だからお前はこの公園を失くす気か！！」

しかしそんな言葉も上坂茜の耳には届かなかつたらしく彼女の頭上には10メートルを超す炎の塊が完成していた。

近くにある噴水の水は最早蒸発してしまっている。

そんな事もお構いなしに彼女はニヤッと笑うとその炎を何の躊躇もなく叩きつけた。

第1章 学園戦争編 無茶苦茶（後書き）

まあ始まりはこんな感じです……
これからどうぞよろしく願います。

噂の話（前書き）

簡単な登場人物紹介

名前・かみおか しき神岡史貴

能力・レベル5第3位、アトミックルーツ原点帰還。

名前・かみさか あかね上坂茜

能力・レベル5第5位、コロナリオン灼熱炎帝。
バイロキネシス発火能力者の頂点。

噂の話

「ああああ、こんなにしちまいやがって」

朝になり公園の様子を窺いに行ったのだが、そこは最早公園とは呼べる代物では無くなっていた。

辺りの木々は焼け、公園の真ん中に設置されてあった噴水は無残にも融け落ち、原形すら分らない状態である。

既に数名の風紀委員が公園の周りをうろついており、集まった野次馬に目撃情報を聞きまわっているようだ。

昨日、上坂茜が放った超巨大火球。もしもそのままの状態であれば被害はこの程度では済まなかったであろう。

それでもその火球は直接公園には当たっていないのだ。

アトミッククルーツ
原点帰還

この能力を使って火球を消したのだ。

改めて発火能力者の頂点の力を思い知らされる光景である。

「神岡さん」

そんな声と同時に一瞬にして史責の前に砂埃が舞う。

「ゴホッ、こんな近くで能力を使わなくてもゴホッ、数メートルじゃないか」

「いやああ、神岡さんの姿が見えたんでつい調子に乗ってしまってた。
未だにビリビリと体に静電気を浴びながら、彼は笑顔でそう答えた。

彼、風祭竜は上条学院所属のレベル4発電系の能力者。自称、アートミッドポイント帰還の舎弟を自ら名乗り、ジャッジメントも務める。
また彼自身もレベル4でありながら疾風迅雷の異名を持っている。シューティングスター

（ちなみに、今回の事件も例のやつですか？）

風祭竜は手を口に当て小声で史實に訊ねてくる。

（ああ、まさにその例のやつだ……）

例のやつ、と言うのはもちろん上坂茜のことである。

「相変わらずモテモテみたいですね」

モテモテとは異性から非常に人気がある
と言う事なのだが、あれはどうに見ても人気があると言えるモノではない。

ホントに何か因縁でもあるのではないかと疑いたくなるような行動である。

「一応、こつちである程度処理しますんで、気にせずどんどんやっちゃって下さい」

「バカやろう。毎度毎度そんなことやってたらその内、学園都市全

部燃やしかなないぞ」

そんな冗談を言ってみるが、彼女なら本当にやりそうである。

イメージ、自分を追いかけてながら炎をまき散らす上坂茜の姿を……
何ともリアルに想像することができた。

（有りそうな絵だ……）

「そう言えば」

と、何かを思い出したように風祭竜は呟いた。

「神岡さん、明日って予定ありますか？」

唐突な質問ではあったが、夏休みに入った事でどこかに行きたいのだろうと神岡史貴は悟る。

「いや、特にないけど。何かあんのか？」

「はい、ちょっとした事が」

と風祭竜の顔が何か企んでいるようなそんな雰囲気であったが、
何かしらの暇つぶしになるだろうと特に追求もせずに

「……まあ良いけど」

予定を組んでしまった。

「じゃあまた連絡しますね！」

と風祭竜は疾風の如く去って行く。
さすがは疾風迅雷シンコーテイニングスターと感心したい所だが、腕の時計を見てハッとす
る。

「ヤバい、早くいかないと」

と言いながらも特に慌てる様子もなく神岡史貴は街へと消えて行
った。

~~~~~

## 上条学院。

第7学区にある至って普通の高校。同じ第7学区にあるエリート  
校の常盤台中学の様にレベル3以上でないと入学が出来ないとかそ  
んな事は何もない。

特に有名でも何でもなかったのだが、この数年で大きく変わった。

エリート校でも無かった高校に2人のレベル5が入学したのだ。  
何故こんな高校に入ってきたのかは不明であるが、そのおかげで今  
となつては常盤台中学に劣らないほどの知名度を誇っている。

その中の1人でもある原点帰還アトミックルーツの神岡史貴は上条学院の屋上を目  
指して歩いていた。

いくつもの階段を上り見えて来た屋上のトビラを開けると、そこ  
には夏の太陽が燦々と降り注いでいた。時々吹き抜ける風は涼しく

はなかったが無いよりは増しである。

しかしそこには誰もいない。誰も見えないのだが

「会長！ここにいるのは分かってるんですよ！」

神岡史貴は誰も見えないハズの屋上で辺りを見渡しながら叫ぶ。

すると視界に入るある一点が歪み始め、次第に人の形を現してくる。

「そこにいたんですか、会長」

現れたその姿は、まさに会長と呼ぶにふさわしく、きつちりと着こなされた制服にメガネ、綺麗に寝かされた純粋な黒髪に冷静沈着を思わせるオーラを放っている。

「すまない。1人になる時間がほしくてね」

会長と呼ばれる男はゆっくりと神岡史貴に近づいていく。

「話しと言っのは何ですか？」

うん。と会長は少し真剣な表情で質問した。

「学園戦争と言っのを知っているかい？」

学園戦争。

何でも自分の強さを証明するために学園都市全部を巻き込む戦争を引き起こそうとしている能力者がいるとのネット上の噂だ。

「それがどうかされたんですか？」

それがだね、と腕を組み片方を顎の下に持つていき親指で顎を触る、と言う会長お決まりのポーズで話をする。

「どうやら本当に起きるかもしれないんだよ」

会長の言葉に耳を疑う。

学園戦争？

そんなモノを始めて一体何の意味があるのか？

ここは学園都市、能力に溺れて事件を起こす能力者は後を絶たないが学園都市全体を巻き込むなんて事は一度も無かった。

「もし、それが起きてしまったら低能力者達はどうなるんですか？」

全能力者の6割はレベル0である。つまり学園都市全体と言うなら戦争なんてモノに全くの無関係な学生が多く巻き込まれる事になる。

「上位能力者が何とかするしかないだろうね」

「そうですね、もしもの時は俺達レベル5がどうにかしないとイケませんね」

そう、もしもそんな事が本当に起きるとするならば自分たちが何とかしないとイケない。

その為のレベル5だ。

「何かあつたらまた連絡をしよう」

そう言つと会長は屋上を後にする。

ただ1人残つた神岡史貴に夏の暖かい風が吹きつけた。

## 噂の話（後書き）

簡単な登場人物紹介

名前・風祭竜かざまつり りょう

能力・発電能力レベル4。エレクトロマスター疾風迅雷の異名を持つ。シューティングスター磁力を操る事を得意とし、磁力浮上により高速移動が可能。

名前・会長（本名はまだ不明）  
能力・不明

お嬢様？（前書き）

割り込み投稿したものです。

あまりにも戦闘シーンばかりでしたので少しは日常もって事で書いてみました。

お嬢様？

「ホント熱いわね」

エリート校常盤台中学の制服を身に纏い、赤い髪を靡かせた少女はそう呟く。

町の建物の中から降り注ぐ太陽の光がその暑さの原因だといいいのだが

「上坂さんが熱いと言つのは間違っていると思います」

もう一人の常盤台中学の制服に身を包んだ少女は言う。

「どうしてよ？」

「それはあなたの機嫌が悪い時は周囲の気温が2度は上昇するからです」

上坂茜は発火能力者の頂点、レベル5の灼熱炎帝。バイロキネシス  
コロナリオン

炎を操るスペシャリストな訳だが、感情によって日常時でも周囲に影響を及ぼしてしまう。

今日の彼女は機嫌が悪い。だから周囲に熱を発しているのだ。

つまり上坂茜が感じているのは太陽光の暑さだけに対してもう一人の彼女は上坂茜が放つ熱によって通常よりも2度ほど高い温度を体感しているのだ。

「……また例の方ですか？」

「まあ、そんなとこね。アイツまた逃げたのよ！　いつもいつも最後のいい所であしらわれるのよ。次こそ見てなさい！」

グツと袖をまくり上げ力瘤を作る姿はどう見てもお嬢様校の生徒には見えない。

ただその表情はどことなくうれしそうにも見えなくは無かった。

「なんかその話をしている時の上坂さんはうれしそうですね」

「はあ！？　私がうれしそう？？　なんで？」

勢いよく振り向いた上坂茜は全力否定していた。

「週に4回はその話をするじゃないですか？」

「そ、それはたまたまアイツと会うことが多いからよ、別に好きで会ってるんじゃないんだから」

照れ隠しをしているような上坂茜の態度にもう一人の彼女はにこやかにほほ笑んで見せる。

「でも内の学校も変わってるわよねえ、夏休みになってまでどうして週に1度はこうやって学校に行かないといけないのかしら？」

「良いじゃないですか。学校を綺麗にする事はとても良い事ですよ？」

常盤台中学は夏休み中週に1度は学校に出向いて校内掃除を行うのだ。



「そんなこと掃除ロボットにでもやらせとけばいいのに」

素通りで床に落ちているガムを剥がすほどの威力を持ったドラム缶ロボ。学園都市の有りと有らゆる場所に配備されている掃除ロボット。

2人の横をその掃除ロボットと警備ロボットが通過して行く。

警備ロボットもドラム缶仕様である。作られた当初は大型ロボットを改良したモノだったそうだが、子供が集まって進路の妨害になると言う理由から何の変哲もないドラム缶型に変更された。

「学校は自分たちで掃除するモノですよ？ それに自分たちの力で綺麗にすることで普段から綺麗に使おうって気持ちが湧いて出て来るものなんですよ」

「そう言うものなのかなあ」

頭の後ろに手を回し少し上向き加減でそう呟いた。

「それにしても」

と上坂茜辺りを見回す。辺りには普段では見ない他校の男女の生徒がパンフレットを片手にもの珍しそうに辺りを散策している。

「学舎の園の開放なんて良く考えたわよね」

学舎の園。第7学区にある洋風の小さな街で隣接する5つのお嬢様学校がそれぞれの敷地を共用し合う形になっている。基本的に女性しかおらず、学生寮や商店街、研究・実験施設などが存在する。

普段は他校の生徒及び男子生徒の入園は禁じられており、女子生

徒であつたとしても招待を受けなければ入る事が出来なかつたのだが、今年から学舎の園の開放と言う形で夏休みに限り一般開放しているのだ。その為夏休みにも関わらず学舎の園を一目見ようと園内では他校の生徒で賑わっている。

「他校の生徒からすれば学舎の園は憧れの場所みたいですから、こう言つた機会が設けられることは良い事だと思いますよ」

もちろん入園の際には警備門でのチェックが必要となる。

とは言つモノの実際の所は制服を着ていれば何の問題も無く入る事が出来る。

そんな話をしながらしばらく歩くと、ふと彼女の足が止まる。

「上坂さん、ここ寄つて行かないですか？」

パシティッチリア・マニカーニ。

厳選された素材をイタリア本国と寸分違わぬレシピで焼き上げたチーズケーキはまさに絶品であり、この学舎の園にしか出店していないと言う事で、人気の店の1つである。

「ええつと何々、今日のオススメは苺のクロスタータとキールロワイヤルか」

「どうですか？」

と質問されるものの、どうしても入りたい、と訴えてくるその目を見せられては断るにも断れない。

ストレス解消には甘いモノが1番？　と言うので上坂茜は付き合うことにする。

彼女はキールロワイヤルを注文し上坂茜はチョコラータを注文。

テーブルに着き、幸せそうにケーキを食べる彼女に上坂茜は笑みをこぼす。

「上坂さん食べないんですか？」

ああ、とケーキと一口運んだ瞬間

「んん!!」

上坂茜は窓の外を指さした。

慌ててケーキを飲み込み言葉を発する。

「居た〜!!」

上坂茜の指さす方向には他校の制服を来た男子生徒が2人。1人は黒い短髪の男。そしてもう1人は

「あのツンツンなんでこんな所にいるのよ!!」

勢いよく椅子から立ち上がる上坂茜。

「と言うことはあの方が」

「アイツが神岡史貴よ!!」

残りのケーキを一気にのどに流し込む。最早味わうなんて言葉は

上坂茜の頭の中には無かった。

「ゴメン、ちょっと私行つて来る！」

と上坂茜は急いでドアへと向かう。

「か、上坂さん!？」

名前を呼ぶがそんなモノは上坂茜には聞こえていなかった。  
神風の如く勢いよくドアを開け店の外へと飛び出す上坂茜。

そんな上坂茜を見て、もう、とため息混じりに呟く彼女であった  
がその後発した言葉はだれにも聞こえていなかったであろう

「あれが神岡……史貴さん」

~~~~~

「いやあ、さすがお嬢様って感じですね」

パンフレットを片手に興味津津でキョロキョロと辺りを見回す。
周りから見れば不審者に見られてもおかしくないほどの行動であるが、初めてここに来た者は皆そうなってしまうのかもしれない。
まして男子生徒からすればそこは禁断の聖地とも呼べる場所であったのだ。

「こんな所に来たいなんてお前も変わってるよな」

呆れた表情で風祭竜を見る神岡史貴の手にも一応パンフレットと呼ばれる本が握られている。もちろん用意したのは風祭竜である。

「神岡さんには男のロマンと言うモノが分からないんですか?? お嬢様だけが入る事の許されるこの学舎の園に自分たち男子が入れるようになったんですよ！ これほど革命的なことはないです。そもそも」

風祭竜の力説が続いているが軽く耳に入れながらも神岡史貴は辺りをぶらりと見回す。

思った以上に男子生徒の数が多くて少々驚いている。まあ風祭竜の様な学生が沢山いる事を証明してしまっているのだが、

ヨーロッパを思わせる様なその町通り、店の数々、正直本当にお嬢様しか入れないと言う事を実感させられつつあった

「アンタこんな所で何してんのよ！」

のだが、

振り向いた先に見えるのは、エリート校の常盤台中学の制服を来た本来ならばお嬢様と読べるハズの女の子。

しかしそれをお嬢様と呼んで良いかは神岡史貴には『?』だった。

「竜、お前の言うお嬢様がここにいらっしやるぞ」

ホントですか!? と風祭竜は振り返るが彼女が目に入った瞬間風祭竜にもそれをお嬢様と呼んでいいのか分からなかった。

「で、どうしたんだメラメラ中学生」

「メラメラ言うなあ！」

轟！！ と彼女の周りを炎が覆う。

「ああ分かった分かった！ 悪かったからこんな所で炎ぶつ放さないでくれ！」

神岡史貴はどうか彼女を宥めようと謝る。上坂茜もここが学舎の園の大通りのど真ん中である事を思い出したらしく、その炎を抑えていった。

「で、アンタはこんな所で何してんのよ」

落ち着きを取り戻した彼女は最初の質問を再度投げかけた。

「ああ、こいつがどうしても学舎の園の見学がしたいって言うから着いて来たただけだ」

と竜を指さす。

「お前は どうしてこんな所にいるんだ？」

「わ、私はたまたまケーキ屋でお茶してたらアンタが見えたから、その……ええい勝負しなさい！」

「はあ！？」

「勝負よ勝負！ アンタ前回も逃げたでしょ！？ 今日こそ決着をつけるのよー！」

両手をビュンビュン振りまわす上坂茜。その彼女に道行く人たちが目を向ける。こんな大通りのど真ん中で常盤台中学の制服を纏っていれば嫌でも目立つのは当たり前だ。

「いいのかジャッジメントさん？　こんな所で暴れる宣言してる人がいますけど」

「それはいけませんねえ。管轄外ですけどさすがに目の前で建物燃やされてはどうにも出来ませんからね」

と風祭竜はジャッジメントの腕章を見せる。

「ひ、卑怯よ！　また逃げるつもり！？」

はあ、と神岡史貴はため息交じりに答える。

「こんな道のど真ん中でそれもジャッジメントの目の前でお前は何をするつもりだ？　徒でさえ常盤台中学の制服で目立ってたんだから今日は大人しくしてろ」

まるで小さい子に言い聞かせるようにポンつと神岡史貴は上坂茜の頭上に手を乗せる。

その行動に徐々に顔を赤らめて

「なめてんのかこらあ！！」

暴つと炎を発する。

「バカ！　こんな所でそんな炎を出す奴があるか！？」

「神岡さんここは回避です！」

その言葉と同時に2人は勢いよく走りだす。

「じゃあな上坂！」

「な、何をつてちよつと！」

名前を呼ばれた事に一瞬動きが止まってしまった上坂茜は走って行く2人を見つめる事しか出来なかった。

ただ、その後ようやく気が付いた。周りの視線が自分に向けられている。

あれだけ大声を上げ、拳句の果てに炎まで出して、常盤台中学の制服。これだけの要素を持って注目されない訳がない。

かあぁつと再び顔を赤らめると早足でその場を立ち去った。

7月の終わり、既に齒車は回り始めていた。

お嬢様？（後書き）

あくまでオリジナルですので、色々あるかもしれませんがよろしくお願いします。

戦いの幕開け

8月1日

今日の日差しも、まるで人に恨みでもあるかの様に降り注いで来る。

そんな中、アイス屋の椅子に座る2人の学生の姿がある。

「いや、やっぱり暑い日にはアイスに限りますね、神岡さん」

両手に3段積みของアイスを抱え、天国にいるかのように幸せな顔でアイスを食べる風祭竜。

「よくそんなに食って腹を壊さないな」

そんな姿を呆れた表情で見つめている神岡史貴。
なぜ2人がこんな所にいるかと言うと

「それに会長の話して何ですかね？」

会長との待ち合わせの為にここにいるのだ。

「それは会長が来れば分かる事だ。それにあの人のことだ、もうすでに近くまで来ているかもしれないしな」

「ありえますね。急に後ろから現れて、ワッ、なんて脅かして来られるかもしれませんね。だからその前にこのアイス食べて」

風祭竜がアイスを口にしようとした瞬間

瞬！ と突然の突風が吹きつける。

そして次の瞬間

ボロボロつとアイスは無残にも切り刻まれて床へと落ちて行つた。

「ああああ俺のアイスがあああ！！」

そのアイスの哀れな最後を見て、風祭竜は天国から地獄へと落とされたように頭を抱え叫んでいた。

「男がアイスごときで喚くんじゃない」

その声に2人は振り向いた。

そこには2人の女の子の姿があった。

1人は長髪で腰に扇をぶら提げ、もう1人は短めのポニーテールを揺らしながら飴をペロペロなめている。

2人が着ている制服に眼をやると

「お前ら、霧ヶ丘女学院の生徒だな」

「俺のアイスどうしてくれんだああ」

風祭竜はまだ叫んでいる。

「レベル5が1人、上条学院の原点帰還、アトミッククルーツ神岡史貴だな？」

「ああ、そうだが」

「俺のアイスどうしてくれんだああ」

「わーい、こんなに早く見つかるなんて今日は運がいいね。それからその隣うるさいよ！」

「そうだな、いきなり上条のトップに会えるなんてラッキーだ」

「18学区にある霧ヶ丘女学院からわざわざこの7学区に来ると言う事はそれなりの目的があるはずだが。」

「何か用でもあるのか？」

神岡史貴は訊ねてみる。

返って来そうな答えはある程度は予想出来ていたが、確認する必要がある。

「学園戦争は知っているだろう？」

予想は的中した。

学園戦争。自分が最強である事を証明するために学園都市全部を巻き込んで戦争を引き起こそうとしている能力者がいる。という噂であった。

「霧ヶ丘女学院にその主犯がいるということか」

「いや、私たちは便乗したに過ぎん。あのお方も我々霧ヶ丘女学院の力を証明したいそうなのでな」

「学園戦争?? そんな情報ジャッジメントには何も回って」

風祭竜の携帯機器の着信が鳴り響く。

第18学区ジャッジメント、負傷者不明、全支部壊滅

「へ、今ごろ回って来やがった……」

「な〜んだ、あんたもジャッジメントだったんだね」

「ジャッジメントはもつと大能力者を集めた方がいい。異能力者や低能力者ばかりでは話にならないぞ」

風祭竜は歯を食いしばる。

ジャッジメントには超能力者はいないものの大能力者は数名いる。ただほとんどがレベル3以下の学生である。能力者の学生たちによる学園都市の治安維持機関と言う事もありジャッジメントになるためには能力のレベルは問われず「9枚の契約書にサイン」「13種類の適正試験」「4か月に及ぶ研修」これらをクリアすれば誰でもジャッジメントになることができる。

確かにジャッジメントが強いとは限らないがそれまでの皆の努力をバカにされた様で風祭竜は拳を握りしめる。

彼女は扇を取り出す。

「既に後の2人が霧ヶ丘女学院の強さを証明するためにこの第7学区にある学校をいくつか落としているだろう。だが、レベル5の7人の内4人がこの第7学区にいる。レベル5がいる限りその学校を

落とす事は難しい」

その扇を開き一振りするといくつもの風の刃が走り、さっきまで座っていた椅子を粉々にしてしまった。

「だからまずは貴様からだ！アトミッククルーツ原点帰還！」

もう一振り扇を振るう。

今度の風の刃は脅しやそう言ったモノではなく、確実に神岡史貴を狙って放たれたモノであった。

が、次の瞬間、神岡史貴の周りに大量の砂塵が舞い、その砂塵に阻まれて彼女の放った刃が届く事はなかった。

「簡単に神岡さんの相手が出来ると思うなよ」

風祭竜は高速で移動することによって辺り一面の砂を上空へと舞いあがらせて壁を作ったのだ。

「ほう、貴様があの疾風迅雷シューティングスターか」

「神岡さんとやるのは俺に勝ってからにしろ、お前にはアイスの恨みもある」

彼女はニヤッと笑うと

「いいだろう、貴様の相手は私がしてやる。アトミッククルーツ樹里、原点帰還はお前がやれ」

「分かったよ〜真琴」

そして互いに2人は向き合い間合いと取っている。

「へえ、お前らそんな名前だったんだな」

「そう言えばまだ名乗っていなかったな。せつかくだから教えてやろう。私は霧ヶ丘女学院の四天柱ニユースが1人、桐裂真琴きりさき まこと。能力名は北風ソニック拔刀クライムだ！」

大きなつむじ風と同時に複数の風の刃が風祭竜に襲い掛かる。

風祭竜は得意の磁力浮上を使い高速移動で刃をよけながら、神岡史貴から離れるために逆方向に移動していく。

「どうした！？逃げてばかりでは話にならんぞ！」

絶え間なく続く刃の嵐を交わしながら風祭竜はある程度距離を取った事を確認すると一旦停止する。

「ここからが本番だ！」

一方、神岡史貴側では。

「じゃあ私も自己紹介しとこうかな？私はね、霧ヶ丘女学院の四天柱ニユースの1人、安藤樹里あんどう じゅり。能力名は東風掌握ソニックエクスハンド！」

戦いの幕開け（後書き）

新しい登場人物紹介

名前・桐裂真琴 きりさき まこと

能力・風力使い（エアロマスター）レベル4。能力名は北風抜刀 ソニックブーム
霧ヶ丘女学院の四天柱の1人 ニユース

名前・安藤樹里 あんどう じゅり

能力・風力使い（エアロマスター）レベル4。能力名は東風掌握 ソニックエクスハンド
霧ヶ丘女学院の四天柱の1人 ニユース

V S 四天柱（ニュース） ?（前書き）

文章表現が下手です。特にバトルシーンはうまく書けません。読んで頂いている皆さんには本当に申し訳ないです。うまく書けるように頑張りたいと思います。アドバイスなんか頂けるとありがたいです。

vs 四天柱（ニュース）？

目に見えない何か。

その大きな何かを神岡史貴は手で受け止め、それをかき消す。

「さすがレベル5 アトミック 帰還だね」

安藤樹里は上から見下ろしながら関心しているようだ。

「褒めてくれてありがとさん」

神岡史貴は上を見上げながらそう答える。

そう、上を見ながら答えたのだ。

「じゃあもう1回行くよ」

エアードプリン
空気圧迫！！

安藤樹里は両手を上に翳し何かを掴むと、それを下目掛けて投げつけてきた。

神岡史貴は再び両手を挙げてそれを防御する。

激しい音と共に神岡史貴の周りの地面は凹み、大きな砂埃をあげた。

「やっぱり駄目か」

安藤樹里はポニーテールを揺らし、頭の後ろに手を組み残念そうにしている。

「 空気か」

舞いあがる埃を掃いながら神岡史貴は上を見上げた。

「そうだよ。私はね、空気に触る事ができるの。だからこうやって空中歩行なんて事も出来ちゃうの」

先ほど神岡史貴が防いだのは空気の塊。

安藤樹里は自分の頭上にある空気を掴んで投げつけてきたのだ。

「じゃあ次はもっと凄いの見せてあげる」

安藤樹里は両手を胸の前に持って来ると手の平を合わせて集中し始める。

すると次第に両手は何かを押されるようにゆっくりと開いて行く。

やがて、その手の中には肉眼でもハッキリと見えるほどの圧縮された空気が見えてきた。

「これ結構時間が掛かっちゃうの。だからあんまり使わないんだけど、ほら君何も出来ないでしょ？」

そう言うと彼女はその圧縮された空気を頭上に掲げより多くの空気を圧縮し始める。

神岡史貴は空中に浮かぶ彼女に近づく事が出来ずに、その完成を待っているしかなかった。

「できた」

彼女の頭上には2メートルはあるであろう圧縮された空気の塊が完成していた。

神岡史貴は両手を前に出し、それに備える。

「いつけえええ！」

ソニックバンド
濃縮砲弾！！

神岡史貴までの空気を全て飲み込むようにそれは向かって来る。

「ハア！」

それを両手で受け止めるものの圧縮された空気は予想以上に重く、その勢いに後ろへと押されていく。

20メートルほど押された所でようやく勢いは無くなり、それと同時に圧縮された空気をかき消した。

「あゝあ、なんかいけると思ったんだけどな」

安藤樹里は神岡史貴を見降ろしながらそう呟く。

実際に濃縮砲弾と呼ばれる技をレベル4の能力者に放ったとすれ

ば、相手の能力次第では一撃で終わってしまうほどの威力を持っている。

そんな技を傷一つ付けずに防いでしまうのは神岡史貴がレベル5であり、アトミックルーツ原点帰還の能力を持っているからだ。

「仕様がないな」

彼女は何かを悟ったようにゆっくりと地上に降りて来た。

「君にこれ以上能力を使っても意味無いみたいだし」

彼女は指をポキポキと鳴らし

「肉弾戦あるのみだね」

勢いよく神岡史樹へ向かって走り出した。

そして振り上げた拳を神岡史樹へと振り下ろす。

（　　かわせる）

そう思った矢先、その拳は急に加速し神岡史樹の頬に突き刺さりそのまま後ろに数メートル飛ばされてしまった。

「わっい、引つかかった」

神岡史樹はヨロヨロと立ち上がり血の混じった唾を吐く。

「圧縮した空気を肘に仕掛けて解放したんだよ」

「そんなにペラペラ喋って後悔するぞ」

神岡史貴は足元がふらつきながらも構えを取る。

「さっきは腕だけだったけど」

彼女は再び拳を振り上げ

「今度は全身に仕掛けるよ」

そして勢いよく神岡史樹へと加速して行った。

しかし神岡史樹はふらつきながらも落ち着いていた。

確かに彼女は速い。

でも見えない訳ではない。

「これで終わりだよ」

彼女はその拳を振り下ろした。

ベキベキっと言う鈍い音が聞こえた。

拳は深々と突き刺さっていた。

しかしそれは神岡史樹ではなく

「そんな……どうしてなの……」

荒井樹里はその場に崩れ落ちた。

突き刺さっていたのは荒井樹里の腹部にだった。

「ただ単にお前の拳に合わせてカウンターを入れたただだよ、まあ一か八かだったけどな」

神岡史貴は服をパンパンと掃うと周りを見渡す。

辺りは安藤樹里が放った空気圧迫エアータプリンや濃縮砲弾ソニックバンドによって木は倒れ、道路は凹み、この一角だけ異様な光景になってしまっていた。

「また、派手にやっちまったな。まあアイツの時よりは増しだが」

もちろんアイツとは公園一つを丸焼きにしてしまったアイツである。

「とりあえず、竜の様子を見に行かないと」

女の子を1人こんな所に置いて行くのも気が引けたが、それよりも風祭竜が心配であつたためにやむを得ずそのままにしておく事にする。

そして神岡史貴は風祭竜が走っていた方向を確認すると、そっちの方角へと走って行った。

v s 四天柱（ニュース） ?（後書き）

技に名前をつける予定はなかったのですが、つけてみました。

vs 四天柱（ニュース）？

「ハアハア」

自慢のヘアースタイルはボロボロに崩れ、所々切り裂かれた制服は最早新学期には使い物にならないであろう。

「……ッ！」

飛び交う無数の刃の1つが風祭竜の頬を掠める。そして切れた頬からは僅かに赤い血が流れ、それを裾で拭う。

「さっきまでの威勢はどうした？」

風祭竜の見つめる先には、長い髪を揺らし涼しそうな顔でゆっくりと近づいて来る桐裂真琴の姿が見えた。

「逃げてばかりでは話にならんぞ」

さっきも聞いた言葉だ。

風祭竜は苦戦していた。

周りの木と言う木は無残にも切り刻まれ、建物のコンクリートの壁をも切り裂く刃。それと同時に襲い掛かる衝撃波とも言える突風。

（近づけねえ）

彼女から吹きつける風に近づく事さえ出来ない状態だった。

「そんなんだからいつまで経ってもレベル5になれんのだ」

「お前もレベル4だろうが！」

フフ

彼女は静かに笑って見せる。

「確かにお前も私もレベル4だ。しかし、同じレベル4でも私とお前では大きな違いがある。分かるか？」

「何だよ違いつて」

「私たち風力使い（エアロマスター）には既に頂点と言われる方がいる。つまりその方を超えない限り私たち風力使い（エアロマスター）はレベル5にはなれん。それに比べ、お前たち発電能力者にはレベル5がない」

そこまで聞いた時点で風祭竜は漸く理解し始めた。

「じゃあ何だ？お前は上にレベル5がいるから仕方が無くレベル4で、俺は上がいないのにレベル4。そう言いたいんだな？」

「その通りだ」

要するに、同じレベル4でもお前の方が弱い。

その事を遠回しに言われたようで風祭竜は頭に來ていた。

「じゃあ、お前はなんでそのレベル5を超えようと思わねえんだ！
？それこそ腑抜けじゃねえか！」

フフ

彼女はまた静かに笑う。

「私はあの方を超えようとは思っていない。なぜなら」

瞬！と彼女は扇を再び広げる。

「私はあの方に仕える4つの風、ニユース四天柱が1人、ソニックブーム北風抜刀桐裂真琴
だからだ！」

カマイタチ
抜刀風！

轟！と言う音と共に無数の刃が風祭竜を目掛けて襲い掛かって来る。

「ちっ、くそ」

磁気浮上を使いそれをかわし相手に詰めかけようとするが、後から来る突風がそれを許さない。

相手からの距離を一定に保ちながら風祭竜は移動を続けることしかできなかった。

「逃げる事しか出来ないみたいだな」

「なら、これでどうだ！」

風祭竜は立ち止ると磁力の力を使い、落ちているコンクリートの塊を持ちあげるとそれを桐裂真琴に向けて投げつける。

「そんなもの」

彼女が扇を一振りするとコンクリートの塊はサイコロステーキのように切り刻まれた。

「私の抜刀風カマイタチの前では何の役にもた立たん」

彼女は息一つ乱すことなく立ちふさがる。

対する風祭竜は能力のほとんどを彼女の攻撃を避ける事だけに使っている。

へへ

と、風祭竜は笑って見せる。

ただその笑いは余裕だとかそう言う笑いではなく、何かを決めた、そんな笑いであった。

「確かに俺とお前じゃ同じレベル4でもそれなりの差があるにみたいだな。でも……このままじゃ終われないよな」

と、風祭竜は下に落ちてある小石を拾い、そしてそれを手の平に浮かせる。

「俺の能力ってのはこうやって磁力浮上の力で物を浮かせる事が主

なんだ。持ちあげられる上限は、まあ500?つてところだろう。それに自分を浮かせて移動速度を上げる事ができる。でもな」

磁力の力で辺りにある小石や小さなコンクリートなどが風祭竜の周りに集まって来る。

「俺が疾風迅雷と呼ばれているのはただ単に速いっただけじゃない」
シューティングスター

それは見る見るうちにサッカーのボールを想わせるように形作られていく。それは綺麗な円ではなく、一つ一つの形を失うことなく集まっている。

「この技は俺にとって力が大きすぎて1日に1発が限界でな、これでダメならお前の勝ちだ」

「ならば見せてみる、お前の全力を」

何かを感じ取ったように桐裂真琴は扇を開き構えを取った。

「いくぜ！これが俺の最大の技だ！」

集められたサッカーボールほどの塊を空高く投げると、自分もその後を追うように磁力を使って舞いあがる。

体を反転させ、その塊目掛けて蹴りだす姿はサッカーのオーバーヘッドのようだ。

リニアドライブ
流星群！！

放たれた瞬間その塊はオレンジ色に輝き無数の流星のように細か

く分かれ、桐裂真琴目掛けて突き走る。

まさにシューティングスターの名にふさわしい技である。

それが地面へと激突し、大きな砂塵を巻き起こす。

直撃。

そう言っても過言ではないほど風祭竜が放った流星群は桐裂真琴
リニアドライブと捉えたかに見えた。

が、

「なかなかだったな」

一瞬にして巻き上がる砂塵を吹き飛ばすと、まったくの無傷と言
っているほど彼女は静かに立っていた。

（そ、そんな……）

風祭竜は力尽きたようにその場に座り込んだ。

「あれの直撃をくらって無傷だなんて……」

「確かに直撃なら危なかったかもしれないな、あの技にはそれほどの
威力があった。だが、直撃ではなかったとしたら？」

風祭竜は八つとした。

彼女の能力、それは風を操ること。風を起こす事など容易いもの

だ。

「 空気摩擦か……」

桐裂真琴は風祭竜が技を放った瞬間、衝撃波とも呼べる突風を起こし空気抵抗を増やして自分に届く前に消滅させてしまったのだ。

彼女の周りは特に凹んだ様子もなく、残った威力だけが地面へと当たり砂塵を巻き起こしたのだ。

「相性が悪かったみたいだな。さあ、終わりだ」

桐裂真琴は扇を頭上に翳し、振り下ろそうとしている。

風祭竜は自分の負けを察してその場から動こうとしなかった。

のだが……

「な、何!？」

彼女は扇を振り下ろさずに止まってしまった。

彼女が見つめる先には

風祭竜の姿が無かった。

「ばかな! 一体どこへ行った!？」

辺りを見回すがそれらしい姿は見えない。それは高速で動くと言ったレベルではなく明らかに”消える”と言ったレベルであった。

（まさか、まだそんな能力を隠していたのか？ いや、ヤツは発電能力者だ、そんな能力あるはずがない。じゃあどうやって）
マスター エレクトロ

「いやあ、後輩がお世話になったみたいだね」

！！

その声はどこからともなく聞こえて来た。

「誰だ！？どこにいる！？」

ハッと桐裂真琴は後ろを振り返る。

視界のある一点が歪みそれは姿を現す。そしてその隣には風祭竜の姿も見えた。

「会長……遅いですよお」

力の無い声で風祭竜は言う。

「すまないね。待ち合わせ場所に誰もいなかったものだから、戦城君に君たちの居場所を探してもらっていたんだ」
せんじょう

会長

その言葉に桐裂真琴は何かを思い出したようだった。

「そうか。お前が上条学院もう1人のレベル5、万有地変の林光一朗か」
ちやうつ トランスバリエートはやし

V S 四天柱（ニュース） ?（後書き）

簡単登場人物紹介

名前・戦城 せんじょう

能力・不明。

後ほど登場します。

名前・林光一朗 はやし けいちろう

能力・レベル5第7位、万有地变 トランスバリエート

上条学院の生徒からは会長と呼ばれている。

白銀の悪（前書き）

1話1話が短いんですが、ご了承ください。

後書きに簡単な登場人物紹介してます。

白銀の悪

「会長」

「やあ、神岡君。無事だったようだね」

戦いを終えた神岡史貴はようやく林光一朗と合流する。

「樹里ではダメだったようだな」

神岡史貴の姿を見て桐裂真琴はそう呟く。

寧ろレベル5に対してレベル4を1人と言うのが無謀であると言えるかもしれない。ただ自分たちの力を証明したいと思っているくらいだ、それなりの自信があつたのかもしれないが。

そして彼女は扇を閉じた。

「ああ、お前の相方なら向こうで伸びてるぞ」

神岡史貴は自分が走って来た道を指さす。

「そうか」

桐裂真琴は3人を一通り見る。

レベル5が2人にレベル4が1人。この状況は小学生が見たとし
ても桐裂真琴が不利であるのは一目了然である。

「さすがに3人相手は無理だな……今回は引かせてもらおう。だが次はあのお方もやって来るだろう、その時が上条学院の最後だ」

そう言つと桐裂真琴は先ほど神岡史貴が来た道を走って行つた。

「ハアアア」

風祭竜は力尽きたように座り込んだ。

「随分派手にやられたみたいだな、竜」

「いやあ、ほんと危なかったですよ。あの時会長が来てくれなかったらどうなっていた事が……」

あの時会長が来ていなければ間違いなく桐裂真琴の刃が容赦なく襲いかかっていたであろう。

「そう言えば会長はどうやってここが？」

と、神岡史貴は素朴な疑問を聞いてみる。

実際の所、神岡史貴はこの場所に来るためにいくつか遠回りをし
てしまっていた。

つまり本来ならば会長よりも先についているはずだったのだ。

「簡単な事だよ。戦城君にお願いしてね」

ああ、と神岡史貴は手を叩く。

イーグルアイ
「千浄天眼ですね。確かに戦城明なら自分たちの位置を知る事は容
易いことです」

神岡史貴は納得する。彼の能力ならすぐに自分たちを見つけないとが出来るからだ。

「それから話しと言うのはね、この学園戦争の主犯校が分かった。」

神岡史貴と風祭竜は会長の言葉に耳を傾ける。

「どうやら、長点上機学園がこの学園戦争の原因みたいだね」

長点上機学園。

第18学区にある学園都市の5つの指に入る超エリート校である。

「今から上条学園に向かうよ」

突如の林光一郎の発言に戸惑う2人。

「今からですか？ 一体またどうして？」

それはだね、と会長はお決まりのポーズを取りながら答えた。

「客人をお持て成しする為だよ」

~~~~~

常盤台中学前

「よお、おめえら。今日ここに上坂茜がいるだろ」

白銀の短髪。

白い肌。

そして全てを凍りつかせるような眼。

彼は上坂茜を探していた。

普段なら学舎の園に男子は入る事が出来ない。ただ今は夏休み一般開放中であるため男子生徒がいても何の不思議も無い。寧ろそれを利用して現れたようであった。

「し、知らないです、きよ、今日はまだ、一度もお会いしていないんで」

1年と思われる少女はビクビクしながらそう答えた。

その眼を見てしまったらほとんども学生がそうなってしまっただろう。

冷たく、深く、そして恐ろしいその眼を。

「何やってるんですか！？あなた！」

常盤台中学の上級生であろう少女は勇敢にも彼に向かって言葉をぶつけた。

「何だデメエ??」

彼はその鋭く、冷たい眼を彼女に向けた。

「ッ！」

彼女は少し後退りしたが

「その子から離れなさい！」

再び彼に言葉をぶつけた。

「俺はただ、人尋ねをしてただけだぜえ？そのどこがいけねえってんだ？」

「その子が恐がっています！」

彼女は構える。

「人を見かけで判断しちゃいけないなあ」

彼は再びその眼で睨みつける。

「その眼が恐いって言うてるんです！それ以上その子に近づくんなら」

彼女の手には既に炎がため込まれていた。

「打ってみろよ」

彼女は手に精一杯の力を込めて叫んだ。

「打ちます！！」

轟！ と炎は勢いよく彼に向かって行く。

炎の大きさからして彼女は発火能力者<sup>パイロキネシス</sup>レベル4。

並みの能力者ならその炎をくらっては徒では済まないだろう。

しかし、

彼はその炎を片手でいとも簡単に消してしまった。

「なんだこの弱っちい炎は？？ 蠟燭にでも火点けんのか？？」

彼女は啞然としている。

名門常盤台中学にも50人しかいないレベル4の能力を片手で防いでしまったのだ。

「やだねえ、そうやってすぐに人を悪い奴って決めつけて来るのって。まあ間違っちゃいねえんだけどな。ハハッ！」

彼は高らかに笑って見せる。

先ほどの女子生徒は足がすくんで動けずにその場に座り込んでしまっている。

「おやおや、さっきまでの威勢はどうしたのかな？？ ハハッ！」

彼は高らかに笑って見せる。

「よう小娘、もう一回打ってみるよ？？ さっきみたいにさ、正義



気取って悪を断ってみるよ??それとも何か?? 間違えて打ってしまいました、ごめんなさい。なんて落ちか??ハハッ!」

「あ……あ……」

彼女は彼のその邪悪に満ち溢れた全てに恐れ、声を出す事も出来ない。

「俺は別に何もする気なかったのによお、攻撃しちゃって。これって正当防衛になるから何されても文句言えねえよな??」

彼はゆっくりと彼女に近づいて行く。

「い、いや……いやああ」

彼女は必死に逃げようとするが足が思うように動かずにその場に動けないままだった。

その間にも一歩また一歩と彼は彼女にゆっくりと近づいて行く。

「悪い子にはお仕置きしないとねえ」

彼は彼女に向け手を伸ばした。

「ちょっと、何やってんのよあんた!!」

その声は彼の後ろから聞こえて来た。

「か、上坂さん!」

彼女はそう叫んだ。

「おやおや、正義のヒーロー参上って感じだなあ」

彼はそう言いながら振り向いた。

「私の可愛い後輩に何やってんのよ!」

彼女の髪は怒りを現すかのように赤く染まっていた。

「おいおい、俺は何もしてねえぜ??こいつが先にやって来たんじやねえか」

なあ?? と彼女に振りかえる。

彼女は脅えたように目に涙を溜めていた。

「だから、アンタのそう言う人を見下したような眼が嫌いなのだ!」

「お前まで人を見た目で判断するのかあ??まあ間違っちゃいねえがなあ。ハハッ!」

彼は高らかに笑う。

「そう言う笑い方もムカつくっての!」

轟!! と大きな火球が彼目掛けて飛んで行く。

が、

「結構なあいさつだなあ」

彼は再びその炎を片手で防いでみせる。

「アンタにだけは絶対に負けられないの！」

「奇遇だなあ??俺もさあ！」

2人は睨みあうように向かい合う。

「今日こそ決着を付けようぜえ、コロナリオン灼熱炎帝！」

「アフソリユートゼロ臨む所よ、絶対零度！」

## 白銀の悪（後書き）

### 簡単登場人物紹介

名前・戦城明 せんじょう あきら  
イーグルアイ

能力・千浄天眼

詳細は不明

氷結能力者（ジエロキネシス） v s 発火能力者（パイロキネシス）（前書き）

4人目のレベル5登場です。

この後も続々とオリジナルの能力者は用意してありますので楽しみにしてください。

感想やアドバイスなんか頂けるとありがたいです。

氷結能力者（ジエロキネシス） v s 発火能力者（パイロキネシス）

手に作られる全てを貫くような凍て付く槍。

その槍を彼は上坂茜に投げつける。

対する上坂茜は手の平に火球を作り、その槍に向けてそれを放つ。

2つの能力は互いの丁度真ん中で相殺するように消滅した。

「アンタ、いつまで手を抜いてるつもりなのよ！」

上坂茜は自分の中にある闘争心などが全て表に出ているかのように燃えている。

赤い髪、そして体中からほどばしる灼熱の炎。

その姿はまさに灼熱炎帝<sup>コロナリオン</sup>に相応しいだろう。

「ああん?? 何言ってるんだあ?? お前の目は節穴かあ??」

それとは対照的に彼は白銀の髪、白い肌、そして何よりもその全てを凍らせてしまうかのような冷酷な瞳。

アブソリュートゼロ  
絶対零度

全て凍りつかせる氷結能力者の頂点に君臨する男。<sup>ジエロキネシス</sup>

その名は能力だけでなく彼自身の全てからその名がついたようで

あつた。

「ただ突っ込んで来るお前とは違えんだよ、その耳搔っ穿ってよく聞いてみなあ??　ありやいつたい何の音だあ??」

上坂茜はスつと耳を澄ませてみる。すると確かに何か聞こえて来るのが分かる。

そう、それはまるで何かが勢いよく落ちて来るような……

「まさか……上!!」

彼女が見上げた先には、今まさに自分に向けて巨大な氷河と言ってもよいくらいの氷柱が落ちて来ている所だった。

「……………くっ!」

上坂茜は両手を頭上に掲げるとその巨大な氷柱に向けて有りつ丈の炎をぶつけた。

「ほお、さすがは灼熱炎帝コロナリオンだあ。瞬時にあれだけの炎を作り出すたあ、やっぱりこうじゃなくちゃなあ!」

彼はその冷たくて鋭い眼を彼女に向ける。

しかし彼女はそれに動じることは無い。

上坂茜の眼はそれと同じくらい赤く、高く、そして熱く燃えている。

「アンタはいつも卑怯なのよ！ 男なら正面からぶつかって来なさい！」

ハハッ！

と、彼は高らかに笑う。

「卑怯？？ 戦術的って言ってもらいてえなあ。だが、正面から来てほしいってんならお望み通り正面から叩き潰してやるぜえ！！」

彼は言葉と同時に頭上に大量の氷柱を作りだし、それを上坂茜に向けて飛ばす。

上坂茜はそれを炎で防ぎながら彼との距離を詰めて行く。

「これでどうよ！」

彼との距離を縮めると上坂茜は大量の炎を彼目掛けてぶつける。

「グアアアアア！」

彼はその炎の直撃に合い炎の中に閉じ込められ？き苦しんでいる。

「なあんてな」

！！

しかし、その炎の中に彼の姿は無く、あるのは人の形をした氷の塊であった。



「バカかあ?? そんな炎で俺がやられると思ったのかあ??」

彼は水蒸気の力を利用し空高く舞い上がっていた。

「今度はお前がくらいなあ!!」

彼は背中を反るように両手を頭上に掲げるとそこには数えきれないほどの氷柱の姿があった。

そして、それらは太陽の光に照らされ虹色に輝く。それはまるでダイヤモンドのように。

彼はその手を勢いよく振り下ろした。

ダイヤモンドダスト  
電燕気弾!!

無数の氷柱が電の如く降り注ぐ。

しかしそれは上坂茜に近づくにつれて異様な動きを見せる。

「俺の電燕気弾は降下するにつれて燕の如く動き周り相手を四方八方から襲うぜえ?? 果たして避けれるかなあ??」

ほぼ360度から襲いかかって来る氷柱を避けることは至難の業である。

しかし、そんな状態であっても上坂茜は笑っている。

そう、笑っている。

「避けられないんだったら燃やしちゃえばいいだけの話でしょ！  
」

腕を胸の前でクロスさせ体を縮こめると彼女の体はオレンジ色に輝きだし、そして全てを放出させるように両手を横に開いた。

プロミネンスエミット  
紅炎放射！！

轟！！　と言う音と共に彼女は体から熱炎を発し、その炎は大きな円を描き、全ての氷柱を飲みこんで行く。

発せられた氷柱はまるで小さな雪のように蒸発してしまった。

「ハハッ！　やっぱりそうでなくちゃつまんねえよなあ！」

彼は笑っている。

怖い、恐ろしい。そんな言葉は彼の中に存在しない。

彼にとって戦いとは自分自身を楽しませる、喜ばせる、そう言ったモノでしかないのだ。

「さあ、もつと楽しもうぜえ。  
灼熱炎帝！」  
コロナリオン

お互いに睨みあい、少しずつ間を詰め、そして互いの距離が一定の距離を超えた瞬間、2人は弾けたように走り出す。

パンパン

「そこまでです」

不意に2人の間を割るように手を叩く音と声が聞こえる。

2人はそれに気が付きお互いに足を止めた。

「は、春名さん!？」

春名はるなと呼ばれる常盤台の制服を着た生徒は、肩まである少し青味掛かった髪を靡かせ物柔らかな雰囲気を出しつつ、2人をその包み込むような瞳で見つめていた。

「ほお、こいつあまた偉いヤツが現れたもんだなあ??」

彼は鋭い眼で彼女を睨みつけるが、彼女はさらりとそれをかわすようにニコリと微笑む。

「天雲児翔てんうんじしやうさん。どうか今日の所は引いて頂けませんか?上坂さんもいいですね?」

猶も彼女は笑顔を崩すことなく2人に問いかける。

「何言つてやがんだあ??今からがいいところじゃねえかあ」

「春名さん、こいつは後輩に手を出そうとしてたの??それを許せって言っの!??」

2人に引く気はなかった。

それぞれの理由はあるが何と言っても一番の理由は

2人は火と氷。

対照する2つの能力だからこそ負ける事が出来ない。その気持がが一番強いようだ。

「邪魔すんじゃないよ」

春名と呼ばれる生徒は小さくため息をつき、そして天雲児翔を見つめると、静かに、そして深く言葉を発した。

”平伏しなさい”

「グハッ！」

その言葉と同時に天雲児翔は地面へと叩きつけられた。

地面にめり込むように、そして、自分の意思ではなくそれは強制に近いものであった。

「チッ……相変わらず……ややこしい……能力だなあ」

天雲児翔は地面を這うように立ち上がりながら呟いた。

「今日はもう引いて頂けますね？」

彼女は笑顔のまま訊ねる。しかし、その奥には何かとてつもなく恐ろしいものを感じてしまう、そんな笑顔であった。

「分かったよ、引けばいいんだろあ?? 引けば」

そう言つと、天雲児翔は逆の方角へと歩いて行く。

「ちよつとまだ」

「上坂さん、あなたもいいかげんにしないと」

彼女が見つめると上坂茜は大人しく黙り込んだ。

「上坂さん、あなたが彼を敵対意識しているのは分かりますが、今はそんな事を言っている余裕はありません」

そして彼女はゆっくりと歩き出す。

「これから上条学院に向かいます」

「な、何で上条学院なんかに行かなくちゃいけないの??」

上坂茜は納得のいかない表情である。それもそのはず、上条学院  
アトミッククルーッ  
には原点帰還がいるからだ。

何かしら彼にちよつかいを出して来ただけにあつて少し物恥かしいようだ。

「林光一朗さんからのお願いなんです。大切なお話があると」

氷結能力者（ジエロキネシス） v s 発火能力者（パイロキネシス）（後書き）

## 簡単登場人物紹介

名前・天雲兎翔<sup>てんつんじ しょう</sup>

能力・レベル5第4位、<sup>アブソリュートゼロ</sup>絶対零度。氷結能力者の頂点。<sup>ジエロキネシス</sup>

## 会議室にて（前書き）

文章っていうのは難しいですね。何かありましたら感想お願いします。

相変わらず1話が短いです。

## 会議室にて

「一応自己紹介からしておこうかな？ 僕が林光一朗だ」

上条学院に一角にある会議室に林光一朗と神岡史貴達は集まっていた。

そして林光一朗が見る先には常盤台中学の制服を来た生徒の姿が見える。

つい数時間前に林光一朗の連絡を受け2人は上条学院へと訪れていた。

「お会いできて光栄です。林光一朗さん。私は春名星花<sup>はるな せい か</sup>と申します」

「アンタが上条学院の万有地<sup>トランスバリエート</sup>変ね。私は上坂茜よ」

見た目もそうだが、この挨拶一つでこの2人の人柄の違いが分かるであろう。

「戦城君を通してそちらの常盤台所属のジャッジメントにも連絡が行ったと思うんだけど、その子達はまだみたいだね。じゃあ、神岡君。君たちも自己紹介しておこうか」

時間があるから仕方が無く、と言った感じに聞こえなくもなかったが、初対面（上坂茜は顔見知り）と言う事で自己紹介をする。

「そうですね。ええっと俺の名前は」



「神岡史貴さん……ですよね？」

初対面だと思っていた相手に自分の名前を言われてしまったので驚き、言葉に詰まってしまった。

「あ、ああそうだけど。どうして俺の名前を？」

不思議に思い彼女に訊ねてみる。

「何度かお会いした事ありますし、それに……その……」

彼女は微妙に体を揺らし手を前でモジモジさせながら答える。その不自然な間、そして顔を赤らめるその表情の変化を彼女は見逃さなかった。

「春名さん？あなたまさか、か」

”お黙りなさい”

「んんんんんんん」

確信を突こうと発した言葉を全て言うことなく上坂茜は口を封じられたしまった。

それでも彼女は何か言葉を発しているようだが、何を言っているのか全く理解できなかった。

「ごめん、初対面だと思ってたんだけど会った事あったんだね」

「いえ、私が一方的に見たことがあっただけでその……」

彼女は下を向き赤らめた頬がばれないようにしているのだが、それが逆に沈黙を生んでしまい何とも言えない空気が流れた。

そしてその少し気まずい空気を察してか風祭竜は自己紹介を始めた。

「あ、俺は風祭竜っていいいます。第177支部所属のジャッジメン  
トで一応神岡さんの舎弟ってことになってます」

「そ、そうだったんですか!？」

「ただの先輩と後輩だ」

「そんな、酷いですよ」神岡さん

神岡史貴はさらっと言っただけだが、風祭竜の発言によってどうにか気まずい空気を脱出出来たことに感謝していた。

「……まあ、盛り上がっている所で何なんだけど」

林光一郎はそつと指をさして言った。

「その子どっにかしてあげた方がいいんじゃないかな？」

その指の先を見てみると。未だに言葉を発することが出来ずにもがいている上坂茜の姿があった。

~~~~~

それからしばらくして廊下を勢いよく走って来る音が聞こえて来た。

「すみません！遅くなりました」

勢いよくドアを開け入って来た少女は両手を膝につき、袖で汗を拭う。

私のチャームポイントはこの大きなリボンです！と言わんばかりのその小さな体には合わぬ大きさりボンが上下している。

「遅いわよ雨音唯！^{あまね ゆい}どれだけ待たせるの！？」

「すみませ〜ん、上坂さ〜ん」

今にも泣き出しそうなか弱い声で彼女は謝っている。

「九条静香^{くじょう しずか}は一緒じゃなかったの？」

「九条さんなら後ろについて……あれ？？」

後ろを振り向いたその先には誰の姿も無く、彼女はあたふたしている。

すると、

「きゃっ
」

不意にドアの近くに飾ってあった何かしらの写真立てが上から落ちてきた。

そしてその写真立てが落ちて来た事を確認するかのように彼女はゆつくりと部屋へと入って来た。

「九条さん何してたんですか？急にいなくなってしまうてびっくりしちゃいましたよ」

「……………危ないから」

と、彼女は先ほど落下してきた写真立てを指さす。

「未来予知能力？」

神岡史貴は彼女の方を向き質問するが

「……………」

質問の答えが返って来ることもなくただ見つめて来るだけの彼女に神岡史貴はどうして良いか分からない状態であった。

「ドリーミング先行感覚と言う能力です。未来予知ではなく、数秒先を感じ取る力のようです。心配しないで下さい、彼女は極端に無口なだけですから」

彼女の代わりに春名星花が説明をする。

「静ちゃんどうして私には教えてくれなかったんですか？もうちょっとで直撃でしたよ」

「……………言った」

「聞こえなかったですよ」

「……………言った」

「聞こえなかったら言った事にならないんですよ」

「……………言った」

「そろそろ本題に入ってもいいかな？」

言ったの一点張りの九条静香に対して聞こえなかったの一点張りの雨音唯。

そんな2人の争いを見るに見かねた林光一郎は2人の間に割って入るように質問する。

「す、すみませえ〜ん」

大きなリボンを弾ませるように深々と謝る雨音唯。もちろん九条静香はと言うと、無言のままペコリと頭を下げただけであった。

「皆に集まってもらったのは外でもない、学園戦争の件についてだ」

そう言って林光一郎は説明を始める。

「皆も知っていると思うけど、既に入条学院の神岡君が霧ヶ丘女学院の風力使い（エアロマスター）に襲われて、常盤台中学の上坂君

も長点上機学園の絶対零度と一戦を交えている。今回は無事で済んだけど次は相手も全力で来るだろうし話し合いで済むような相手でもない」

つまり

「要するにこちらは上条学院と常盤台中学が手を組んで打って出ようと言う訳だ」

会議室にて（後書き）

簡単登場人物紹介

名前・春名星花 はるな せいか

能力・まだ不明

どうやら神岡史貴に好意があるもよう。

名前・雨音唯 あまね ゆい

能力・まだ不明

大きなリボンが特徴。身長は低い方。

名前・九条静香 くじょう しずか

能力・レベル3、プリマリート先行感覚。数秒先を感知する能力。未来予知のようにはつきりと見える訳では無く、危ない気がする、と言った程度である。

終始無言で発言があったとしてもほとんど主語がない。

上常連合（前書き）

アクセス3000突破と言う事で、本当にありがとうございます。
お気に入り登録者は全然ですが、その辺は自分の実力不足と実感しています。

これからも少しでも楽しんで頂けるように頑張りたいと思います。

上常連合

「でも霧ヶ丘女学院と長点上機学園の両方を攻めるとなると骨が折れますね」

「そうよねーアンタ同じレベル4に完膚無きまでにやられそうになったって話だもんねえ」

両腕を胸の前で組み、難しそうな顔で答える風祭竜に対して、上坂茜は皮肉たつぷりと言った感じで風祭竜を見る。

「あ、あれは……まあ……そうだけどさ、つ、次は負けねえ！」

「一体その自信はどこから来るのよ」

全くの根拠のない風祭竜の自信に上坂茜は呆れた表情で首を傾げている。

「で、会長。どうやってこっちから仕掛けるつもりなの？」

それがあまりにも自然過ぎてそのまま流してしまいそうになったが、さすがにそう言う訳にはいかずとりあえず訊ねてみる。

「何でお前が会長って呼んでるんだ？」

林光一朗の事を会長と呼ぶのは上条学院の生徒だけであって他校の生徒がその名で呼ぶ事はまず無かった。

「いいじゃない別に。こっちの方が手っ取り早いのよ。で、どうするつもりなの？」

神岡史貴の質問をサラッと流し、彼女は質問を続ける。

実際に年上に対して敬語一つ使わないと言うのはおかしい事であるが、彼女の性格上そんな事を言っただとしてもさっきのように簡単に流されてしまうだろう。

「向こうと同じような手を使おうと思ってるんだ」

「ええっと、同じような手って言うと」

風祭竜は頭に『？』を浮かべている。

「相手のリーダー格、つまりレベル5をやつつけるってことだよ。」

「つまり、相手のレベル5をやつつけてしまうことで学校の士気を失くしてしまおうと言うことですね」

「その通りだよ春名くん。ただ大切な事は学校全体を巻き込まない事だね」

ここは特に重要です。そう言いたげに林光一郎は念を押す。

「僕たちの目的はあくまでもこの学園戦争を終わらせることであって、彼らのように強さを示すことじゃない」

「要するに、それ以外の低能力者や強能力者を巻き込んでしまっただけは向こうと何も変わらないってことだね」

うん。と林光一郎は頷く。

「よし。会長、僕は霧ヶ丘女学院に行かせて下さい」

リベンジ、そしてアイスの恨み、そう言った事の為に風祭竜は志願したと言っても良いだろう。

しかし

「悪いんだけど、今回は僕、神岡君、春名さん、上坂さん。この4人でやるうと思ってているんだ」

「え、じゃあ僕たちは何をするんですか？」

「残ったメンバーを見て分からないかな？」

そう言われて風祭竜は残ったメンバーを確認するように見渡す。

残ったメンバーをは風祭竜、雨音唯、九条静香。

このメンバーを見て思いつくモノ、それは

「……ジャッジメントですね」

彼ら3人は第177支部所属のジャッジメントである。

「ってことは、ジャッジメントとして行動するってことですね。」

「そう言うことだね。18学区の二の舞にならないように最善を尽くしてほしいんだ。」

「そう言うことなら……仕方ないですね。じゃあ名前だけでも決めていいですか？」

ほぼ全員の頭に？マークを付ける事が出来るくらい、だれもがその意味を理解出来ていなかった。

「だからチーム名ですよチーム名」

その言葉に何となくではあるが、言いたい事が分かって来たのだが

「何の為にそんなの付けないといけないのよ」

発言したのは上坂茜であるが、思う事は皆同じであろう。

「だってこの学園都市でこれだけのメンバーが揃う事なんて二度とないですよ??」

そう言われてこちらでもそれぞれメンバーを見渡す。

錚々たるメンバー

上条学院のレベル5

第7位、トランスバリエート万有地変の林光一郎。

第3位、アトミックルーツ原点帰還の神岡史貴。

常盤台中学のレベル5

第5位、コロナリオン灼熱炎帝の上坂茜。

そして

第2位、エクセクトヴォイス強制執行の春名星花。

学園都市に7名しかいないレベル5の内4人がここに集まっていた。

「分かったわ。で、どんな名前なの？」

「上常連合」

.....

あまりの捻りの無さに啞然とする上坂茜。

「何？そのセンスの無い名前は！？それに読み方なんて上条そのま
まじゃないのよ！」

「まあいいんじゃないかな」

その発言に神岡史貴はギロつと上坂茜に睨まれる。

「別に名乗る訳でもないんだし、春名さんはどうかな？」

「私は神岡さんが良いつて仰るなら.....」

「春名さんまで???じゃあ会長はどうなの?」

「まあ別に僕はあまり気にしていないんだけど、結束を高めるってことでそう言った名前を付けてもいいんじゃないかな?」

最早みんなにそこまで言われてしまつては反論をすることが出来なかった。

「……分かったわ、じゃあそれにしましょ」

「じゃあ上常連合つてことで」

今ここに上常連合が発足された。

「それじゃあ、上常連合の作戦についてだけど」

と林光一郎は早速上常連合の名前を使っている。

「僕たちはまず霧ヶ丘女学院に乗り込む」

「て事は、1人のレベル5相手にこっちは4人で戦うってこと?」

上坂茜は不思議そうに訊ねる。

霧ヶ丘女学院にはレベル5が1人。その1人に対してレベル5が4人も行く必要があるのか？と言うのが上坂茜の意見のようだ。

「彼女の周りには四天柱ニユースと呼ばれる4人の風力使い（エアロマスタ）レベル4がいるからね。それを考えるとみんなで行かざるを得ない」

霧ヶ丘女学院四天柱。

レベルは4とされているが、その力は限りなく5に近い4である。

「そう言う事なら仕方ないわね。で、作戦開始の日時はどうするの？」

「作戦決行は明日の午前9時。その時刻に僕たち上常連合は霧ヶ丘女学院に乗り込む」

「それまでに相手から仕掛けて来たらどうするのよ？」

「それについては大丈夫だと思うよ。今朝仕掛けて来て同じ日にもう一度って事はまず無いだろう」

それに、と林光一朗はお決まりのポーズと取って言う。

「何かあれば戦城君から連絡が来るようにしてある。だから僕たちが今すべきことは明日に向けて準備をすること。休養も大切だからね」

「じゃあ自分たちは同時刻に177支部に集まってジャッジメントとしての任務に当たりたいと思います」

「そうしてもらえるとありがたいよ」

そうしてしばらくした後、作戦会議は終了し解散となる。

~~~~~

「で、神岡さんはどうすんですか？」

帰り道、風祭竜は不意にそんな事を訊ねてみる。

「どうするって何をだ？」

「いやあ、春名星花と上坂茜どっちにするのかな？なんて思っただけです」

「はあ！？」

言っている意味が分からない。そんな表情で神岡史貴は風祭竜を見る。

「春名星花は見ていて分かったと思いますが、きっと神岡さんのこと好いてますよ」

「なっ……」

自分でも何となくではあるが今日数時間一緒に居ただけでそんな気がしなくもないと感じてはいたが、改めて他人から言われるとも照れくさいことである。

ただ上坂茜に関しては全くそんな気配が無かったため、なぜ彼女の名前が出て来たか分からない状態であった。

思い起こして見たとしても出て来るのは、ただ単に追いかけて回されたことだけである。

「何で上坂まで出て来るんだ？」

チツチツつと風祭竜は人指し指を立てて横に振る。

「いいですか、あれはきつと俗に言われる、ツンデレ、てヤツです。いつも神岡さんを追い回しているのもきつと好きって言っ気持ちの現し方だと思うんですよ」

はあ、とため息をついて神岡史貴は答える。

「あれはただ単に俺が気に入らないだけだろ？　って言うかそんな事考えてる暇があるならさっさと帰って会長に言われたように寝ろ」

（ほんと、鈍感な人だなあ）

「待って下さいよお」

そう言いながらさっさと歩いて行ってしまう神岡史貴を風祭竜は追いかけて行く。

まだ夏の暖かい風が吹く町を歩いて行く2人。

明日は霧ヶ丘女学院との対決である。

## 上常連合（後書き）

いよいよ残りのレベル5の能力も明らかになって来ます。

## 風の支配者（前書き）

いつもありがとうございます。

ポイントはなかなか増えませんが、これから増えるように頑張っ  
て行きたいと思います。

いよいよ霧ヶ丘女学院との対決です。

何かありましたら感想いただけるとうれしいです。

## 風の支配者

朝、夏の日差しが照りつける中、彼らは第7学区の外れにある古びた建物の前にいた。

古びた建物は昔何かの工場だったのか、大きなクレーンやスクラップになった器械の数々が風化している。

「本当にこんな所にいるの？」

その工場を前にして上坂茜は心配そうに訊ねる。

「戦城君の情報は一度たりとも外れた事がないんだ。彼らはここにいる」

昨日結成された上常連合のリーダーとも言える存在の林光一郎はそう答える。

上坂茜が心配になるのも無理はない。彼女はついさっきまで霧ヶ丘女学院のある第18学区に行くと思っていたのだ。

しかし言われるがままに来てみればこの古い工場。

こんな場所に相手がいるのかどうか不安になるのは仕方ない事だろう。



「つまり相手も最小の人数で仕掛けて来るつもりだったのでしょうか？」

「それは分からないけど、ただ1つ言える事はここに霧ヶ丘女学院のレベル5と四天柱ニコーズと呼ばれる風力使い（エアロマスター）がいると言っ事だね」

そう言って林光一郎はゆっくりと敷地内に入って行く。

建物は大きな敷居に囲まれており、大きなトビラの前に広場がある。

その広場の真ん中辺りに差し掛かった時、不意に林光一郎は足を止めた。

「どうやらお出迎えのようだね」

林光一郎は見つめる先には霧ヶ丘女学院の制服を纏った生徒3人の姿が見えた。

「何やら気配がしたと思って来てみれば、まさか上条学院と常盤台中学が手を組んでいようとはな」

長い髪を揺らし桐裂真琴は言った。

「おかしいな、四天柱<sup>ニユース</sup>は確か4人じゃなかったのかい？」

そう、霧ヶ丘女学院にはレベル5とそれに仕える4人の風力使い（エアロマスター）がいる。

しかし現に今日の前にいるのは3人、1人足りないのだ。

「ああ、樹里の事が」

そう彼女は言った。

樹里とは先日神岡史貴が戦った相手の名前である。

「彼女は戦線離脱だ。どうやら原点<sup>アトミック</sup>帰還から受けた傷が完治していないようなのでな」

確かにあれだけの腹部の骨折はそう簡単には治らないだろう。

「神岡君、ここは僕と春名君で引き受けよう。君と上坂君は先に行きなさい」

スツと林光一朗は手を横に出した。

「でも会長、相手は3人ですよ。ここは全員で戦った方がいいんじゃないですか？」

「それでも僕らは学園都市に7人しかいないレベル5。心配は無用だ。なに、すぐに追いついてみせるさ」

会長がそこまで言うなら、と神岡史貴と上坂茜はその場を2人に任せて走って建物の中へと入ろうとする。

「そうはさせん」

桐裂真琴は扇を手に取りそれを広げる。

「邪魔なのよお!!」

それよりも速く上坂茜は手から炎を出し彼女らを囲うように高く炎の壁を作った。

「今の内に行くわよ!」

「ああ」

2人は建物まで走り大きなドアの前に到着する。  
そしてその大きなドアを開け建物の中に入っていた。

そのドアが閉まると同時に強い突風が林光一朗と春名星花を襲う。  
2人は手を額の前に持っていていきそれを防いだ。

「瞬時にこれだけの炎を作り出すとは、さすがレベル5と言ったところか」

空高く燃え上がっていた炎はその突風によって次第に弱まり、中から3人の姿が見えた。

「2人になってしまいましたけど、どうします？ ジャンケンでもします？」

緑がかった髪にメガネをかけた彼女は言った。

「アホやなあ、そんなんやってたら樹里と同じ目に遭ってまうで。  
ここは3人で一気に行くべきやろ」

制服の裾を胸元で結び、大胆にも臍を露出した彼女は関西弁で答

えた。

「その通りだ風音。小麦の言う通りここは3人で行くべきだ」

「そうでしたわね、相手はレベル5。油断なんてできませんわね」

そう言つと3人は攻める態勢を取り始める。

「それでは参ろう。私は四天柱ニユースが1人、北風拔刀桐裂真琴ソニックブーム」

「同じく南風封陣ハードブラストの月見風音つきみ かざねですわ」

「同じく西風造形の荒井小麦ゲイルアート あらい こむぎや」

そして3人は勢いよく走りだす。

「四天柱ニユース参る！」

「四天柱行きますわ！」

「四天柱行くぜえ！」

~~~~~

先ほどドアを開け中に入った2人。そこは大きな倉庫の様であった。

窓ガラスはほとんどがひび割れており、天井も所々穴が空いている。強風でも吹いたらそれこそ飛んで行ってしまいそうなほど。

そんな場所をしばらく歩いていると大きな踊り場が見えてきた。

窓ガラスは全て無くなり、フレームだけが綺麗に残っている。

そしてその踊り場の手すりにもたれ掛かるようにして彼女はいた。

「良い風じゃ」

彼女はガラスの無くなった窓から入ってくる風を全身に受け止めているようであった。

「この場所は風通しが良くて良い気持ちじゃのう、そう思わんか？」

肩までかかる漆黒の髪を靡かせ、そう訊ねてくる。
もちろん神岡史貴と上坂茜に対してであろう。

「アンタが霧ヶ丘女学院のレベル5ね！ さっさと降りて来なさいよ！」

上坂茜は吠えるように言う。

「うるさい小娘じゃのお、見た所常盤台中学の者のようじゃが、年上に対しては敬語と言うモノを使うものじゃぞ」

確かにその通り。

と、神岡史貴は彼女の言葉に思わず納得してしまった。

「下りて来ないんだったら」

上坂茜は右手に直径1メートルほど炎の球を作り

「無理やり下ろしてあげるわよ！」

それを彼女に向けて投げた。

その火球は彼女目掛けて一直線に飛んでいく。

避けなければ直撃。

そんな状況になっても彼女は眉一つ動かそうとしなかった。

轟！！ とその火球は彼女に直撃する。

その炎は彼女ごと辺りの手すりや壁をも燃やしてしまうようであったが

「ほう、お主が灼熱炎帝「コナリオ」じゃな」

と彼女に当たった火球は風に流されるように消えてしまい、そしてそこには先ほどから全く態勢を変えない彼女の姿があった。

「炎の熱量、質、共に素晴らしいものじゃ」

彼女の周りを見ると、彼女から30？ほど離れた所の手すりは融けて曲り、下の壁にもしっかりを焦げた跡が残っている。

しかし彼女から30？以内の場所は全く変わることなく原形を留めていた。

「これならどうよー」

上坂茜は巨大な炎の槍を作り出すとそれを相手目掛けて投げつける。

しかし

その炎の槍は彼女の目の前で消滅してしまった。
それもまるで見えない何かに当たって消えたかの様に。

「ウィンドブレイカー 妾の風流障壁にその様なモノは無意味じゃ」

と彼女は言う。

「じゃが、先ほども申した様にお主の炎はなかなかじゃ」

「別にアンタに褒められても全然然うれしくないっての！」

上坂茜は怒りを全開にしメラメラ燃えている。
隣に居れば熱いの一言だ。

「お主は妾に降りて来て欲しんじやったの？」

そう言っ て彼女は踊り場から何の躊躇いも無く飛び降りる。

そして着地する直前に地面から砂埃が舞うと、彼女は音すら鳴らないほどゆっくりと地面に立った。

「ほれ、降りて来てやったぞ。次は何をすれば良いのじゃ？」

「次？ そんなの決まってるじゃない」

上坂茜は自分の体が燃えるほど熱を発しながら吠えた。

「私たちと勝負よ！！」

フッと彼女を笑顔を作って答える。

「良かるう。相手になってやろうぞ」

風の支配者（後書き）

簡単、ニユース四天柱の紹介

いずれも風力使い（エアロマスター）のレベル4

名前・きりさき まこと桐裂真琴

能力・ソニックブーム北風拔刀。カマイタチ拔刀風を得意とする。

黒髪の長髪でいつも扇を持ち歩いている。

名前・つきみ かざね月見風音

能力・ハードブラスト南風封陣

緑掛かった髪のメガネっ子。

名前・あんどう じゅり安藤樹里

能力・ソニックエクスバンド東風掌握。空気を触ったり圧縮させる。

短めのポニーテール。飴が大好物。

名前・あらい こむぎ荒井小麦

能力・ゲイルアート西風造形

制服の裾を胸元で結んでいる。しゃべり方は関西弁。

お気づきかもしれませんが四天柱は東西南北の4つの風を表しています。名称も能力から付けてありますので大体は予想できるかと。読み方のニユースもそれぞれの頭文字を取ってつけてあります。もともとはアネモイだったのですが、ある理由で変えさせて頂きました。

もちろんアネモイにも名前の由来も意味もありました。その理由も後々分かって来ると思います。

vs 四天柱（ニュース）？（前書き）

ユニーク1000人突破いたしました。ありがとうございます。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

いよいよ6人目登場です。

vs 四天柱（ニュース）？

大きな砂埃が舞い上がる中に2人の姿はあった。

彼らの視界は砂埃に遮られ、ほとんど何も見えない状態である。

そんな彼らに無数の刃が襲いかかって来ると同時に吹きつける突風が埃を払い飛ばす。

「どうやら上条学院の生徒は逃げる事が好きな様だな」

晴れた視界の先には身構えるように立つ3人の姿がある。

「逃げてばかりでは話にならんぞ」

そう言って桐裂真琴は扇を振るい風の刃を林光一郎を目掛けて飛ばして来る。

それを回転するように林光一郎は避ける。

「これでもくらいなあ！」

荒井小麦は風で両手に槍を作り出すとそれを林光一郎に投げる。
風を突き破るように飛んで来る槍はアートと呼ぶに相応しいほど
綺麗に切り抜かれた槍のようで、そして切れ味は本物を凌駕するほ
ど研ぎ澄まされている。

ゲイルアート
西風造形の彼女だからこそ出来る、風の如く磨き抜かれた槍と言
えるだろう。

しかし林光一郎はそれを避ける。
大きな動作では無く、小さく最小限の動きだけでその槍をかわす。

「これでどうですの」

さらに月見風音は風の渦を作り林光一郎に放つ。
彼女の能力は風の渦を作りそれを利用することによって攻撃もで
き、相手をその渦に閉じ込める事も出来る。そしてそれを利用して
自分を守る防御壁を作る事も可能だ。

しかし、彼女が放ったそれもやはり避ける。

「ちっ、すばしっこいヤツだ」

四天柱の攻撃を尽く避け続ける林光一郎。

しかし、その額には一滴の汗すら見えなかった。

「風祭君ほどではないけど僕も動きには自信があつてね」

と林光一郎は微笑んでみせる。

「なら、これならどうか？」

3人は集まり同時に技を放つ。

荒井小麦が投げた風の槍を囲むように桐裂真琴は抜刀風放つ。カマイタチそしてそれらを覆うようにして月見風音の風の渦が放たれる。それらは相乗効果によってスピードを上げ林光一郎を襲う。

しかし

それをも林光一郎は紙一重の所で避けてみせた。

「今のは多少危なかったよ」

それでも林光一郎は表情を変える事なく彼女らの前に立ちふさが

る。

「どうやら本当に避けるのがうまいようだな、しかしいつまでそれが持つかな？」

そして再び彼女たちは先ほどと同じ態勢を取り攻撃を仕掛けようとする。

「もう良いだろう」

不意に林光一朗はそんな事を言い出した。

何を言っている？

そんな感じで四天柱の彼女らは林光一朗を見ていた。

「君たちの実力は大いに分かった。さすがはレベル4」

だけど、

そう言つと林光一朗はメガネを外し胸ポケットへとそれをしまつ。

「所詮はそのレベルと言うことだよ」

明らかに雰囲気が変わった、それだけは確かである。
しかしながら何かを仕掛けてくる、そう言った気配は感じなかった。

「何が言いたい？お前は先ほどから避けるのに精一杯だったではないか」

そう、林光一郎は最初から避けることしかしていないのだが、それを精一杯だったと捉えるのは間違っているかもしれない。

「そうだね、僕はさっきから君たちの攻撃を避ける事しかしていない。でも考えてみてはどうか？」

それは難しいことではない、むしろ簡単なことだ。
今までの林光一郎を見ていれば一目瞭然の事。

「君たちは”能力を使っていない”僕に対して一度たりとも攻撃を当てていないんだよ？」

その言葉の意味を理解するのに時間など必要なかった。
今まで林光一郎は身体能力だけで3人のレベル4の攻撃を避けて

いたのだ。

つまり、もう良いだろう、と言うのは

「様子見もここまでにしよう」

そう言う意味であった。

「今まで避ける事しかなかったのは私たちの力を測るためだった
と言いたいんだな？」

「そう言うことになるね」

彼はきっぱりと言った。

相手にしてみればこれほど屈辱的なことはないだろう。

何せ目の前の男は自分たちの攻撃を汗一つ流すことなく避けながら
力を測っていたのだ。

それも能力を使うことなく。

「そろそろ行くでしょうか、ねえ春名君」

「……わ、私今まで完全に忘れられていましたよね??」

少し落ち込み気味のトーンで春名星花は呟いた。

本来ならば3対2の場はずがいつの間にかそこは3対1の場になってしまっていた。

「忘れていた訳ではない。この場にいるレベル5の存在を忘れるほど私たちはレベル5を甘くは見ておらん」

それはまるで彼女を慰めているように聞こえた。
しかしそれは違う。彼女はただ理由を述べようとしただけに過ぎない。

「アンタには15メートルほど距離を取っていれば問題ないって言う情報やからなあ、その距離を保ちつつこの男と戦ってたつちゅう訳や」

どんな能力にも弱点と言われるモノがある、それはレベル5第2位であったとしても例外ではない。

彼女の場合は約15m、それがボーダーラインなのだ。

「なるほど、それは良い事を聞きました。ではその距離を失くしてしまえば春名君は思う存分能力を使えると言う事ですね」

林光一朗はお決まりのポーズを取りながら春名星花へと近づいて行く。

そして彼女に近づくと林光一朗は春名星花の肩を軽く掴む。

（何を……まさか！？）

林光一朗は軽く微笑む。

「さあ、行こうか春名君」

カマイタチ
抜刀風！！

桐裂真琴はそれに気が付き瞬時に抜刀風カマイタチを放つがそれは手遅れであつた。

既に彼らの姿はそこに無かつた。

桐裂真琴は必死に辺りを見回すがそんな事をしても無駄なことくらい分かっている。

「ちっ、みんな散り」

” 止まりなさい”

「くっ……」

3人は金縛りにあったようにその場から動けなくなってしまった。足を動かそうとしても、腕を動かそうとしてもそれらは反抗期のように言う事を聞かない。

「見えない相手に距離を保つことは難しいからね」

と林光一郎と春名星花は3人の前に突如として姿を現した。

「こ、これがレベル5の力……」

唯一動く口を使って何とか桐裂真琴は言葉を発した。

「悪いけど先を急ぐんでお昼寝の時間だ」

林光一郎は1人ずつ後頭部と首の境目辺りを下から突き上げるように叩き気絶させていった。

「会長は何かやられていた方なんですか？」

あまりにも慣れた手つきでそれを行う林光一郎を見て春名星花は訊ねてみた。

「僕の場合は春名君の様に相手に何かしらの影響を与えるモノでもないし、上坂君の様に炎を生みだしたりするモノじゃないからね、もしもの時の為に自分自身を鍛えていた、と言う訳だよ」

そして林光一郎は建物を指さす。

今あの中では神岡史貴と上坂茜が戦っているであろう。

すぐに行くと言ったからには少しでも早く行かなければならない。

そう言って2人は建物へと向かうのであった。

のだが、

！！

突如今から向かうはずの建物の屋根が下から叩きだされるようにして砕けながら飛んで行った。

そして下から突き上げるように大きな竜巻とも言えような風が建物の中から空高く舞い上がっているのが見えた。

「急いだ方が良さそうだね」

はい。っと春名星花も頷き建物を目指して走り始める。

そして、林光一郎と春名星花が建物のドアに近づいた時ドアから勢いよく転がるように2人が飛び出して来た。

「アンタ！ 何で私の時みたいに、バシュって感じにやんないのよ！」

「バカ言っな！ あんなに一杯物が飛んできて俺の能力が使えるか

！」

その飛び出してきた2人は尻餅をついたまま何か言い争っている様子で、林光一朗と春名星花に全く気が付いていない様であったが、ふと前を向いた所で神岡史貴は2人に気が付いた。

「やあ、神岡君と上坂君」

と林光一朗は何気ないあいさつを試みるが、神岡史貴は慌てた様子で答える。

「会長！　一先ずこの建物から離れて下さい。この中じゃ相手に有利過ぎます！」

と言って建物から離れようとする。

瞬間にドアの向こうから竜巻の様な風が押し寄せて来た。

突然襲いかかって来たそれに一同は驚くが、4人はそれを左右に分かれるようにかわし、そして中から来るそれに身構える。

「外も良い風じゃ」

建物から出て来た彼女はまるで大自然に来てその空気思いつきり
吸う様に大きく息を吸うとゆっくりと息を吐く。

そして彼女は腰に片手を当て、片足に体重を乗せた姿勢で4人を
見渡している。

「レベル5が4人も居ろうとは、これはちと計算違いじゃのお。四
天柱には少しばかり荷が重すぎたと言う訳じゃな」

「アンタ、外に出たからには容赦しないわよ！」

上坂茜はそんな彼女に向かって吠えている。

「お主はさつきからうるさいヤツじゃのお。ちと黙っては居れぬの
か？」

それに対しても更に食って掛かりそうな勢いの上坂茜を神岡史貴
は一生懸命宥めている。

「お主ら2人にはどうやら四天柱が世話になったようじゃのお？」

その言葉は林光一朗と春名星花に向けられたモノだった。

「君が霧ヶ丘女学院の刀場亜紀だね」
とほあき

「如何にも、妾は霧ヶ丘女学院のレベル5、
デヴィルストーム超神旋風の刀場亜紀じや」

序列の差？（前書き）

今回は自分で何書いてるか分かりませんでした……ご了承ください。

序列の差？

「4対1。それも悪くないのお」

彼女はそんな状況でも表情を曇らせることなく4人を見渡している。

「何が4対1よ、アンタなんて私1人で十分よ」

「お主とはもう先ほど中でやったであろうが」

「あんなのアンタが中の物を四方八方から飛ばしてただけじゃない」
「！」

やれやれ

と刀場亜紀は手を横に広げて首を傾げている。

「良かるう、今一度相手をしてやろうぞ」

「そんなデカイ態度取れるのも今の内よ！」

上坂茜は勢いよく走りだすと頭上に数十個の火球を作り出す。
一つ一つの大きさは直径20?ほどだが各々が摂氏1000度の
炎。触れれば火傷程度では済まない代物である。

もちろん触れればの話。

上坂茜が放ったそれを刀場亜紀はその場を動く事無く突風を起こ
しかき消してしまう。

「お主も懲りんヤツじゃの、そんな炎では妾は倒せぬぞ」

「アンタだってもう物が無いんだから何も出来ないんでしょ!」

「ホントにそう思っのか」

ギクリ、と。その彼女の目に上坂茜は少し気押された。

「妾よりもレベルが下の四天柱ニユースでさえ風の刃を操り、風の渦を巻き
起こし、風を造形させ、風に触れる事ができるのじゃぞ?妾がそれ
よりも劣るはずがなかつ」

彼女は手を軽く上げるとそれを手刀の様に振り下ろす。

トラジディーゲイル
悲劇乃拔刀！

彼女が放った一振りは上坂茜には当たらずにを上を通り過ぎ、敷地内にあった建物へと向かって行った。

「何よ、どこ狙っ
」

しかしその刃はあろう事かその5階建ての建物を一刀両断の如く貫き、大きな音を立てて建物の上部は崩れ落ちて行った。

「ワザと外したと言っておこうかのぉ。
」

そう言っただけで彼女は上坂茜を見る。

上坂茜はそんな彼女を見て冷汗以上の何かが頬を伝って行った気がしたが、それらを全て取り払うように真っ赤に燃えた。

何よりも

「ワザと外してやった」
その言葉に怒りを覚え、そしてその怒りを全て爆発させていた。

「外した事　後悔させてやるわ!!」

上坂茜は右人差し指を頭上に掲げた。

「私はねえ、どっちかと言うとバカでかい炎を作ってぶっ放す方が好きなの」

そう言いながら彼女の指先には10mを超す巨大な火球が完成していた。

「だってそっちの方が気持ちいいじゃない。でも」

その炎は次第に圧縮される様に人差し指に集まって行き、それは1cmほどの光の玉になった。

「それをここまで圧縮すればどうなると思う？　その威力は数倍に膨れ上がりプラズマを帯びて速度は音速以上になるの」

彼女は左手を手首に添えて刀場亜紀に向けて構え、そして彼女はトリガーを引くようにそれを放った。

コロナレーザー
光球熱弾！

上坂茜が放った光の球は砂埃を巻き起こしたかと思うと瞬時にして刀場亜紀に命中し、轟音と共に大きな火柱となって彼女を飲みこんだ。

光の球が走った後は空気や地面、全てを焼いてしまったように黒く焦げ煙を上げている。

「これでどうよ」

彼女はその炎を見つめている。

自分の最高の技をヒットさせ、灼熱の炎の如く燃え盛るその火炎の中で大丈夫なはずがない。

彼女は竜巻の様に渦を巻き舞い上がっている炎を見て、そう確信を……

竜巻？

彼女はふと考えた。

自分の炎は確かに火柱を立てる事はあるがあんなにも綺麗な渦を巻くはずがない。

そして彼女が再びその炎に目をやった時、

「う、嘘でしょ……」

その竜巻のように燃え上がっていた炎はいつも間にか本物の竜巻になっていた。

「そんな技があつたとは、少々お主の事をなめ過ぎていたのかも知れんのお」

刀場亜紀はその竜巻の中から出て来た。

しかし無傷と言う訳では無く、制服は燃え所々肌が露出している。

トラジデーストーム
悲劇乃爆流！

姿を現すや否や彼女は手に風の渦を発生させ上坂茜に向けてそれを放つ。

「……ッ！」

上坂茜は瞬時に目の前に炎の盾を作り出しジリジリと後退しながらもその風の渦を防ぐ。

しかし炎の盾は少しずつ削られるように小さくなり、その炎が消えてしまうのは時間の問題であった。

「満足したか？」

ハッと上坂茜は後ろを振り向く。

「……何よあんた……邪魔しに来たの？」

「もう意地を張るのは止めろ、実力の差は十分に分かっただろ？」

そして神岡史貴はその風の渦に触れる。

するとその渦は風船をしぼませる様に消えてしまった。

「それに上坂、お前1人ではアイツに勝てない。それに俺たちはそんな事をしに来たんじゃない。こいつを止めに来たんだろ」

歯を強く噛みしめる音が聞こえた。

そう、最初に戦った時点で薄々気が付いていたのかもしれない。自分1人では勝てないことくらい。

そしてやらなければならぬ事くらい分かっている。

でも認めたくなかった、認める訳にはいかなかった。

「何で？ どうして？ 私はレベル5第5位の灼熱炎帝コロナリオンよ！ 何で第6位のアイツに負けないといけないの！」

評価が自分より下の相手に負ける事は自分のプライドが許さなかった。

「そんな事決まっておろう。妾よりお主の方が弱いと言つことじゃ」

「そんなのありえない！ 序列は私の方が」

「ならば聞こう。序列と言つものは一体誰が決めたのじゃ？」

「そ、それは……」

「ならば聞こう、お主はその序列に満足しておるのか？ 妾は実に不愉快じゃ。現にこうして戦ってみれば一目瞭然であろう？ レベル5のお主等なら分かるはずじゃ、能力者なら自分の実力が知れた」と

「だからこんな事をしたと言っのか？」

「そうじゃ、妾も機会を窺っておったのじゃ。妾の実力を見せつける為に、霧ヶ丘女学院の実力を見せつける為に」

無意識の内に拳を強く握りしめていた。

「お前は学校の為とか言ってるが実際はそんな事一切思っちゃいねえ！ 本当に思っているならこんなバカげた学園戦争なんかに乗しねえハズだ！ それこそ自分の為だけを考えているバカやろうだ！」

だからこそ、許せなかった。

自分の為、そんなモノの為に関係の無いモノまで巻き込んだ彼女が。

「俺らが更生してやるよ、その頭ん中」

序列の差？（後書き）

簡単登場人物紹介

名前・刀場亜紀^{とほあき}

能力・レベル5第6位、^{デヴィルストーム}超神旋風。風力使い（エアロマスター）の
頂点。

自分の事を妾と呼ぶ。

展開速すぎの会話ばかり、
自分の実力不足です。もっと色々な人の小説を読んで勉強せねば

上常の一撃（前書き）

またまた何書いてるか分からなくなりがちでしたが……

それでもいいって方はどうぞご覧になって下さい、

上常の一撃

無数に飛び交う巨大な風の刃。

林光一朗はそれを一つ一つ確実に避けて行く。

上坂茜は自分の炎の盾を使用して辛うじてそれを防ぐのがやっとである。

神岡史貴は春名星花を守るようにしてその刃を防いでいた。

四天柱の時には汗一つ流さなかった林光一朗ですら薄らと汗を浮かべて来ている。

つまり刀場亜紀は四天柱の3人を同時に相手するよりも強いと言うことになる。

何よりも4人にとって相性が悪すぎる相手なのだ。

「風は素晴らしいと思わんか？」

風の刃が止み、刀場亜紀は語りかけるように4人に対してそんな言葉を投げかけて来る。

「炎を消し、氷を砕き、大地を削り、そして大空を支配する。これほど素晴らしい能力はないじゃろう?」

一步一步と彼女は近づいて来る。

力の差を見せつけるようにその足取りは軽く、態度を威風堂々としている。

「春名さん、会長の所に行っていてくれないか?」

不意にそんな事を神岡史樹は言った。

「どうしてですか?」

「俺に考えがあるんだ。だからもしもの為に会長とスタンバイして欲しんだ」

「分かりました」

そして春名星花は林光一朗の所へ向かおうとするが

「何をしようと無駄じゃ!」

それを阻止するかのように刀場亜紀は風の渦を春名星花に向かって放つが、神岡史樹は瞬時に春名星花の前に立ち手で触れそれをかき消す。

「上坂！ アイツとにかく何かぶっ放せ！」

神岡史樹は少し離れた場所にいる上坂茜に目掛けて叫んだ。

「何かって何よ！？」

「何でもいい！ 公園の時のヤツみたいなんでいいから！」

上坂茜は言われるがままに公園を丸焼きにした時のように巨大な火球を作り出すと、それを刀場亜紀目掛けて叩きつけた。

「これでいいんですよ！」

轟！と言う音と共に10mはあろう火球が刀場亜紀を襲う。しかし、刀場亜紀は避けようとせず炎に飲み込まれた。

そしてその間に神岡史樹は上坂茜の所へ辿りついていた。

「でかした、あれでいい」

「一体何なの？」

上坂茜は状況を理解出来ずに戸惑っている。
今まで尽く防がれてきた炎をいまさら撃った所で何も変わる事はない。

「いいか良く聞けよ」

「そんなモノは無意味じゃと分かんのか」

風の壁で炎を防いだ刀場亜紀はもちろん火傷一つ負うことなく立っていた。

「その時間は俺が稼ぐ、いいな？」

そして再び神岡史樹は刀場亜紀の前に立ちふさがる。

「今さら何をした所で無駄じゃ」

「それはどうか？」

不気味な笑みを浮かべる神岡史樹に刀場亜紀は歩み寄るのを止める。

「アトミックブルーツ原点帰還の能力を持つてすれば妾の能力を防ぐ事は容易かるう。じゃが、防ぐだけでは妾に勝つ事は不可能じゃ」

「やってみるか？」

「フフ、面白い」

トラジディーゲイル
悲劇乃拔刀！

四方八方から襲いかかって来る風の刃を避けながら神岡史樹は機会を窺う。

何を言われようがとにかく今は自分がやるべき事をやる。
そのことしか神岡史樹の頭には無かった。

「そんな攻撃じゃ、能力を使うまでも無いぞ」

誰もが分かり切った様な挑発。

しかし彼女の性格を少し把握した上でこれが刀場亜紀を誘惑する一番の手だと神岡史樹は考えていた。

「妾を挑発しておるのか？」

そして言葉を挑発だと分かり切った上で刀場亜紀は軽く笑って答えた。

「良かるう。アトミックルーツ 原点帰還の力、ここで試してやるうぞ」

突如として彼女の周りを大きな竜巻が覆う。

その竜巻は砂埃を上げ、天まで聳え立つ塔の如く空高く舞い上がっていた。

「竜巻と言うモノは時には鉄筋コンクリート構造や鉄骨構造の建物をも一瞬で崩壊させ、大型の車なども空中に巻き上げてしまうのじや。」

そう言っ て彼女が手を開き構えるとその竜巻は彼女の目の前に小さくなって集まって行く。

いや、『小さくなる』では無く、それは圧縮と言った方がいいだろう。

そしてその竜巻は彼女の前で小さな球になった。

しかし、その球の中では先ほどまであった竜巻が螺旋を描くように圧縮され、押し込められているように渦を巻いていた。

「それだけの威力のモノをここまで圧縮すればどうなるじやろうな？」

そして彼女はそれを神岡史樹に放った。

トラジディーエンド
終焉乃大嵐！

勢いよく放たれたそれを神岡史樹は両手で受け止める。

神岡史樹に当たった後も球の後ろには大きな螺旋が生まれ、全ての風を飲みこむように進んでいた。

「クッ
」

回転と共に吹きつける風、そして巻き上がる砂埃。

ジリジリを後ろに後退しながらも何とかそれを防いでいる神岡史樹だったが、あまりの威力に抑える事がやっとであった。

「抑えるのがやっこのようじゃな！」

大きな風の向こうで彼女は軽く笑っていた。
その風の威力を上げるかのように彼女は手に力を込める。

へへ

そんな中神岡史樹も笑っている。

「何がおかしいのじゃ！」

抑えるのがやっこの状態で神岡史樹が笑う理由、それは彼女を挑発出来た時点で流れはこちらにあったからだ。

「まだ分からねえか？ お前がこの大技を放った時点でお前の負けはほぼ決定してるんだ！」

「何じゃと？」

「上坂！ 今だ！！！」

声の先にいる上坂茜の指先には既に光の球が完成していた。
その球は先ほど放たれたモノよりも数倍大きく、その威力は想像
を絶するものであった。

神岡史樹のやるべき事の1つ、それは時間稼ぎ。

これの為に神岡史樹は刀場亜紀を挑発し、自分だけに技が向けられるようにしたのだ。

「今度こそこれで終わりよおおお!!」

上坂茜から放たれた光の球はオレンジ色に輝き、周りの空気を燃やし尽すかの様に一直線に刀場亜紀に向かって行った。

そしてそれは彼女に直撃するかと思われたが……

「クッ! こんなモノオオオ!!」

轟!!と彼女の目の前でその光の球は大きな音を立てると同時に爆発し炎を巻き起こした。

決めの一撃。

それほどの力を注ぎこんだ一撃。

しかし刀場亜紀は寸前の所で神岡史樹への攻撃を止め、巨大な風の盾を作り出しそれで光の球を防いだのだった。

（どうじゃ、これで妾の勝ち　　）

しかし彼女には見えた。

その炎の横から走って来る神岡史樹の姿を。

彼は自分に向けて拳を振り上げ向かって来る。

見えている。

見えている。だが体が動かない。

防ごうにも体が言う事を聞かない。

その動きはスローモーションの様に見え、そして、その拳は刀場亜紀の頬に突き刺さった。

刀場亜紀はそのまま人形の様に後ろへ飛んで、数メートル地面を転がった所で止まった。

「どうやら僕たちの出番は無かったようだね」

その様子をみて林光一朗と春名星花も姿を現した。

「な、何故じゃ……何故動かなかったのじゃ……妾の体に何をしたのじゃ……」

神岡史樹はゆっくりと彼女に近づく。

「俺達を何もしてない、お前の体が勝手に動かなくなったただけだ」

そして、神岡史樹はゆっくりと話始める。

「お前は全てが力任せなんだ、だから簡単な事にも気付かない。お

前はあんな大技を放った直後に自分の体がいつも通り動くと思ったのか？」

人間大きな動作の後には必ずと言っていいほどスキと言われるモノが発生する。

「それにお前は直後に上坂の炎も最大の盾で防いだ。こんな大きな技を連続で出せばいくらレベル5であろうと関係ない、体は無意識に硬直しちまうんだよ」

刀場亜紀は愕然とした。

力こそ全て、そう考えていた彼女にとってその説明から受けたダメージは大きかった。

「そうか……妾はそんな単純な事で負けてしまったのじゃな……覚悟は出来ておるぞ、さっさと殺るのじゃ」

そう言っただけで彼女は何かを覚悟したように目を瞑る。

「お前は何を言ってるんだ？ 何で負けたからってそんな事しなくちやなんねえんだ？」

神岡史樹は呆れた顔で答えた。

「お主、妾をバカにする気か!？」

「バカにしちやいない、ただ俺らはお前を止めに来ただけだ。このバカげた学園戦争を止めさせる為にな」

「ならお主は自分の力を証明したくはないのか？ 妾を倒せばそれだけでお主の力を証明できようぞ」

「そんなのには興味が無い」

神岡史樹はあっさりと言ったのける。

しかし、刀場亜紀はそんな神岡史樹の考えを理解出来ていないようであった。

「お前がどうしても自分の力を証明したいんだったら、俺がいつでも相手になってやる。今度は1対1だ、他の学生を巻き込まないようにならいつでも勝負してやる」

刀場亜紀の疑問はまだ解けない。

「何故お主はそこまで他の学生の事を考えておるのじゃ？ 自分は

「どうでもよいのか？」

「自分はどうでもいいなんて思っちゃんない」

「ならどうしてじゃ？」

刀場亜紀は不思議そうな顔で訊ねて来る。

そんな彼女に対して神岡史樹は少し微笑みながら答えた。

「俺達レベル5つてのは学園都市に7人しかない、言わば学園都市のトップだ。つまり綺麗な言い方すれば俺達レベル5は他の学生の見本にやらないといけない存在だと思うんだ。だからこそ、俺たちはレベル5が引き起こしたこの学園戦争を止めに来たんだ」

学園最強の能力者。誰もが目標とするレベル5。だからこそ自分たちは正しく在らなければならぬ。神岡史樹はそう考えていた。

「お前はアイツらの見本になってやんなきゃいけないんだ」

そう神岡史樹が指さす方向には、先ほどの戦いで気絶させられていた四天柱の姿あった。

彼らは体を引きずりながらもゆっくりとこちらに近づいて来たいた。

「貴様ら、よくも刀場様を……許さん！」

「もう良いのじゃ」

体に鞭を入れ、勢いよく飛びかかって来る四天柱であつたが刀場亜紀の声で踏み止まる。

「しかし刀場様、こいつらは」

「もう良いと言っておろう」

そう言つて刀場亜紀は神岡史樹の方を向いた。

「四天柱はこれほど妾を慕つてくれておつたのじゃな」

「そうだ」

刀場亜紀はゆっくりと上半身を起こし片足を立て、その上に腕を乗せしばらくの間考え込むと、フウとため息をつき、

「四天柱よ、済まなかったのお。どうやら妾の負けのようじゃ」

彼女たちに頭を下げて詫びた。

それは今この瞬間のことだけではなく、今までのこと全てに対する謝罪のように見えた。

「刀場様どうか頭を上げて下さい」

「私たちはどこまでも刀場様について行きますわ」

「ここにはいねえけど樹里のヤツもきつとそう思てるはずや」

そんな彼女を四天柱は囲むように集まってくる。

「お主ら……」

その様子を周りで見ていた4人もホッと胸を撫で下ろした。

「史貴と申したかの？」

刀場亜紀は神岡史樹に訊ねた。

「妾はこれから変わって行けるのかのお？」

その質問に対して神岡史樹は優しく答えた。

「それはお前たち次第だ」

「……そうじゃの」

刀場亜紀はそうゆっくり呟いた。

その表情は先ほどまでと違い、なにか納得した、自分の中で何か開けた、そんな表情であった。

まだ高く上がる太陽は容赦なく突きつけている中、上常連合対霧ヶ丘女学院の対決は上常連合の勝ちで締めくくする事になる。

倉庫の屋根は吹き飛び、敷地内の建物はほぼ全てが崩壊している。これらが今回の戦いの凄まじさを物語っているようであった。

そんな建物を背に誰もがようやく1つが終了した、と一息入れようとしていた時

それは鳴った。

「会長、お電話みたいですよ」

林光一朗の携帯機器が鳴ったのだ。

林光一朗は宛先人を見て少し表情を変えてその電話に出た。

その電話は非常に短いモノであったが、林光一朗の表情はその短い時間の間で徐々に厳しいモノになっていた。

通話が終了し険しい表情の林光一朗をその場にいた皆が心配そうに見ていた。

「みんな聞いてほしい、戦城君からの連絡だが」

その言葉に皆の緊張が走る。

林光一朗の表情からも深刻な事態である事は見て取れるが、神岡史樹は悪い予想だけは当たらないでほしいと願っていた。

しかし、そう言った時に限って悪い予想が当たってしまうものがある。

そして林光一朗が発した言葉こそまさに悪い予想であった。

「第177支部との連絡が途絶えたそうだ」

上常の一撃（後書き）

どうやっても会話多くなっちゃいますよね……

描写が下手すぎるんですよね……

練習あるのみですね、頑張ります。

感想とか頂けるのうれしいです。

再びの悪（前書き）

いつもありがとうございます。

お気に入りも少しずつではありますが増えてきております。うれしい限りです。

これからもよろしく願います。

再びの悪

「連絡が途絶えたって……」

神岡史樹は愕然としている。

「言葉の通りだよ。……どうやら襲撃されたようだね」

4人は一斉に彼女らに目をやった。

「それは私たち霧ヶ丘女学院ではありません。今日この第7学区には私たち4人以外霧ヶ丘女学院の生徒はいませんから」

「だがお前たちは第18学区のジャッジメント支部を壊滅させたと言っていただろう」

その言葉に、ああ、と彼女は何かを思い出したように答えた。

「それは私たちの説明不足のようだ。正確に言えば私たち四天柱が手を出す前に壊滅されていたと言つべきだったな。」

つまりは第18学区のジャッジメント支部は霧ヶ丘女学院に壊滅させられたのではなく別の何かによって壊滅させられたと言つ事。

もちろんそんな事をするのは考えられる上で1つしかない。
今回の第177支部の件も間違いなくその仕業であろつ。

「長点上機学園め！」

~~~~~

ジャッジメント第177支部

「九条さゝん、お茶でもいかがですか？」

大きなリボンを揺らしトレイにお茶を1つ、それも真ん中には置かず何故か端に置きながら器用にバランスを保っている。

見ている方からすれば危ないにもほどがあるが、それが彼女に特技であるかのように絶妙なバランス感覚である。

「……………いい」

パソコンと睨めっこを続け、相変わらず主語が見つからない言葉を返して来る九条静香であったが、少しテンションの高い雨音唯と常に無口な九条静香。この2人はそれで均衡を保っているかのよう  
に仲良しであった。

「雨音ちゃん、じゃあ俺にそれくないかな？」

「風祭さ〜ん、仕事して下さいよ〜。さっきからそれ見てるだけじゃないですか〜」

机に置かれた携帯機器をただ眺めているだけの風祭竜であったが、  
「これも大事な仕事だ」と言っ  
て腕を組み何回か頷く。

「いつ会長や戦城さんから連絡が来るか分からないからな、一時もこいつから離れる訳にはいかない」

風祭竜が言う事は一理あった。

今この時間、上常連合は霧ヶ丘女学院と戦っている所であった。  
だからこそいつ連絡が来ても行けるスタンバイを取っている事が自  
分の仕事である。

風祭竜の頭の中には60%ほどその考えがあった。もちろん残りの40%は俗に言うサボリと呼ばれるモノに近かったが……。

頭の後ろに手を組んで立ち上がり何気なしに風祭竜は呟く。

「神岡さん達大丈夫かな、俺が行ってればこう、ドカンと」

と風祭竜が部屋の窓向けて打つ振りをした瞬間

ガシャン！！ と部屋の窓ガラスが音を立てて崩れ落ちていった。

「風祭さん！ 何やってんですか！」

その仕草を見ていた雨音唯は犯人を風祭竜であろうと問いただす。

「俺じゃない！ ただ打つ真似をしたただけだぞ！」

明らかに風祭竜が打つ真似をした瞬間にガラスが割れた。なら風祭竜がそれを行ったと考えるのが妥当であるが、実際は違った。

なら 誰が??

そんな思考の中、九条静香が呟いた。

「……………危険！」

彼女の先行感覚の能力が何かを感じ取った。  
プリマリード

いつもは無口で無表情な彼女が今回ばかりはその表情を強張らせていた。

「……………外に……………逃げる」

！！

普段主語を使わない彼女が主語を使ったとなるとただ事ではない。そう判断した風祭竜は全員に聞こえるように叫んだ。

「みんな！ 外へ出る！！」

その声と同時にその場にいた数名は外へと逃げ出して行く。  
そして次の瞬間

窓から大量の氷の刃が襲いかかって来た。



その刃は部屋にあるモノを容赦なく襲い破壊する。  
ただ、九条静香の能力のお陰で怪我人無く全員が外へと避難することができた。

しかし状況が変わる事は無い。

「なんだあ?? みんなでお出かけでもすんのかあ??」

全てを見下したようなその尖った声。そして全てを凍りつかせるような眼。  
その眼で睨まれたモノは足を凍らされたように動けなくなると言う。

そして実際にも逃げ出す事に成功した数名の内、何名かはその場を動けないでいた。

アブソリュートゼロ  
「絶対零度!」

クッククク

彼は何か面白可笑しく歯を見せて笑う。しかし、その笑いなそん

な生易しいモノでは無かった。

「ジャツジメントの皆さん?? お昼寝の時間ですよ!??」

「みんな逃げ　　!?!」

アイスブリズン  
氷河障壁

逃げようとした道を大きな氷の壁が遮る。

高さは10m近くはあるその壁に行く手を阻まれてしまった。

「こんな壁!」

とジャツジメントの1人が自分の手に炎を作り出すとそれを氷の壁目掛けて投げつける。

その炎は勢いよく燃え氷を溶かしたように見えたが、ほんの数センチの窪みが出来ただけであった。

「そんなレベル3か4の炎ごときで俺の氷を解かせると思ったのかあ??」

目の前には聳え立つ氷の壁、振り向けばレベル5。

こんな危機的状況の中で選ぶ答えなど無かった。

答えはたった1つしかない。

「ジャツジメントなめんなよ！ 雨音、行くぞ！」

「はい！」

こんな状況だからこそ攻める、それが危機を脱出する近道。  
そう言わんばかりに2人は掛け声と同時に走り出す。

相手はレベル5。生半端な攻撃では全く受け付けない。  
相手は明らかにこちらを見下していた。

しかし、逆にそれを利用する価値はある。

そして相手との距離がある程度になると急に立ち止り、雨音唯は  
その場に立ったまま何やら集中し始めた。

それを確認するかのように風祭竜は雨音唯と距離を取り、あろう

ことが彼女目掛けて拳を振り上げ勢いよく加速し始めた。

「何だ何だ?? 仲間割れか??」

しかし2人の表情は密かに笑っていた。

風祭竜はグングン彼女に接近し、そして彼女目掛けて拳を突き出した。

「今だ!」

オブジェディクト  
物物交換!

次の瞬間、風祭竜が突き出した拳は天雲児翔の頬に突き刺さっていた。

磁力浮上で加速された威力と風祭竜から放たれた拳の威力をまともに受けた天雲児翔は、大きく体を横に回転させながら数十メートル飛んでいき壁に突き刺さった。

そして、雨音唯はその天雲児翔と入れ替わったように先ほどまで彼のいた場所に立っていた。

「やりましたね」

その天雲児翔の姿を見て雨音唯は風祭竜のもとへと近づいて行く。彼女の中ではこれぞと言ってよいほどの感触を掴んでいた。

しかし、一方の風祭竜は険しい表情を崩さない。

そして彼の手からは赤い血が地面へと滴り落ちていた。

「風祭さん！ その手はどうしたんですか！？」

風祭竜の右手には夥しいほどの小さな氷の刃が突き刺さっていた。

「クッ……」

風祭竜は表情を歪める。

手の痛みに対して表情を変えた訳では無い。

その手応えに疑問を抱いていたのだ。

当たる瞬間までは確実に相手を捉えたと思っていた。

オブジェディクト  
物物交換による移動攻撃。

雨音唯の能力。それは自分自身と半径50m以内のモノを入れ替える能力。

重量などの制限があるが、50m以内のモノならほぼ全てのモノを自分と入れ替える事が出来る。

一瞬にして場所を入れ替えられて瞬時に対応出来る人間などいるのだろうか？

そう疑問視するしかなかった。

なぜなら、拳が当たった瞬間それは明らかに氷の感触であったからだ。

「やっぱりそう簡単にはいかないみたいだな……」

先ほど天雲児翔が激突した場所。

その立ち込める砂埃が晴れ見えて来たものは、天雲児翔本人では無く

人の形をした氷の塊であった。

「惜しかったなあ?? ジャッジメント」

見上げた壁の上には天雲児翔の姿があった。

どうやら場所を入れ替える直前に自分を模った氷と入れ替わっていたようで、それを殴った為に拳に氷が刺さっていたのだ。

唯一勝てるチャンスと踏んで決死にしかけた攻撃をこつもあつさり退けられてしまい、こちらに最早勝ち目は無いと考えていた。

しかし次の彼の行動は意外なモノだった。

「どうやらもう終わりみてえだな」

と彼は不意に片方の氷の壁を消滅させた。

一体何を考えているのか分からなかった。このままこの閉じ込められた場所で戦えばこちらの負けは明らかである。

それをわざわざ解くなんてこちらに僅かながら勝機を与えるモノ

……

しかしその崩れた氷の先を見てその考えは捨てる事にする。

そこには1人の男が立っていた。

黒い髪。前髪は眼を軽く隠す程度伸ばされており、その眼は何もかもを飲みこんでしまう様に暗く深い。

清楚な顔立ちに見えるが、体の至る所から異様なオーラを放っていた。

「遊んでいるみたいだな天雲児」

遊んでいる??

風祭竜はその言葉を聞き間違えたかと思った。

遊んでいる。

自分たちが決死を掛けて仕掛けた攻撃を受けて『遊んでいる』など信じられないモノであった。

「俺はお前のそう言う所は嫌いじゃない、だが今は多少時間を急ぐ」

そう言ってその男はゆっくりと足を進める。



ただ歩いているだけ

たったそれだけの事。

しかしまだ30mは在りそんな距離でもとてつもない圧力のようなモノが襲いかかっていた。

「ジャッジメントの諸君、どうやらうちの天雲児の遊びが過ぎたみたいで、その所為で嫌な思いをさせてしまったようだな」

男は歩を止めはしない。

一步一步その距離を縮めて来る。

表情を変える事無く異様なオーラを放ったまま。

「……………ダメ……………」

突如、九条静香は頭を抱えるように言葉を発した。

彼女の能力で危険を感じたのであろう。

ただ、

その声は震えていた。

「……………逃げて……………逃げて！」

男は右手を横にスツと広げるとその手からは炎が生まれた。

そして彼らに向かって静かに微笑んだ。

「せめて苦しまずに終わらせよう」

## 再びの悪（後書き）

もう少し描写を増やせるようになりたいですね、

もっと色々な表現の仕方を勉強していきたいです

## 貫きのジャッジメント（前書き）

何かサブタイトルと合っていない気もしますが……

## 貫きのジャッジメント

医者が言うには彼は悲惨な状態であつたそうだ。

右手は火傷を負っており、右足は凍傷に近いモノである。  
さらに左足は何かを押しつぶされたように粉々に碎かれ体の至る所に鋭い何かに切られた跡が残っていた。

一言で表すなら

『残酷』

大学病院の小さな個室のベッドで横たわる彼の意識は無かつた。  
まるで何か良い夢でも見ているかのように静かに眠っている。

呼吸器が装着され、頭には包帯が巻かれている。

左足には大きなギブスがはめられ、取り付けられた心電図の規則的な音だけが病室に聞こえていた。

「命に別状はないよ」

医師はそう話した。

これだけのダメージを受けて無事なのは運が良かったそうだと。

でも、と医師は続けた。

「彼が元のように歩けると言う保障はできないね」

その言葉が4人に重く押し掛かった。

右足の容体は比較的軽いものでそれほど心配ないそうなのだが、左足は骨折が酷く手術は成功したものの、『歩く』と言った動作が出来るかどうかは分からないそうだと。

眠っている彼にはまだ知らされていないことである。

もし彼が目を覚ましこの事実を聞かされた時、どう思っただろうか？

歩けないかもしれない。

そんな宣告を受ける彼に対して

一体どんな顔をして  
一体どんな声をかければいいのだろうか？

「クッ！」

神岡史樹は歯を食いしばり険しい表情のまま部屋を飛び出した。

「神岡さん！」

部屋を出る直前に春名星花が自分を呼ぶ声が聞こえたが、それを振り切るように走り出した。

小さい頃、病院では走ってはいけないと教わった。  
小さい頃、病院では静かにしなさいと教わった。

ただ今だけはその教えに反したかった。

勢いよく廊下を駆け、何段もの階段を駆け上がる。  
目の前に見えたトビラを勢いよく開け、飛び出す。

「ちくしょおおおおお！」

朝の太陽がまだ登り始める空にその雄叫びは木霊した。

屋上から見える空を漂う雲は神岡史樹の心と反するようにゆっくりと動いている。

ぶつける所のない怒りはやがて拳に伝わり硬いコンクリートに打ちつけられた。

壁に打ちつけた拳からはポツリポツリと赤いモノが床に落ちて行く。

そんなモノは痛くも何もなかった。

痛いのは胸の中だけだ。

眉間にしわを寄せ歯を食いしばりその血にまみれた拳を強く握りしめた。

「神岡君……」

林光一郎は静かにそして申し訳なさそうにその名前を呼んだ。



その言葉に神岡史樹は振り向かなかった。  
握りしめた拳は未だに強く握られている。

「アイツとは」

神岡史樹は静かに話した。

アイツとは中学からの仲だった。

エリート学校なんかに興味は無かった俺はレベル5でありながら  
名も無い中学に入学した。

その学校にはレベル5だった俺に近づいてくる者はおらずずっと  
1人だった。

別に気にしてなどいない、そんな日々が当たり前だった。

でも2年になったある時

『俺を舎弟にして下さい!』

1人の後輩がそんな事を言い出して来た。

どうやら当時レベル2であつた彼はレベル5の自分に憧れを抱いてそんな事を言つて来たそうなのだが、今時舎弟なんてくだらないモノに興味がなかった俺は、好きにすればいい、そんな事を何気なしに答えた。

そしたら次の日からまるで嵐のように周りをうろつく様になった。

登下校はもちろんの事、学校の無い休日さえ傍にいた。

もちろん初めはウザいの一言だつたのだが、話す相手がいなかった俺にとってアイツがいる時間はとても新鮮なものだつた。そしていつの間にかそんな日々を当たり前のようを送るようになっていた。

周りの反応も変わりだした。

彼の影響を受けて話をする生徒も増えた。前までならウザいと思つていただろつが、こんなのも悪くは無いと思つようになっていた。

そして1年が過ぎたある日

『神岡さん！俺レベル3になりました！』

まるで宝くじが当たったかのように俺の所に飛んで来た彼は喜びを爆発させていた。

レベル2とレベル3の間にあるとてつもなく大きな壁があると言われており、レベル2がレベル3になる事は並大抵のことではなかった。

しかしアイツはその大きな壁を努力で乗り越えレベル3になって見せた。

レベル5の俺に憧れていた彼は俺を目標としそして努力を繰り返してきた結果だった。

その時初めて

レベル5はみんなの目標でなければならない

そう感じた瞬間だった。

そして彼は中学3年になると同時にジャッジメントに志願し、見事に合格してみせた。

自分の力で学園都市を守る

そう心に希望を描いて。

彼は努力に努力を重ねて今の自分にたどり着いた。

なのに……

どうして……

「どうして竜があんな目に遭わないといけないんですか!!」

彼の努力全てを洪水のように流してしまった結果に神岡史樹は怒りを抑える事が出来なかった。

「すまない……僕があんな事を頼んだ所為で」

その言葉にいつの間にかこの怒りを林光一朗にぶつけてしまいそうなのがある事に気が付いた。

（何をやってるんだ俺は）

「会長は悪くありませんよ……悪くありません」

だがその拳は震えていた。

大切な後輩があんな目にあってしまったのは林光一朗の所為では無い、それは分かっていることだ。

こんな所でこの気持ちをぶつけたとしても意味がない、そんな事も分かっている。

ただ心のどこかにそんな考えとは反対の考えを持ってしまっている事に腹立たしかった。

もし、彼と一緒に来ていたら……少なくともこのような結果にはならなかった。

そう思ってしまったている自分がいた。

「神岡さん」

振り向いた先には所々に包帯やガーゼを当てている雨音唯と九条静香の姿があった。

彼女達の傷はそれほど深いモノはなく、切り傷や多少の火傷程度で済んだようである。

「風祭さんは第177支部のみんなを守るために1人で……1人で立ち向かって行きました」

普段お茶目な声の彼女だったが今は声が震えていた。

「私たちはただ脅えて……何もすることが出来なくて……責めるなら私たちを責めて下さい！」

彼女の目には涙が溢れていた。

その涙はその時の恐怖からなのか、何もできなかった自分に対する悔しさの涙だったのか、それは神岡史樹には分からなかった。

ただ、彼女も悔しかったに違いない。

そしてその涙を見て自分の中の暗いモノをしまい込むと雨音唯に近づきそっと彼女の頭を優しく撫でた。

「君たちは悪くない、よく無事でいてくれた。竜は……みんなを守る為に戦ったんだな」

うん、と彼女は静かに頷いた。

「誰も悪くない……」

（ そう、第177支部のみんなも雨音唯も九条静香も会長も誰も悪くない）

彼女にではなく自分に言い聞かせるように言った。

「悪いのは……全ての元凶は……天徒皇夜だ！」  
あめす いじや

## 貫きのジャッジメント（後書き）

いよいよ学園戦争も大詰めです。

次回ついに学園都市1位、最強のレベル5の能力が明らかに！？

お楽しみに



## レベル5の戦い（前書き）

ユニーク2000突破ありがとうございます！  
こんな物語りを読んで頂いている方に感謝です。

これからがんばります。

そしていよいよ第1位の登場です。その能力はいかに！？

## レベル5の戦い

「戦城君の情報ではここが今彼らが拠点としている場所だそうだ」

そこは列車の操車場であつた。

電車を整備したり、終電を終え1日の仕事を終えた電車の休息の場所とも言えるだろう。

既に完全下校時刻を過ぎ建物の電気が消されたそこは周りに大量に積み上げられた貨物列車用のコンテナによってまるで違った空間のようであつた。

数十本あるレールの上にはどのレールに入るのかを支持する為と思われる数字を書いたランプが灯っており、入口から遠く離れた奥には大きなシャッターの口を開けた車庫があつた。

4人はコンテナに囲まれた道を歩く。

所々にある電車は安らかに眠っているように動かない。もちろん動いてもらつては困るのだが。

そんな中その電車の屋根の上に1人の影があつた。

「おやおや?? 誰かと思いきや名の高いレベル5の皆さんじゃな

いのですかあ??」

夜空に光る月と数々の星が彼を照らす。

アフソリユートゼロ  
絶対零度

全てを凍りつかせるようなその眼は今宵もまるで獲物を睨みつけるかのように鋭く、そして冷たかった。

「出たわね、天雲児翔!」

まるで犬が猿を見つけたかのように上坂茜は深紅の髪を揺らし、おまけに本当に燃えるかのように周りの温度を既に2度は上昇させている。

「天徒皇夜はどこにいる」

いつもは冷静な神岡史樹はその目に何か熱いモノを滾らせて天雲児翔を睨みつけている。

その熱い何かは怒り、悲しみ、憎しみ、そう言ったものが混ざり合って出来ているようであった。

「おお怖い怖い、そんなに焦るなよなあ。夜はまだまだ長いんだからよお！」

彼は両手を軽く開き全ての指を不規則に動かし、ハンターが獲物を狩る瞬間を今か今かと待っている様であつた。

そんな彼を目の前にまるで当たり前のようにな上坂茜は一步前へ出る。

「ここは私に任せなさい」

これは自分の役目と言わんばかりに。

「じゃあ僕も残ろうかな」

それを見た林光一朗も一步前に出る。

「何で会長まで残るのよ」

「これが一番のグループ分けだからね、僕たちが行った所で天徒皇夜には勝てない。彼に太刀打ちできるのは神岡君と春名君の能力だけだろう。だから自然とこうなるんだ」

ただ単に残ると言った訳ではない。

林光一朗は敵の能力を考えた上でこの場における最高の選択をしたのだ。

「おいおい、それじゃまるで俺になら勝てるみたいな言い方じゃねえかあ??」

何抜かしてんだ??と言わんばかりに目つきを細くし天雲兎翔は上から前に乗り込むように睨みつける。

「僕1人では勝てないかもしれないが2人なら勝てるだろう。これは強さを示す戦いじゃない、君たちを止める戦いだ」

そう言っただけ林光一朗はメガネを胸ポケットにしまい込む。  
そして戦闘態勢に入る様に目つきが変わる。

「神岡君、彼はおそらくこの奥の車庫にいるはずだ」

「春名さん」

「はい!」

2人はその場を林光一郎と上坂茜に任せ天雲児翔の前を走って通り過ぎようとする。

が

もちろんお決まりの如くそんな事を相手が許すはずも無く

「誰が行って良いつて言っただんだあ??」

天雲児翔は両手に氷柱を作り出し今にも2人目掛けてそれを放とうとしている。

彼の眼は完全にこちらを向いていた。  
だからこそそれには気付かない。

「一応僕もレベル5なんだけどね」

彼がその声に気が付き振り向いた時には既に林光一郎の蹴りが彼の耳元を捉えようとしていた。

「チッ」

天雲児翔は慌てて氷の盾を作ったがそれごと林光一朗は蹴り飛ばし、彼は屋根の上から10mほど飛んでいくことになった。

「会長、ここはお願いしますよ!」

そう言って神岡史貴と春名星花は車庫目指して走って行った。

車庫までの1キロ程度の距離の間、春名星花はふとした疑問を聞いてみた。

「会長さんって実はものすごく強いんですか?」

実際に春名星花は四天柱との戦いで林光一朗の身体能力の高さを目の当たりにしている。

だからこそ本当はどうなのか知りたくなったのだ。

「会長は学園都市の能力者で7人しかいないレベル5の1人だけど」

もしも能力なしの強さで序列が組まれたとしたら

「会長はそれでも7人の1人に入れるだろうね」

~~~~~

コンテナに勢いよくぶつかった天雲児翔は直撃瞬間、自分を氷で覆いその衝撃に耐えていた。

油断していた訳ではない。

ただ予想以上の身体能力の高さに天雲児翔は驚いていた。

林光一朗の跳躍は明らかに一般のレベルを超えていた。
ほんの数秒目を離れた隙に彼は電車の屋根まで上って来ていたのだ、いや寧ろ跳んで来た。

「!?!」

突如目の前の地面に何かが着地したように埃が舞ったので、天雲児翔は反射的に氷の盾を体全体に張り巡らせた。

そして次の瞬間それは何かの叩きつけられた様に激しく凹み、それと同時に巨大な火球が彼目掛けて飛んで来た。

轟！！　と言う音と共にそこは大きな炎に包まれた。

コンテナをも包み込みその炎は激しく燃えている。

「あぶねえなあ??」

しかしその炎はその声と同時に氷に包まれ粉々に碎け散り、そしてその中からはほとんど無傷の天雲児翔が現れた。

「確かに2人は厄介だなあ??　コロナリオン 灼熱炎帝」

電車の屋根の上から巨大な炎を放った上坂茜はその屋根を下りて天雲児翔に近づく。

そして

「その辺にいんだろあ??　トランスバリエート 万有地変さんよあ」

彼が立つ数メートル先の視界が歪みそこから林光一郎の姿が現れた。

「さすがはレベル5だよ、あの僅かな埃で僕の攻撃を予測するなんてね」

林光一郎は心から感心しているようであった。

着地の際に発生した僅かな埃、その小さな変化を見逃さずに危険が迫っている事を予測し氷の盾を張る。そして第2弾目の炎までも防いだ。

戦闘センスの高さを示す判断だった。

「アンタの能力が一番厄介なんだよなあ?? 俺はやたら炎をぶっ放す女を相手しながら透明人間まで相手しなくちゃなんねえのかよ、こりゃあ骨が折れるよなあ??」

しかし彼は笑っている。

その状況を楽しむかのように彼は笑っている。

「透明人間扱されるなんて心外だね。僕はただ周りの風景に同化しているだけなんだけどね」

トランスバリエート
万有地変

自分自身及び触れているモノを周囲と同化させる能力。故に相手からは透明になったように見える。

「まあ、そんな事はどうでもいいけどなあ?? さっさと続きを始めようぜえ」

~~~~~

2人は大きな車庫の前にいた。  
中には電車が何台か止まっており、明りは月明かりが窓から差し込んでいるだけである。

そんな無人の闇の中に男はいた。

周りの闇に融け込むようにその男は座っていた。

「やあ、男女がこんな所でデートでもしているのかな?」

月の光が照らしたその男は黒い髪、そして真つ暗な瞳。  
その男が闇であるかのように異様なオーラを放っている。

「お前が天徒皇夜だな」

神岡史樹は仇を睨みつけるように視線を注いだ。  
そして既に拳は握られていた。

「お前に訊きたいことがある」

そうそれは

「何故竜にあんなことをした」

「竜？ 知らない名だね」

「お前が第177支部を襲ったときにただ一人立ち向かってきた男  
……それが風祭竜だ！」

拳は既に力の入れ過ぎで震えていた。

「ああ、彼ね。彼には酷い事をしてしまったなあ。もっと苦しめずに楽にしてあげるつもりだったのに」

もはや怒りを抑える事が出来なかった。

その足は脳からの命令を待つよりも先に動き出した。

地面を強く蹴り、張り裂けんばかりの拳を振り上げ駆けだした。

「貴様ああ！！」

彼は右手を横に開くとそこには炎が生み出された。

「うるさいよ、お前」

生み出した炎を神岡史樹に叩きつける。

しかしそんな炎は神岡史樹には通用しない。

両手を前に出しその炎を受け止め、受け止めたその炎を完全に消滅させ

「！？」

しかしその間に彼は左手を横に開き、そこに稲妻の槍を作り出す

そしてそれを神岡史樹に放った。

その稲妻の槍はまだ炎を受け止めている神岡史樹へと直撃した。

「うがあああ」

全身に数万ボルトにも及ぶ電気が流れた。

その場に倒れた体を持ち上げようとするが体が痺れて言う事を聞かない。

「神岡さん！」

慌てて春名星花は神岡史樹の元へ駆けつけた。

「どうやらその力は2つ同時に異なるモノに発動することが出来ないみたいだな」

春名星花は彼を力強く睨みつけると静かに深く言葉を発した。

”平伏しなさい”

しかし彼はそれに従う事無くその場に立ったままにいる。

そしてそれとは逆に彼の周りを風が覆い、その風は刃となって春名星花を襲った。

「きゃああ」

春名星花はその刃と共に後ろに数メートル飛ばされた。

ようやく立ち上がった神岡史樹は春名星花に掛け寄り彼女を支えて立ち上がった。

「お前たちは何か忘れていないか？」

そして天徒皇夜はその屋根から飛び降りるとゆっくりと車庫の外にいる2人の近づいて来る。

その奥に映るモノ全てを飲みこんでしまう様な瞳で見つめながら、静かにそして高らかに言う。

「俺は学園都市最強のレベル5だぞ」

## レベル5の戦い（後書き）

ネタばれになりうるかもしれませんが

勘違いされないように申し上げます、

決して多重能力デュアルスキルではありません。

次回辺り完全に明らかになると思います。

何かあればアドバイス、感想を頂けると嬉しいです。



## 学園都市最強のレベル5（前書き）

10000PV突破ありがとうございます。

これからも大勢の方に読んで頂けるように頑張りますのでよろしくお願いします。

1話が長くなるとどうしても何書いてるか分からなくなってしまうですね……

## 学園都市最強のレベル5

彼は笑っていた。

圧倒的不利な状況でありながら、彼はそれを楽しんでいた。

攻撃する事も相手の攻撃をギリギリで避ける事も彼にとっては楽しみの1つでしかない様に

「もう諦めたらどうだい？」

林光一朗はそんな質問を訊ねてみる。

明らかに自分達の方が強いと確信しているかの様な発言。  
なぜなら、林光一朗と上坂茜の攻撃を彼は避ける、防御するのどちらかしかしていないからだ。

クッククク

獲物を見つめるかの様なその鋭く冷たい眼を光らせ彼は笑っている

「何が可笑しいのよアンタ！」

上坂茜はその笑いが気に食わない様でとにかく吠えている。  
むしろ彼女にとってはこれが普通なのかもしれない。

「俺は前にも言ったよなあ??　ただ突っ込んで来るお前と違うってよあ」

なによ　と言いかけてふと冷静に考えてみる。

前にも言った……

「　上!?!」

と上坂茜は瞬時に上を確認する。  
以前そついった場面があった事を思い出したからだ。

しかし上坂茜の予想を裏切るようにそこには夜空に光る星と月しか無かった。

「上とは限らないよなあ??」

次の瞬間２人の足は地面から動かなくなった。  
それを確認するように見た２人の目には凍りついた地面に埋もれる自分の足が目に入った。

天雲児翔は逃げ回る様に見せかけて地面の下に大量の氷を作り出し攻撃するタイミングを計っていたのだ。

そして言葉を巧みに使い相手の意識を頭上へと向けさせそれを発動したのだ。

彼は単純に戦闘を好んでいるのではなく、戦闘における両者の駆け引きを楽しんでいる。

殺るか殺られるか、その境目をグルグルと往復することを彼は快樂とし、生きがいとしている様であった。

そして彼は相手の裏をかく事を得意とする。

相手がそれにハマリ啞然とする表情、苦痛に歪める表情、そういったモノを見る事が彼にとっての楽しみでもあった。

クッククック

彼は２人を見て、様はねえ、と笑う。

ダイヤモンドダスト  
電燕気弾！

言葉と同時に無数の氷柱が宙に舞う。

全360度を全て覆い尽くすそれに2人は唾を飲み込む。  
さらに足は氷に覆われ身動きが取れない状態である。

襲い掛かる氷柱になす術もなく林光一朗は顔を隠すように腕を交差させそれを防ぐ準備を始めていた。

「会長！ ゴメン！！」

轟！！ と上坂茜は地面を覆い尽くす氷に炎をぶつけた。  
生半端な炎ではその氷は溶ける事知らない。  
上坂茜が放った炎は全力に近いモノだった。

ゴメンの意味は自分だけ抜け出してゴメンではない。自分が放った炎の大きさに対してのゴメンである。

つまりその炎で会長を巻き込んでしまうかもしれないほどの炎をぶつければこの状況を回避する事は出来ないと判断しての行動だった。

炎は激しく燃え、地面の氷を瞬く間に溶かしていく。そしてその炎は氷柱を防ぐ役割も担っていた。

「まあ、これくらいは仕方ないだろうね」

数メートル離れたコンテナの近くに林光一朗は立っていた。その服は所々が焦げて整った黒髪もチリチリになってしまっている所がある。

炎によって地面の氷が解けた瞬間、林光一朗は自慢の身体能力で脱出をしていた。

「ゴメンなさい会長」

炎が消えて姿を現した上坂茜は林光一朗の方を向かずに謝る。だがその事を林光一朗はどうも言わずに上坂茜と同じ方向を見つめている。

「よく防いだなあ?? 褒めてやるぜえ」

天雲児翔はコンテナの上から不気味に笑う。殺すつもりでやった。だが、殺すつもりはない。そんな笑み。

瞬、と不意に林光一朗は姿を消す。

周囲に同化して距離を詰めるのが目的だ。そうすれば打撃で攻撃ができる。

「そうは問屋が卸さんぜえ」

それを見た天雲児翔は手から大量の氷を発生させ宙に散蒔く。

しかし、それは攻撃と呼ぶにはあまりにも弱弱しく1つ1つの大きさも1?ほどで、どちらかと言えば雪のようにフワフワとしているモノであつた。

そんなモノには目もくれず林光一朗は周囲に溶け込み差を詰めて行く。

残りの距離も5mを切りそうになった時、突然天雲児翔の鋭い眼が林光一朗の方を向いた。

（何!?!）

そして天雲児翔の手から放たれた氷柱は林光一朗を目掛けて飛んできた。

「クッ!」

林光一朗は間一髪の所でそれをかわし、そして姿を現す。

（何故居場所が分かった？）

相手から絶対に見えるはずの無い万有地変トランスバリエートの能力。しかし、天雲児翔は当てずっぽうで林光一朗を捉えたのではなく、明らかに場所を確認して氷柱を発して来たのである。

つまり天雲児翔は何らかの方法で林光一朗の居場所を特定する事が出来ていたのだ。

「これが戦闘経験の差ってやつかあ？」

彼は笑っている。

先ほどまでは違い、明らかに形勢が逆転していた。

林光一朗は再度周囲に同化し距離を詰めようと計る。しかし、またもやその作戦は封じ込められてしまう。

もはや天雲児翔は林光一朗の位置を把握していた。



（何故僕の位置が分かる！？）

「動揺を隠せないみたいだなあ??」

林光一郎は言われた通り動揺していた。過去に一度たりとも見破られる事のなかった万有地変トランスバリエートの能力が見切られたのだ。

天雲児翔は再び無数の氷を宙に散蒔く。コンテナの上には先ほどばらまかれたモノが雪のように積もっている。

（雪……）

「もうお終いならこっちから行くぜえ！」

天雲児翔は2mほどの氷柱を数十本作ると、それを2人に向かって投げつける。

しかしそれが林光一郎に当たる事は無い。上坂茜も炎の壁を作ってそれを防いだ。

（なるほど、そう言う事か）

林光一郎は3度目の正直と言わんばかりに再び周囲に同化してい

く。

「そんな事はもう無意味なんだよ!!」

天雲兎翔はその鋭い眼で何かを確認するかのように見つめる。そして確信を得た様に氷河ともいえる氷柱をある場所へ向けて叩きつけた。

空気を切り裂く様に地面へ当たった瞬間、砂埃と共に何かが宙を舞った。

フレームの中に納められたレンズはものの無残に割れ、ガラスが砕け散る。

地面へと落ちたそれは最早”メガネ”と呼べる代物では無くなっていた。

「う、嘘……」

上坂茜は信じられないような顔をしている。

「どうやらそのメガネ以外は潰れちゃったようだなあ?? ハッハッハッハッ!!」

地面に転がるメガネは明らかに林光一朗の物である。そしてそのすぐ隣には未だに砂埃が舞い上がる中、巨大な氷が何かを押しつぶしている様であった。

誰が見ても一目瞭然。

こんなモノに押しつぶされて生きているモノなどいない。

最早確認する必要もない。地面に落ちたメガネが林光一朗の最後を示しているようなモノであった。

「呆気ねえ最後だったなあ?? ちつとばかりは楽しませてくれると思ったが、大した事なかったみてえだなあ??」

「よくも会長を……許さないんだから!!」

上坂茜は炎を纏い怒りを露わにしていた。

その炎が天高く舞い上がり火柱のように燃えたぎる。

「次はてめえの番だ! コロナリオン 灼熱炎帝!」

天雲児翔は手を上へ翳し何かを放とうとした。

そう、放とうとした。

のだが、

「勝手に人を殺さないでくれるかな？」

なっ！？

次の瞬間天雲児翔の体はコンテナの上から数メートル吹き飛ばさ  
ことになる。

体をクの字に曲げながら飛んで行った後、地面を数十回転がりコ  
ンテナに激突して漸く止まった。

そしてその天雲児翔がいた場所には胸ポケットにメガネの無い林  
光一朗の姿があった。

「か、会長！」

「てめえ……何で生きてやがる……」

（あの氷の下敷きになって生きてるはずがねえ）

ヨロヨロと蹴られた右わき腹を抑えフラフラになりながら立ち上がる天雲児翔。

確かに林光一郎は氷の下敷きになったはずである。なぜなら、天雲児翔には林光一郎の位置が分かっていた。そしてそれを間違えるはずもない。

だからこそ何故林光一郎が今そこに立っているのかが分からなかった。

「君は自分が放った氷柱の数も分からないのかな？ 上坂君の所にいくつ行ったかは分からないが、僕の所には9本来だね」

「それが……何だって言うんだあ??」

ようやく立ち上がった天雲児翔はコンテナにもたれ掛らないと立つのもやっとの状態である。

側面からの中段蹴り。天雲児翔のわき腹に突き刺さる様に入ったそれは確実に彼の肋骨を砕いていた。

「では今何本残っているのかな？」

地面の突き刺さっているのが7本、そして転がっているモノが1本。合計8本。

つまり

「1本足りないみたいだね。さてそれは一体どこへ行ってしまったのか？」

1本足りないのが何になる？ それよりも、なぜアイツは傷を負っていない？

「答えは簡単、僕が持つて行ったんだ」

「持つて行っただと??」

未だに林光一朗が何を言いたいのか理解できない。それよりも何故あれだけの氷の下敷きになって傷一つ無いのかが不思議で仕方がなかった。

「そう、つまりは君が僕だと思って撃つたのはその氷柱だったと言  
う訳だ」

!!

天雲児翔はその言葉によく全てを理解した。

なぜ林光一朗が生きていたのか、そして傷一つないのか、

林光一朗は氷柱を囫に使った。

なぜ天雲児翔が林光一朗の位置を把握することが出来たのかと言うと、それは宙に散時かれた小さな氷に秘密がある。

フワフワと雪の様に舞うその氷は何かに当たれば消えてしまう様な弱いモノだ。つまり何も無い所で消えてしまった場合、そこには見えない何かがあると言うことだ。

同化すると行っても実体が無くなる訳ではない。

そう言った唯一の弱点とも言うべき所を突いて来た戦術であった。

しかしその氷に気が付いた林光一朗は逆にそれを利用し天雲児翔を騙したと言うことだ。

「さあ、どうやら終わりみたいだね」

指を指す方向には右手を真つ赤な炎に包んだ上坂茜の姿があった。

そして彼女は天雲児翔目掛けて勢いよく駆けだし炎に包まれた拳を力いっぱい振りぬく。

「クッ！」

慌てて天雲児翔はわき腹を抑えている手とは逆の右手で氷の盾を作るが、その盾はあまりにも薄すぎた。

彼女の右手が触れた瞬間その盾は力無く破壊された。

「これで終わりよ！！」

上から下へと振り下ろされた拳はそのまま天雲児翔の頬に突き刺さる。

そして彼は地面へと叩きつけられるように激突しそのまま意識を失った。

天雲児翔を見下ろすように立つ彼女の肩を林光一朗はやさしく叩く。

「行こうか、上坂君」

横たわる天雲児翔を再度振りかえり見つめ、

「行きましょう」



そう言って2人の所へと急いだ。

~~~~~

2人が辿りついた場所は異様な光景だった。

コンテナのいくつかは何か巨大な力によって押しつぶされた様に潰れ、いくつかはレーザーで切られた様にものの見事に真っ二つになっている。地面には焦げた場所や未だに炎を出して焼けている場所が彼方此方にある。

その真ん中に2人は倒れていた。

「神岡君！」

「春名さん！」

林光一朗と上坂茜は2人の所へ駆けつける。
その声を聞いて2人もふらつきながらも立ち上がった。

「お前たちも無駄に避けなければ苦しまずに済むものを」

ようやく立ち上がった神岡史樹と春名星花を見ながらその男はそう呟く。

「アンタ2人をこんな目に遭わせておいてどうなるか分かってるの！」

いつものように相手に対して吠える上坂茜であったが

「どうなるんだ？」

その眼で睨まれた瞬間言葉を失ってしまった。

ビリビリと押し寄せる得体の知れないオーラに自分の体が微妙に震えていることに上坂茜は気が付いた。

蛇に睨まれた蛙とはこう言う事を言うのであるう。

いつもは何も考える事無く飛びかかって行く上坂茜であったが、今回ばかりは体の中の何かがそれを止めている様であった。

そんな自分に鞭を打つように手に炎を作り出す。

「こうなるのよ！」

「止めるんだ！」

林光一郎は叫ぶがその言葉が届く前に既に上坂茜の手からは炎が放たれていた。

「たわい無い炎だ」

そう言つて男はその炎を片手で防ぎそして跳ね返した。

上坂茜は跳ね返された事に驚くが炎ならかき消せると構えを取るが

え！？

返つて来たモノは炎ではなく

（ 雷！？ ）

と次の瞬間、林光一郎が飛びこむように上坂茜を突き飛ばしその雷は林光一郎の頭を掠めるように通過した。そしてその雷は後ろの

コンテナに直撃し辺りへと飛び散った。

「あの男にそんなモノは通用しないんだ」

埃を払う様に立ち上がる林光一朗とその言葉に戸惑いを隠せない上坂茜。そしてその2人に神岡史樹と春名星花を合わせた上常連合。

その4人のレベル5の前に立ちふさがる男は

学園都市最強と呼ばれる男、

学園都市に7人しかいないレベル5の頂点

第1位、オールフレイキ完全制動、天徒皇夜

学園都市最強のレベル5（後書き）

ついに1位の能力が判明しました。

ただこの能力には色々な意味で自信がありません……でも頑張ります。

完全制動（オールブレーキ）（前書き）

いつもありがとうございます。

お気入りは増えませんが、多くの皆さまに読んで頂けているみたいなのでうれしい限りです。

今回は色々とあるかもしれませんがご了承ください。

完全制動（オールブレイキ）

学園都市最強の能力者

オールブレイキ
完全制動、天徒皇夜。

彼に攻撃を仕掛ける事は無意味に等しい。

しかし交渉なんて言葉はもっと無意味に等しい。

彼を止める為には彼に勝利する他になかった。

「勝つには攻めるしかない！」

神岡史貴の声に反応するかのように4人は4方へと散らばる。

最初に仕掛けたのは上坂茜。

誰よりも速く走り出した彼女の右手の指には炎が圧縮されており、その指は既に天徒皇夜に向けられていた。

（これならどうよー！）

コロナレーザー
光球熱弾！

空気を貫く光の球は轟音と共に地面を焼き、焦がしながら天徒皇夜へ一直線に向かう。

直撃すれば爆発と共に大きな火柱が舞い上がるはずである。

しかし

それは彼を捉えた事には捉えたが爆発音も無ければ火柱が上がることもなかった。

彼はそれを発砲スチロールが飛んで来たかのように右手一本でそれを受け止め、それと同時に炎は電気へと変わっていた。

その電気は圧縮されるように小さな球になる。

そして右手から手の平にある電気の球を左手の人差し指で軽く弾く。それはまるで額に軽くやるデコピンの様に軽く弾いただけ。

「返すよ」

しかし弾かれた瞬間、その電気の球は電磁砲の如くレーザーの様に轟音と共に発射される。

そしてそれは一瞬にして上坂茜へと直撃する。

「が…っは………!!」

息が……

レーザーを瞬時に出した炎の盾で防いだものの、そのあまりの威力に勢いよく後方へ飛ばされた。

コンテナへと背中から激突した衝撃でメシメシと体の中から骨が軋む嫌な音が聞こえる。

激しく背中を強く打ちつけた為呼吸も儘ならない。

「上坂さん！」

春名星花はコンテナに打ちつけられる上坂茜の姿を見てクッと歯を噛みしめる。

そして春名星花は集中し天徒皇夜の1点を見つめる。

” 止まりなさい ”

深く突き刺さるような声が木霊する。

声を操り空気振動で相手の脳に直接命令を下しその言葉通りに相

手の自由を奪ったり、動かしたりする能力。

止まりなさい、と言う春名星花の命令に天徒皇夜の動きは止まったかのように見えた。

が

「無意味だ」

言葉と同時に突風が春名星花を襲う。

腕をクロスさせ顔の前に持って行き風を防ごうとするが、その突風は地面に落ちているコンテナの破片をも巻き込み春名星花の頭目掛けて飛んで来る。

！！

腕の隙間からそれを確認し慌てて体を捻るもののそのコンテナの破片は春名星花の頭を掠めて行った。

地面に落ちる赤い血液。

避けた際に頭を切ったようで耳の傍を伝ってポツリとそれは落ちる。

しかし天徒皇夜から目を離す事は出来ない。

林光一朗は不意を突くように姿を隠し天徒皇夜の背後に回り込んでいた。

そして姿を見せると同時に、相手の顔の側面目掛けての上段蹴りを放つ。

それでも天徒皇夜は振り向く様子も無くただ立っているだけである。

そしてその振りぬかれた足が無防備の天徒皇夜の顔を捉えた瞬間

「ぐは……っ」

まるで自分の体重が何十倍にもなったような感覚に陥り、林光一朗は背中から地面へと叩きつけられた。それと同時に見えない何かに押しつぶされるように周りの地面が大きく凹む。

地面に叩きつけられた瞬間、内臓ごと押しつぶされた様に林光一朗は吐血する。

それでもどうにか体を反転させると足元をふらつかせながら立ち上がった。

反撃に備えて距離を取ろうと体を引きずりながら後退するが、5mほど下がった所でその足は止まり膝をついてしまった。

レベル5の3人の連続攻撃を受けても天徒皇夜はその場から一歩も動いてはいなかった。

動かしたのは腕のみ。

たったそれだけでレベル5の3人を簡単にあしらってしまった。

「このやろおお！」

正面から走り込む神岡史貴。

相手との距離はすでに5m。あと数歩踏み込めば相手の懷に潜り込める距離である。

ただその神岡史樹が目にしたものは、両手を大きく広げ右手には稲妻の槍、左手には風の槍を構え軽やかに笑う天徒皇夜の姿だった。

やばい

そう思った瞬間には2つの槍は神岡史貴へと目掛けて放たれていた。

その2つは交差することなく一直線に神岡史樹へと向かう。

夥しい電流を纏う槍と風を切り裂きながら向かって来る槍。瞬時に何かを決め込み意を決した様に風の槍を手で防ぐ。

が、それと同時に数万ボルトにも及ぶ電流が神岡史貴を襲った。

「ぐあああ」

後方へ激しく飛ばされゴロゴロと地面を転がる。

数メートルで止まる事が出来たが体が痺れてうまく体を動かす事が出来ない。起き上がろうと着いた手も震えて力を入れる事が出来ない。

それでも震える体を懸命に持ち上げグツと前を睨みつける。

そこには表情一つ変える事のない天徒皇夜が立っていた。

「制動装置って知ってるよな？」

制動装置

運動、移動する物体の減速、あるいは停止を行う装置。主に摩擦による運動エネルギーを熱エネルギーに変換する事で移動速度を減じる機械的ブレーキである。

そして運動部分の運動エネルギーを他のエネルギーに変換する事

が制動作用の本質である。

完全制動

つまり

「俺は触れたモノのエネルギーを別のエネルギーに変換させる事が出来る。運動エネルギー、熱エネルギー、電気エネルギーなどを問わずあらゆる種類のエネルギーを別のエネルギーに変換する事ができ、その質量共に変換することが可能」

上坂茜の放った炎は電気に変換し、春名星花の空気振動を風に変換し、林光一朗の蹴りで生まれた衝突エネルギーを位置エネルギー（重力）に変換させた。

即ちそれはこちらの攻撃が全くの無意味である事を示している。

一種のカウンターと言えるべきモノかもしれないが、そんな事はない。

あらゆるエネルギーを変換すると言う事は、単なる摩擦

手を横に広げる動作

これだけの動作での空気摩擦で生まれた運動エネルギーを変換すれば電気を生みだす事も、炎を生みだす事も出来てしまう。

「俺には理解できない。これほどの能力を前に何故自ら苦しみを選択する？」

神岡史貴はふらつく足に鞭を打つように立ち上がる。

「ならお前にも訊いてやる。なぜそれだけの能力を持っていないからこんな学園戦争を引き起こした？ 学園都市最強と言われるお前がこれ以上何を望むんだ！？」

見た目はボロボロでも中身は違う。その心は折れることなく瞳に炎を宿して天徒皇夜を睨みつけていた。

「最強、ならどうして皆は俺が最強だと知ってるんだ？ 実際にみんな戦ったのか？ 違うよなあ？ 1位とか噂だけで最強、そんなんじゃない、そんなんじゃない話にならない。皆に恐れられ近寄る事も儘ならない、それこそが最強。だから証明してやるのさ、脳に刻み込んでやるのさ、全ての能力者に俺こそが最強と言う事を噂ではなく実体験であ。この学園戦争はその始まりに過ぎないんだよ！」

そんな事の為に……

グッと神岡史貴の拳に力が入る。

『俺を舍弟にして下さい！』

そんな事の為に

『俺レベル3になれましたよ！』

ただ自分の最強を証明するためだけに

『こんな自分でもみんなを守って行きたいんです』

こんな奴の所為でアイツは……竜は……

下を向いたまま立ち尽す神岡史貴。

「どうやら観念したみたいだな。そうやって初めから大人しくしていれば苦しまずに済んだものを。ジャツジメントのアイツと言ってお前たちと言い苦痛を味わうのが好きみたいだなあ」

神岡史貴は動かない。
何も語らない。

「どうした？ 震えて声も出ないか！？」

神岡史貴は微かに震えていた。

天徒皇夜は両手を大きく広げる。

ビリビリと広げられた左手には夥しい電気が発せられ、右手には轟々と音を立てながら燃える炎の塊を生みだす。

雷と炎を両手に天徒皇夜は笑う。

「お前は俺が最強である事を示す生贄になれ！！」

左右から放たれた雷と炎が神岡史貴を襲う。

今の状況は最悪だ。

雷か炎のどちらかを喰らっただけで終わってしまいそうなくらい
体はボロボロである。

アトミックルーツ
そして原点帰還は同時に2つの能力を打ち消すことは出来ない。

しかし、神岡史貴は両手を前に出し右手で炎を、左手で雷を、2つを同時に

消して見せた。

「なに！？……バカな！？」

天徒皇夜は驚いていた。

確かに先ほどまで神岡史貴は1つのモノに対してしか自分の能力を発動することが出来ていなかった。

しかし放たれた雷と炎は同時にかき消されてしまった。

「お前なぜ」

「うるせえよ」

神岡史貴は燃えるような眼で天徒皇夜を睨みつけた。
握られた拳はギシギシと音を立てて震えている。

「そんな理由の為に……関係の無いみんなを巻き込んで……竜も……」

最早どんなことを言われようがこの目の前の男だけは許す事はない。

このバカげた学園戦争を終わらせるためにも

巻き込まれたみんなの為に

そして風祭竜の為に

この男だけは許してはいけない。

握られた拳から溢れんばかりの怒りを爆発させるように神岡史責は

「更生してやる……てめえの頭ん中をよお！……！」

叫んだ。

完全制動（オールブレーキ）（後書き）

やっぱり主人公ってのは何かしら強くないといけないですね。悪を撃つのは主人公と相場が決まっていますし、

感想やアドバイス頂けると嬉しいです

絆の拳（前書き）

いつもありがとうございます。

第1章完結です。ここまで読んで頂けた方本当に感謝です。

ちなみに4部に割り込み投稿しておりますのでそちらも良かったら読んで下さい。

絆の拳

キレると言うのはこう言う事なんだろうか？

色々な事を考えて来た。

過去に起きた事を思い出したり、先の事を考えたり、今どうすべきか。

そんな事を常に考えていたのかもしれない。

人間はそうやって考えることを止めたりしない。

どんな時であつても頭のどこかで別の事を考えていたり、何かしら処理を行っているに違いない。

ただ今は違った。

何も考える必要がない。

何かを考える事が無意味だ。

目の前の男に対して何かを考えると云った思考すら思い浮かばない。

神岡史貴の中で何かがキレた。

能力には演算能力が不可欠である。
その演算能力の高さが能力を左右することになる。

現に空間移動能力者は1次元絶対座標の演算が複雑なため、その時の精神状態などが大きく影響する。

人間の脳には雑念がある。それが演算の邪魔をしてしまう事が多い。

ただ、もしもその雑念など余分なモノを除去し思考を全て演算の為に使う事が出来れば、能力を最大限に発揮することが可能になる。

神岡史貴は何も考えない。

ただ目の前の男を倒す、

それだけを心の隅において全てを演算の為に費やす。

神岡史貴はキレていた。

睨み合う様に向かい合う2人。火花が散る様に互いを睨みつける。

その睨み合いに押し負けたように天徒皇夜は言葉を発する。

「2つの能力を同時に消すなどまぐれに決まっている！」

天徒皇夜は両手を前に出し握り拳を作ると、中に親指を挟み込み勢いよく両方を弾いた。

弾かれた際に生まれた運動エネルギーは熱エネルギー電気エネルギーに変換され質量共に増大、圧縮され閃光のように研ぎ澄まされる。

その雷と炎を帯びた閃光は混ざり合いながら神岡史貴に向かって一直線。
地面を焦がす、燃やすを交互に繰り返しながらそれは向かっていった。

最早今の神岡史貴に避けると言った動作は不要であった。
神岡史貴は右手を前に出し今度はそれを片手で受け止め、まるでシャボン玉を潰すようにそれを

握りつぶした

「ば、バカな……！？」

まぐれや運、そう言った類のモノではない。
最早まぎれも無い事実。

神岡史貴は雷と炎を同時に消す事が出来る。

（ そんなハズはない、2つの能力を同時に消す事はヤツには不可能なハズ。だがどうしてヤツはこうも容易く攻撃を防ぐ！？ ）

フッと神岡史貴は鼻で笑う様に答える。

「演算能力つてのは頭がスツキりするところまで向上するもんなんだな。今ならお前のどんな攻撃でも防げそうな気がするぜ」

チツと天徒皇夜は舌を鳴らす。

（ そんな事はいえな、あつてはならない、俺こそが最強、それが覆ることはない！ ）

「多寡が2度俺の攻撃を防いだからって調子に乗るな！！」

10の炎、雷、風が混ざり合って神岡史貴を襲う。

天徒皇夜は左右の指10本を全て弾きその際に生まれた運動エネルギーを3つの異なるエネルギーに変換し放った。

あるモノは熱を帯び、あるモノは電気を纏い、あるモノは全てを

切り裂く風となり、閃光は轟音と共に襲い掛かる。

（　今度は3つだ。2つはやられたが3つの異なる能力を防ぐ事は不可能だ！）

しかし、神岡史貴は不気味に笑う。

そんな事関係ないと言わんばかりにまるで落ち葉を払う様にその手を横になぎ払った。

手に触れた閃光は跡形も無く消え去った。

「ありえん……そんな訳がない！」

再び両手の指を弾き10の閃光を放つ。

今度は3つでは無い。炎、電気、風、音、光。

5つのエネルギーに変換した攻撃。

5つの色は地面を燃やし、焦がし、巻き上げた小石を砕きそして巻き上げられた小石は跡形も残らない。

しかし、神岡史貴はそれをも埃を払うかのように

かき消した。

「バカな……5つの能力を同時に消すなんてありえない！」

（まさか……神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くものとても言うのか！？）

天徒皇夜はヨロヨロと後退りをする。

「5つだ？」

神岡史貴は笑う様に言葉を発する。

「元はお前の1つの能力から作り出されたモノだろ」

それぞれ異なるエネルギーであつたとしてもそれは元々エネルギーを変換すると言う能力から生み出されたモノ。

つまり、炎であろうが雷であろう風であろうがそれぞれのエネルギーは元は小さな他のエネルギーから変換されているモノ。

何人もの異なる能力者から放たれたモノなら話は別だが、1つの能力から生み出されたモノなら、その能力の干渉を受ける前に帰還してしまえば天徒皇夜がいくら別のエネルギーに分けて放とうがいかなるモノも打ち消す事が可能なのだ。

そのことに神岡史貴は気が付いた。

「クッ……」

天徒皇夜は齒を噛みしめる。

そう確かに天徒皇夜は多重能力者ではない。オールブレイキ完全制動の能力で別のエネルギーに変換しているに過ぎない。

つまりいくら様々なエネルギーに変換しようがそれは1つの能力として帰還されてしまう。

「どうやら俺はお前の最大の天敵だったみたいだな」

他の能力者相手なら苦戦する事も無い。

アトミックルーツただ神岡史貴の原点帰還だけは違った。

「ふざけるな！」

怒りを爆発されるように天徒皇夜は近くにあるコンテナに手の平を叩きつける。

その瞬間コンテナは生きているかのように動き出し神岡史貴へと向かって飛んで来た。

衝突エネルギーを運動エネルギーに変換しコンテナを飛ばす。

単純な攻撃に見えるがそうではない。

神岡史貴の原点帰還アトミッククルーッは異能の力にしか働かない。能力に関わっていないモノを帰還させる事は出来ない。

コンテナは鉄の塊。能力によって作り出された物では無い。

つまり、これは今最も効果のある攻撃と言える。

大きな音を立ててコンテナと言う鉄の塊がまるで弾丸のようなスピードで飛んで来る。

しかし神岡史貴は避けようとしない。

今の神岡史貴はいつもと違う。普段出来ないような演算であつても今の神岡史貴なら難なくやり遂げる事が出来る。

足を前後に開き両手を前に突き出す。

衰える事を知らないそのコンテナは神岡史貴の手の平へとぶち当たる。

本来ならばその場で試合終了が決定するハズであるが

手の平に当たったその瞬間、コンテナはまるで電池が切れたおもちゃの様にその場に激しい音を立てて地面に落ちた。

「なっ!？」

天徒皇夜は驚きを隠せない。

炎を消される。雷を消される。そんな事は分かっている。

ただまさかコンテナまでも防ぐ事が出来るとは思っていなかった。

あれは能力では無く単なる鉄の塊。

砕く、破壊する、では無く動きを止める。

(まさかそんな事まで出来ると言うのか!?)

どうやってコンテナを止めたのか?

天徒皇夜は手の平を叩きつけた際に発生した衝突エネルギーを運動エネルギーに変えてコンテナを動かした。

つまり、コンテナは能力によって変換された運動エネルギーによって動かされていた。

神岡史貴はコンテナ自体をどうこうしたのではなく、コンテナに触れることで能力によって変換されていた運動エネルギーを帰還させた。

だからこそコンテナは破壊や消滅ではなくその場にただ落ちただ。

「もう終わりだ」

神岡史貴は右足を1歩前へ出す。そして左足。
ゆっくりと天徒皇夜との距離を詰めて行く。

（ハハ……そんなハズはねえ）

1歩距離は縮まる。

（……俺は最強だ）

その距離は縮まる。

（……学園都市最強だ）

拳が強く握られる。

「お前は……最強を示す生贄になればいいんだああ……！」

力強く踏みつけた足のエネルギーを運動エネルギーに変換し移動速度をあげる。

本来、天徒皇夜の体に拳は通用しない。殴った所でそのエネルギーを変換されてしまうだけであろう。

林光一朗の場合は蹴りで生まれた衝突エネルギーを位置エネルギーに変換された。

ただ神岡史貴の拳だけは唯一天徒皇夜に通じる。

打撃で生まれたエネルギーを変換されてもその変換されたエネルギーを帰還させてしまえばその拳は天徒皇夜に届く。

そんな唯一の手段にわざわざ飛び込んで来るのは最早自我を忘れてしまっているからであろう。

握られた拳には何の躊躇も無い。

「これは」

天徒皇夜の拳に合わせるようにそれは振り抜かれる。

「みんなの分！」

右の拳が天徒皇夜の頬に突き刺さり、大きくよろけながら吐血する天徒皇夜。

「これは」

（……最強）

「3人の分！」

左の拳が天徒皇夜の頬に突き刺さる。

吐血しよろけながらも天徒皇夜は笑っている。まるで壊れた人形のように。

（……俺が最強）

「そして……これが」

全ての力を込めるようにその拳は握りしめられていた。

天徒皇夜の不気味な笑いが頂点に達した。血のついた歯を全て見せ叫ぶ。

「俺が最強だあああ!!」

「竜の分だああ!!」

瞬間。

神岡史實の右拳が天徒皇夜の頬に激しく突き刺さった。

顔から地面に叩きつけられた天徒皇夜はゴロゴロと回転しながら地面を転がっていった。

~~~~~

「いいんだね？」

病室のトビラを前に医師はそう訊ねた。  
開いた廊下の窓からは夏らしい日差しと暖かい風が入り込んでき

ている。

「はい」

開けられたトビラを入り奥へ進むと、  
頭に包帯を巻き、天井から吊るされた左足に大きなギブスを填め、  
ベッドの背もたれを起こし窓の外を見つめる彼の姿があった。

「神岡さん」

こちらに気付いた彼は頭に巻いた包帯以外はいつもと変わらぬ顔  
で名前を呼ぶ。ただことなく暗いといった印象が見受けられる。

「終わっただんですか？」

「ああ終わったよ」

会話は続かない。

どんな顔をしてどんな話を話してあげればいいか神岡史貴には分  
からなかった。

無言が続く。

ただ夏の風にカーテンが揺れる音とどこからか聞こえて来る蝉の鳴き声だけが病室に響き渡っている。

ドアの近くからは上坂茜が何か助け舟を出そうと近づこうとするが首を振る林光一朗によって止められた。

「俺  
」

風祭竜は何か言葉を発した。

ただその言葉は神岡史貴が最もどう返せば良いか分からない言葉であった。

「  
歩けないかもしれないんですね」

風祭竜は自分の左足を見つめる。

「  
……………ッ」

神岡史貴は言葉を発する事が出来ない。  
ただ拳を握りしめることしか出来ない。  
歯を食いしばる事しか出来ない。

「神岡さん」

風祭竜の言葉に神岡史貴は耳を傾けた。

「覚えてますか？ 中学の時の事」

覚えている。

「俺、無理やり神岡さんに押し掛けて」

忘れるハズが無かった。

「舎弟になっずと隣にいて」

忘れる訳が無い。

「やっと神岡さんの背中が見え始めたと思ったのに」

忘れられるモノではない。

「　また遠くなっちゃいました……」

布団が僅かに濡れていた。  
隠れて見えない手はきつと震えていた。

だから

「　戻って来い」

こんな事を言うのは酷かもしれない。

「　舎弟は兄貴の傍にいるもんだ」

努力を押しつける事になるかもしれない。

「　俺の舎弟はお前しかいない」

でも必ず乗り越えられると信じているから

「　だから　」

そう信じているから

「 歩いて戻って来い! 」

もう涙は無かった。

それはいつもの顔。

部屋一杯にその声は響き渡った。

「はい!!」

夏の暑さはまだまだ続く。

歯車はまだ回り続けていた。

## 絆の拳（後書き）

改めて小説は難しいです。

言葉1つで描写する、感情を表す。まだまだ勉強が必要です。

もう1つ反省点は戦闘ばかりだったと言う所ですね。

それらを改善出来るように頑張りますので

引き続きとある科学の原点帰還をよろしくお願いします。

次回新章突入です。

……フウ、ようやく序章が終わった……



## 簡単なキャラクター紹介（前書き）

第1章終了と言っ事でこれまで登場したキャラクターの簡単な紹介をします。

## 簡単なキャラクター紹介

これまでの簡単なキャラクター紹介

上条学院 高校

名前・神岡史貴 かみおか しき

能力・レベル5第3位、アトミックルーツ 原点帰還、触れたモノを能力に干渉される前に帰還する

2年。黒髪のツンツン頭、イメージとしては当麻さんに近いです。

本編の主人公

名前・林光一朗 はやし ひろかず

能力・レベル5第7位、トランスバリエート 万有地変、自分及び触れたモノを周囲と同化させる

3年。寝かされた黒髪にメガネ（実は伊達眼鏡、コンタクト使用）その容姿から会長と呼ばれている。

名前・風祭竜 かざまつり りゅう

能力・発電能力レベル4、エレクトロマスター 磁力を操る事を得意とする。

1年。黒髪の短髪。自称原点帰還の舎弟を名乗り、シューティングスター 疾風迅雷の異名で知られる。

名前・戦城明 せんじょう あり

能力・千浄天眼 イーケルアイ

2年。未だに一度も姿を見せる事の無い謎の人物。皆とは面識があ

るようだが普段どこにいるのかは不明。林光一朗とはよく連絡を取っているようだ。

## 常盤台中学

名前・上坂茜 かみさか あかね

能力・レベル5第5位、コロナリオン灼熱炎帝、バイロキネシス発火能力者の頂点。  
3年。肩まである赤髪の女の子、イメージは美琴炎バージョン。神岡史貴にやたら突っかかるが校内での人望は厚い。

名前・春名星花 はるな せいか

能力・レベル5第2位、エクセクトヴォイス強制執行、声を使い空気振動で相手の脳に直接命令を下す。ただ範囲は15mと短い。  
3年。肩まである青味掛かった髪に物柔らかな雰囲気女の子。実は神岡史貴に好意を抱いている。普段は優しい声をしているが能力を発動する時は鋭い声に変わる。

名前・雨音唯 あまね ゆい

能力・オラジエディクト物物交換、テレポーター空間移動能力レベル3、自分自身と半径50m以内の物を入れ替える能力。自分のみを移動させることができない。  
2年。比較的小さめの体に似合わない大きなリボンを着着。普段言葉のどこかにくを入れる癖がある。九条静香と仲良しコンビ

名前・九条静香 くじょう じょうか

能力・フリスビー先行感覚、数秒先の感覚を予知する能力。第6感みたいなものの、能力はレベル3。

2年。終始無言の女の子、発言したとしても主語がないので分かりづらい。雨音唯とは仲良しコンビ。

霧ヶ丘女学院 高校

名前・刀場亜紀 とほあき

能力・レベル5第6位、デウイルストーム超神旋風、風力使い（エアロマスター）の頂点。

3年。肩までかかる漆黒の黒髪の女の子。自分の事を妾と呼ぶ。学園戦争に便乗し自分の力を計ろうとしたが自分の能力の力に溺れ神岡史貴（上常連合）に敗れる。

名前・桐裂真琴 きりさき まこと

能力・北風拔刀、ソニックブーム風力使い（エアロマスター）レベル4、カマイタチ拔刀風を得意とする。

2年。刀場亜紀に仕える四天柱の1人。ニユース膝まである黒髪の女の子で常に扇を持ち歩いている。

名前・月見風音 つきみ かざね

能力・南風封陣、ハードブラスト風力使い（エアロマスター）レベル4、風の渦を作りだす。

2年。刀場亜紀に仕える四天柱の1人。ニユース緑掛かった髪にメガネをかけた女の子。どちらかと言えば頭脳派タイプ

名前・安藤樹里 あんどう じゅり

能力・東風掌握、ソニックエクスバンド風力使い（エアロマスター）レベル4、空気に触

れる事ができる。掴む、圧縮することも可能。

2年。刀場亜紀に仕える四天柱ニユースの1人。短めのポニーテールの女の子。飴が好きで常に銜えている。

名前・荒井小麦あらい こむぎ

ゲイルアイト

能力・西風造形、風力使い（エアロマスター）レベル4、風を具現化させる能力。槍、刀、色々なモノに造形することが可能。

2年。刀場亜紀に仕える四天柱ニユースの1人。制服の裾を胸元で結び大胆に臍を見せる女の子。口調は関西弁。

長点上機学園 高校

名前・天徒皇夜あます こうや

オルブレーキ

能力・レベル5第1位、完全制動、触れたモノのエネルギーを別のエネルギーに変換する能力。その際質量共に変換が可能。

3年。前髪で少し目が隠れるほどの長さの黒髪。噂や序列だけの最強ではなく誰もが恐れる最強になるため学園戦争を引き起こしたが、神岡史貴に敗れる。

名前・天雲児翔てんつんじ しょう

アブソリュートゼロ ジェロキネシス

能力・レベル5第4位、絶対零度、氷結能力者の頂点。

コロナリオン

2年。冷酷、残虐で戦う事を生きがいとする。灼熱炎帝とは対極する能力者としてかなりの敵対意識を持っている。性格に似合わないほど戦略家

## 簡単なキャラクター紹介（後書き）

いよいよ2章がスタートいたします。

沢山アクセス頂いているみたいなので評価お気に入り等が少しでも増えて行けるように頑張りたいと思います。

## 第2章 現実殺し編 怪我の功名（前書き）

いつもとある科学の原点帰還を読んで頂きありがとうございます。

## 第2章 現実殺し編 突入です。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

## 第2章 現実殺し編 怪我の功名

9月11日

夏休みも終わり新学期が始まって1週間以上が経過。学園戦争の被害は最小限に抑えられた様で学生たちはいつもと変わらない学校生活を送っているようだ。第18学区は多少大変だったようだが、休日の今日も街中では以前と変わらぬ風景が見てとれる。

そんな街中を1人悠然と歩くかみおか しき神岡史貴。

手には何やら袋をぶら提げどこかへ向かっている模様であつた。

9月だと言うのに30度を超える暑さを記録する学園都市。20年から30年ほど科学が先を行くため、辺りにはドラム式掃除ロボットや警備ロボットがあり、神岡史貴の横を通過して行く。最早能力開発とか以前にその科学の力を最大限に利用してこの暑さをどうにかしてほしいものである。

そしてその暑さから身を守る為に建物の陰を通っていたのが何かの縁なのだろうか、何の変哲もない店から出て来た人と軽く体がぶつかる。

「ああすいません つて」

目線の先には学園都市でも選りすぐりのエリート校、常盤台中学



の制服を来た赤髪の女の子。

「なんだメラメラか」

「メラメラ言うなあ！」

「あああこんな暑い中炎とか簡便してくれ！」

徒でさえ暑い中さらに体感温度を高めようと今にも体中から炎を撒き散らしそうな常盤台中学の上坂茜かみさか あかねを落ち着かせようと宥める。

その性格や口調からは決してお嬢様と呼ばうとは思わない。男性の憧れであるお嬢様学校の生徒がこんなモノでいいのかと質問したくなる。理想のお嬢様を想像し憧れを抱いている男子生徒の諸君には彼女にだけは出会いませんようにとお祈りでもしておこう。

そんな彼女に対して、その後ろにはこれこそ本当のお嬢様と言えるような物優しい雰囲気の女の子が影を潜めるように立っている。

「ああ、春名も一緒だったのか」

「お久しぶりです神岡さん……」

ポっ何て急に顔を少し赤められてはどう対応して良いのか分からない。

顔に出やすいと言うか分かりやすいと言うか、こちらとしてはうれしい事なんだろうがそう言った経験の少ない神岡史貴にとっては少しやりにくい存在でもある。

オホンつとワザとらしい上坂茜の咳に気が付き春名<sup>はるな</sup>星花<sup>せいか</sup>は慌てた様子で視線を逸らす。

「で、アンタこんな所で何してんのよ？ どっか出かけんの？」

在り来たりな質問ではある。

まあ、こんな休日の正午を過ぎた時間それもこんなに暑い中一人で街を歩いているなんて、余程の暇人で散歩が趣味であるのか、あるいは特別な用事があるかである。

もちろん神岡史貴は後者である。

手に提げる荷物を軽く持ち上げ指をさし単調に答えた。

「見舞いだ」

~~~~~

第7学区のとある病院。

入口のドアが開くとそこはエアコン最大出力と言わんばかりの天国と言う空間であった。

要するにとっても涼しいということ。

受付の待合椅子に座っている人達がゾロゾロとこちらに視線を向けている。

常盤台中学の制服を纏ったお嬢様が2人も居ればそうなってしまうのも当然ではある。春名星花は真正正銘のお嬢様であるが上坂茜は少し疑問に思う部分があるが……

まあ他人から見ればお嬢様なのかもしれない。清楚な顔立ちと常盤台中学の制服、中身を知らない人間ならその姿はお嬢様に見えるだろう。ただ性格を知るモノは決して彼女をお嬢様とは呼ばないだろう。

静かな廊下には病院独特の何かの薬品の匂いだったり消毒の匂いだったりそういった類のモノが混ざり合ったモノが満ちている。

そう言った匂いは嫌いではなかったが、あまり長時間この空間にいるとまるで自分が病人であるかのような錯覚に陥りそうであった。

そんな廊下の端にある一室。部屋番号は520。ネームプレートには風祭竜かざまつりりゅうと書いてある。

神岡史貴はいつものようにノックしドアを開けて中に入る。

「おい竜、頼まれてた物持つて」

……

「ちょっと何止まってんのよ邪魔だし」

……

「どうかされたんです」

……

3人はそこから次にどう行動すればよいか考えた。
まずは目の前の光景を整理する。

ベッドの上には風祭竜が1人。そして近くに女の子が1人。
綺麗に剥かれたリンゴを食べさせている。
そこまでは良い。

ただ

あろう事が九条静香は口移しでそのリンゴを食べさせていた。
あゝん、とそのリンゴを風祭竜がかじった瞬間を3人は目撃して
しまった。

2人もリンゴをかじった瞬間から時間が止まったかのように3人を見つめている。もちろん3人の時間もしばらく止まっていた。

神岡史貴は手に上げた荷物の高さを変える事無く180度向きを変えるとそのままドアへ向かって歩き出そうと

「ちょっと待って下さい」神岡さん

風祭竜に呼び止められた。

リンゴはと言うとまだ九条静香が銜えたままだ。

「……お前らそんな関係だったのか？」

呆れた表情も織り交ぜて風祭竜に訊ねる。

「いやあ……まあ……その……色々ありまして……」

少し目線を逸らしながら頭の後ろを手で掻きながら答える風祭竜。

「……………竜……………大胆」

目を横に逸らし両手を頬に当てその頬を赤らめながら九条静香は呟いた。

「お前まさか、もうそんなことまで……」

「違います誤解です！ まだそんなことは1度も……って九条も誤解を招く事を言うな！」

と大声を發した後に風祭竜は異変に気が付く。

そう、ここは病院の個室。外なんかと違いエアコンの完備で室内温度は快適な温度に保たれているハズであるが、ここは明らかに暑い。何かが燃えるように。

ハッと振り向く先には……

ワナワナと握り拳を作り体中から熱を發している上坂茜の姿があ

った。

「ア・ン・タ・ねえ」

これはマズイ、と思ったが最早どうする事も出来ないと風祭竜は悟った。

「可愛い後輩に……何手出してんのよお!!」

燃える拳は容赦なく風祭竜に襲い掛かった。

「ホント呆れた、怪我に紛れてまさか静香に手を出すなんて」

椅子に座り足と腕を組み本当に呆れた表情で上坂茜言った。

風祭竜はと言うと、頬を2倍以上に腫れた状態でベッドに横たわっていた。布団の所々に焦げたような跡が残っているが、これだけで済んだ事が奇跡に近いであろう。

その隣で九条静香は淡々とまたもリンゴを剥いていた。

「上坂、お前リンゴなんて剥けないんじゃないか？」

ふとそんな事を何気に思った神岡史貴は上坂茜に訊ねてみた。
「フン、なめないでよ。と九条静香から果物ナイフとリンゴを借りる。」

そして慣れたような素振りですく皮を剥き始めるのだが、皮は途中で切れるは形はガタガタになるは、と決して上手と言えるモノでは無かった。

「どうよ、と出来あがったリンゴを見せて来るが皮と一緒に2割ほどの実がそぎ落とされており、丸いハズのリンゴは角々していた。」

「まあ……20点でとこだな」

味が変わる訳でもないのです。その少し小さめのリンゴを口に放り込む。

「あっそうだ、と神岡史貴は床に置かれた荷物を取りだす。」

「竜、頼まれてた物だ」

「ああ、ありがとうございます」

と風祭竜は荷物を受け取る。
「中身はと言つと、」

「運動できそうな服を片っ端から詰め込んだんだが、そんなもんで良かったか？」

半袖、短パン、タンクトップ、トレーニングウェアなど様々は衣類。

「はい、リハビリもキツくなって来ると思っているのでこれくらいあった方がいいです」

と言いながらその荷物を何の違和感もなく九条静香は棚にしまい込む。

(……様になってる)

「……………時間」

と九条静香は時計を指さし風祭竜に告げる。

「これからリハビリなんでちょっと行ってきますね」

九条静香は無言のまま松葉杖を風祭竜に渡す。
先ほどの荷物の中から上下の着替えを出すと九条静香がそれを手に持ち部屋をでる。

「それじゃ、頑張れよ」

「はい、また来て下さいね」

「2人の邪魔しちゃ悪いからな」

「神岡さんが来てくれたら励みになりますから」

それじゃ、と松葉杖を使いこなし風祭竜は部屋を後にする。
本人のいなくなった部屋に長居も出来ないので3人もすぐに病院をでる。

医者が言うには尋常じゃないほどの回復力を見せている様だ。
元々運動神経が良い事と発展した科学、そして何よりも彼が努力家であるからこそそんな事が起きるのであろう。

「お元気そうでしたね」

帰り道春名星花はそう呟く。

そんな横をドラム式掃除ロボットが地面に落ちている空き缶を拾いながら通過して行く。

道の真ん中に設置されている風力発電の3枚のプロペラが夏の暑い風を受けゆっくりと回っていた。

「ああ、アイツは元気が取り柄だからな。それに九条も付いてるみたいだし」

笑い混じりに神岡史貴はそう答える。

九条静香は以外であったが彼女の存在も心の支えになっているのであろう。

「あゝあ、まさか静香に先を越されるなんて思わなかったわ」

上坂茜はそんな事をボソツと呟いた。

別に誰かに向けて発せられた言葉では無いだろうが、ため息混じりのその発言は何かと気にはなった。

「何だ？ お前も竜が好きだったのか？」

「ち、違っわよ、そう言う意味で言ったんじゃないくて、それに私は……」

上坂茜は顔を赤らめながら視線を外しチラッと神岡史貴をみる。
ただ、ん？ と首を傾げる神岡史貴の頭の上には『？』が付いて
いる。

「えええい、もういい！ 春名さん！ 帰るわよ！」

照れ隠しをする様にドカドカを歩き上坂茜は帰って行く。

待って下さいよお、と上坂茜の後を追う春名星花は振り向いて神
岡史貴に一礼すると後を追う様に小走りで駆けていく。

アイツなにももう、などと愚痴を零しながら歩く姿はやはりお嬢
様とは呼べるものでは無かった。

そんな後姿を眺めフウと軽くため息をつき神岡史貴は空を見上げ
る。

既に太陽は傾きかけて夕日が建物の間から見え隠れしており、街
行く人達の数も減って来ている。

残暑の厳しい9月11日。

建物の隙間から吹く風に当たりながら神岡史貴は帰宅して行く。

歯車は止まる事を知らない。

第2章 現実殺し編 怪我の功名（後書き）

日常を取り入れて行くのが目標です。

新キャラ等も登場させていきたいと思えますのでよろしく願います。

お気に入り11件ありがとうございます。

回り始める歯車（前書き）

いつもありがとうございます。

ユニーク3000人突破しました。本当に感謝です。

これからもとある科学の原点帰還をよろしく願います。

回り始める齒車

「ハアハアハアハア」

深く速い呼吸音が辺りに響く。
汗が頬を伝って地面に落ちる。
ベトリとくつついたＴシャツ、派手に決めたジーンズは最早重りでしかなかった。

学園都市の並び立つビルの間、上からは微かに月の光が差し込んできている。

そんな裏路地を駆けながら男は振り向く。その先には誰もいない。だが男は走る。

乾ききった喉に有りもしない唾を必死に飲み込む。

男は今どうして自分が走っているのかを考える。

数時間前、連れのダチといつものように夜の街に出かけた。いつもの場所で仲間と戯れ、飯を食い、その辺でダラダラ話す、そこまではいつも通りだ。

だが今どうしてこうして走っている？

何が違った？

裏路地には使わなくなった自転車や横倒しにやっっているビール瓶

からは何やら液体が流れ出ている。そんなモノに足を取られようが引っかけようがそんな事はお構いなしに走る。

男は考える。いつ食い違ったのか。

そう、あれは仲間と解散しダチと一緒に何気なしにブラブラ夜の街を歩いていた時だ。

すれ違うヤツらは皆関わるまいと道を開けて来る。

酒も入っていたし暗くてよく分からなかったが、そんな中ダチの肩が何かにぶつかった。

ぶつかった後どうなった？ どうなったんだ？？ ぶつかった後アイツは……

カラん、と瓶の転がる音がどこからか聞こえて来る。

ハっ！？

男は立ち止り振り返る。

何かが近づいて来る足音。

それは暗闇の向こうから数十メートル先から聞こえて来る。

男は後退る。その何かは既に男の数十メートル先まで来ていた。

「ひいいい」

男は逃げる。

風を切り裂く様に全力で逃げる。

足が纏れようが何かに当たろうが止まる訳にはいかない。

（ダメだ捕まったりしたら……したら……アイツみたいに）

足音は止まない。暗闇の向こうで何かは確実に距離を詰めて来ている。

あつと男は立ち止る。

僅かに月が照らすその場所は

「い、行き止まり……」

目の前には10階建であろう建物、周りも囲われそこはまるで閉じ込められた檻のようであった。

ビルの隙間から隙向ける風の音、どこからか聞こえて来る車の音、そして

何かが近づいて来る足音。

しかし恐怖のあまり男は振り向く事ができない。

次第にその音は男に近づきそして……その音は男のすぐ後ろで止まった。

心臓の音だけが男の耳に届いていた。
最早体を動かす事さえできない。

再度有りもしない唾を命一杯飲みこむと決死の思いで振り返る

と同時に

がしつとその何かは男の頭を掴んだ。
人間の手。それは人間の手で間違い無かった。

そしてその手の隙間から見える顔が薄く笑った瞬間、男は意識を失った。

~~~~~

9月14日

授業を終えた神岡史貴は残暑厳しい9月の夕日を背に浴び帰宅している最中であつた。神岡史貴の周りには相変わらず仕事熱心なドラム式掃除が飽きる事も無くせつせと地面に落ちているゴミを回収するために走り回っている。

風力発電用のプロペラもこの生ぬるい風を一身に浴びて滞りなく回り続けていた。

そしてこの暑さは変わらない。

もう夕方だと言つのに歩くたびに体の至る所から汗が浮き出て来る。

最早このプロペラを使って昼間は暑さ対策として巨大扇風機にして使えばよいのではないかと思つてしまう。

8月も終わりに9月中旬にもなろうと言つのにまるで夏真っ盛りと言わんばかりの暑さである。

地球温暖化なんて言葉は最近聞かなくなっていたが、実はまだどんどんと温暖化は進んでいるのではないかと疑いたくなる。

堪らず道端にポツンとある自販機にて冷たい飲み物を買つてみるものの、冷たいと感じるのは飲んでる最中だけであつて再び歩き始めてしまうと飲む前と全く変わらない状況である。

だからこそ、そんな暑さを紛らわそうと普段行く事の無いゲームセンターに入ったのがこれまた何かの縁だったのだらう。

何気に入つたゲームセンターで目に入つて来たモノは、とてつもなく真剣な眼差しでクレイジーゲームと睨めっこをしている常盤台中

学の制服を着たお嬢様？ の姿であつた。

じーと瞬きすらしていないかのようにガラス越しのぬいぐるみに視線を向けている。どうやら相当集中しているようで後ろに神岡史貴が近づいてもその存在に全く気が付いていない様子であつた。

そして彼女意を決したように素早く100円を取りだすと流れるような手さばきでそれを機械に投入する。

まずは壱のボタン、横移動をさせる為のボタンを押しグラグラと揺れながら移動するクレーンを見つめ、見定めるようにそのボタンを離す。そして弐のボタン、縦移動の為のボタンを押しそして目を光らせるよう見つめているぬいぐるみの上に来た瞬間にそのボタンを離した。

クレーンはそのぬいぐるみに一直線に降りて行く。

そしてそのクレーンは狐のぬいぐるみをがっしり掴んだ。

ゆっくりとぬいぐるみを掴んだままそのクレーンは出口へと進んでいく。

しかし残念な事に出口を目前にしてその狐のぬいぐるみはクレーンから下へと落下してしまった。

「くううう。またダメかああ」

と2歩ほど後退りした所でその体は神岡史貴に当たった。

その衝撃で仄かない匂いがふわりと神岡史貴の鼻を襲う。

「あ、ゴメンなさ　　って何でアンタがここにいるのよ!!」

予想通り常盤台中学の制服を着た赤い髪の子、上坂茜は神岡史貴の存在に気が付くと最早化学反応の様に吠えて来た。

しかし、本当によく出会うモノだと感心したくなる。いくら同じ第7学区に学校があるとは言え、ここまで毎回のように出会うことはそう無いであろう。

運命の赤い糸、と言うモノが存在するがもしもこれがその類なら上坂茜の炎によって焼き切られているだろう。

「お前こそ常盤台中学のお嬢様がこんなゲームセンターで何やってんだよ」

「嫌味にしか聞こえないわね」

訊いてみる必要も無かったが一樣訊ねてみた。

実際こんなゲームセンターで常盤台中学の制服を着ていたら異世界から迷い込んできた住民の様に浮いて見える。

「その狐がそんなに欲しいのか？」

「な、何言ってるのよ!?　私がコンタなんて欲しい訳ないじゃない!　狐よ狐、厚揚げとか食べるのよ?　たまたま通りかかって目に入っただけからやってみただけに決まってるでしょ」

と上坂茜は全力否定するがこのぬいぐるみの名前を知っている時点でその否定は怪しいものだ。増して先ほどの集中力、執着心を見ていれば欲しい事くらい誰にだって分かるであろう。それを認めない所が上坂茜らしいと言えるのであるが、

それにたまたまゲームセンターに入る事なんてあるのだろうか？  
などと考えたが、あつと思いだす。

自分もまた暑さ凌ぎに立ち寄ったにすぎない。

（俺もたまたまだよな）

そんな事を思っている間にも直視はしていないが上坂茜の視線はチラチラとその狐のぬいぐるみに向けられている。

「取ってやろうか？」

ビクッと上坂茜はその言葉に反応した。

上坂茜の部屋がぬいぐるみで一杯と言うイメージはなかなか出来ないが、あまりにも欲しそうな目をしていたのでそんな言葉を掛けてみた。

「べ、別にいらないわよこんなぬいぐるみ」

「あっそ、じゃあいい」

と言おうとした瞬間、ちょっと待ちなさいよ、と袖を掴まれる。

「まあ、どうしてもって言うなら貰ってあげてもいいわよ」

素直に欲しいって言えばいいのに、何て思うがそんな事を口に出したりでもしたらこの街のゲームセンターを1つ潰しかねないので心の中にしまっておく事にする。

「で、どれがいいんだ？」

んつと彼女はそれを見ずに視線を逸らしたまま恥ずかしそうに指を指す

が、

「て、あんなでっかいヤツ取んのか!？」

上坂茜が指さす先にはクレーンの中の支配者と言わんばかりにと

っしりと座りこむ1mはあろう狐のぬいぐるみがあった。

「わ、悪い?? 取るって言ったんだから責任もって取りなさいよ」

分かった分かった、と機械に100円を投入し始めるもののその狐はビクともしなかった。

「ちよつと! もつと向こうよ向こう」 「もつとこっちに決まってるだろ!」 「全然ダメじゃないのよ! やっぱりこつちって言うてるでしょ!」 「ええいうるさい! だったらお前がやればいいだろ!」 「アンタがやるって言ったんでしょ! 責任もってやりなさい!」

なんて奮闘する事30分……

「た、倒れた! 倒れたわよ! ちよつと店員さん! これ倒れたわよ!」

と言う事で、何とかその巨大ぬいぐるみを獲得する事に成功したのであった。

帰り道、その巨大な狐のぬいぐるみを抱きかかえるように持っている上坂茜は少々歩きづらそうであったが鼻歌交じりで何かご機嫌



のようであつた。

「そんなにその狐が好きなのか？」

「べ、別に好きなんかじゃないわよ、大きいのにしたのも取るんだつたら一番大きいヤツを取った方がお得だしそれに……」

「それに?？」

(……アンタが取ってくれたから)

最後の言葉はあまりにも小さ過ぎて神岡史貴には聞き取る事が出来なかった。

「ええ? 何てえ?」

と聞き返すが、上坂茜は次第に頬を赤らめて

「な、何でもないわよ!」

とその巨大なぬいぐるみで神岡史貴の背中をドンと叩く。

思った以上の衝撃にぐはつと前のめりになる神岡史貴の横をスタスタと上坂茜は歩いて行ってしまう。

「おい！　せつかく取ったモノ大切にしろよ！」

「うるさいわね、もう私のだからどうやってもいいでしょ」

「まったく、と神岡史貴は頭を片手で掻きながら上坂茜を追いかける。

「おい待てよ！」

その2人を追う様に夕日は既に地平線の彼方へ消えようとしている。

学園都市に再び夜が訪れようとしていた。

## 回り始める歯車（後書き）

今回も日常になりましたが、少しずつ物語り徐々に進んでいきます。

アドバイスや感想があればよろしく願います。

## 都市伝説（前書き）

お気に入り15件ありがとうございます。  
これからもよろしく願います。

## 都市伝説

「九条さん、指示お願いしますね」

夕方の学園都市の街中を走りながら彼女は身長に似合わぬ大きなリボンを揺らし耳に装着された通信用マイクに向かって声を発する。右腕には盾のマークが入った腕章を靡かせて彼女は走る。

「……………了解」

マイクの向こう側でカタカタと端末の画面を見ながら九条静香は静かに呟いた。

そして普段では絶対に聞く事が出来ないであろう口調で彼女は喋りだす。

「ターゲット西に向かって逃走中、逃走経路分析……………予測、及び最善のルートを算出……………完了。10m前方を左折」

ラジャーと彼女は前方10mを左折し裏路地へと入って行く。入り組んだ裏路地であったがそんな事は問題ない。

「前方2つ目を左折……………さらに50m先を右折……………100m直進した後右折」

彼女は淡々とその指示に従って裏路地を走るのみ。幾度となくある放置されたゴミを小さな体を最大限に活かし避ける、そしてある時は体に似合わぬジャンプ力でその障害物を飛び越える。

「ターゲット遭遇まで残り30秒、前方裏路地を抜けた場所、右にて犯人と遭遇」

裏路地を抜け夕暮れの光が射す人通りのない道に出た雨音唯あまね ゆいは右を振り向く。10m先、この暑い中季節外れのニット帽を被り、大きな手荷物を持って男は走って来る。その男は彼女を発見するなり立ち止った。

「風紀委員ですよ。大人しくした方が身の為ですよ」

彼女は風紀委員ジャッジメントを示す腕章を相手に突きつけながら言った。

風紀委員ジャッジメント。学園都市内の能力者の学生たちによって構成される学園都市の治安維持機関。

原則として校内を管轄とし、それぞれの部署によって管轄の範囲スキルアウトが決められておりその中で起きた能力者による犯罪から無能力者による事件など様々な仕事を任される。

今日もその第177支部所属の雨音唯は目の前のATM強盗の男

を捉えるべく向かい合っている所である。

「何が風紀委員だ、<sup>ジャッジメント</sup>ただのガキじゃねえか」

その男は彼女を見て笑う様に言う。

身長150cmにも満たないその小さな体に子供を思わせるような大きなリボン。見た目は確かに子供である。

余裕だと言わんばかりにその男は何の警戒もする事無く彼女へと近づいて行く。

男は見下ろす。その20?は有ろう身長差に男は何の危機感も持っていないかった。

へへ、と男はその荷物を地面へと置き、拳を鳴らしながら笑う。

自分の勝利を確信するかのように笑う。

そしてその拳を振り上げ

「お子様は帰ってお昼寝でもしてな!」

容赦なくその拳を振り下ろした。

ゴン、と鈍い音が辺りに響き渡る。

それは人に当たった音では無くもつと硬い、そうまるでドラム式掃除ロボットの様な機械に当たった様な音。

そしてその瞬間辺りには男の悲鳴が響き渡る。

右手を左手で抑えて叫ぶ男の前には、最新の科学技術によってコーティングされたドラム式警備ロボットの姿があった。そのボディには多少凹んだ様な後が見受けられる。

警告、警告。打撃による物理的ダメージを感知。周囲の

なんて言葉を発しながらその辺をグルグルと回っている。  
男が殴ったのは彼女ではなくこの警備ロボットであった。  
そして肝心の彼女はと言うと、

「小さいからってバカにしちゃいけないだよ」

その場所から10mほど離れたベンチに腰を掛けていた。  
ひょこつと椅子から立ち上がるとゆっくりと男に近づいて行く。  
そして見上げる様に言う。

「もう観念しますか？」

しかし男は観念するどころか、ふざけるなあ、と叫びながら今度  
は左手を振り下ろして来る。

ただ再び男の前にはドラム式警備ロボットが現れ、その硬いボディを力一杯殴ってしまうことになる。



警告、警告。打撃による物理的ダメージを再度感知。

甲高い警報音が辺り一面に鳴り響いた。

男は膝を着き痛めた両手を見つめる。

まだ動く、そう確認した男はポケットから何かを取り出した。

拳銃。

その引き金を引けば人1人の命を奪う事など容易い兵器。  
そんなモノをこの男は平気で目の前の少女に向ける。

「ようやく追いついたようだな」

カツつと男の背後に地面を叩く靴の音と女性の声。

「待たせてすまない、雨音」

クールビューティーを想わせるその容姿にセミロングヘア。その髪を左手で掻き上げ彼女は立っていた。

「何だ貴様は!？」

男は振り向き言葉を投げつける。

とは言うものの、こんな場所に好んで来る人間はいない。人通りの少ない道、さらには鳴り響く警備ロボットの警報音。そんな場所に来る者など決まっている。

「私か？ 私はこの9月より風紀委員第177支部に配属となった  
かすがい みき春日井美希と言う者だ。」

と腕章を見せる。

チツ、やはり風紀委員か、と男は呟く。  
ジャッジメント

「大人しくしろ、と言っても素直に聞く訳もないか」

彼女はそう言うとかツカツと音を鳴らし男に近づいて行く。  
カチャ、とその銃口は彼女に向けられた。

「これ以上近づいたら撃つぞ」

しかし彼女は止まらない。その手に握られているモノが一瞬にして人をただの肉の塊へと変えてしまう兵器である事を知らないかのように平然と彼女は歩く事を止めない。

その姿に逆に男の方が恐怖を抱き始めていた。こんなモノを目の前にして何一つ構える、避ける、そう言った行動を起こそうと言う素振りも見せない彼女に男は脅えているようである。

「撃てばいいさ」

その言葉に男は耳を疑う。

引き金を引いた瞬間、人間を肉の塊へと変えてしまうモノを前にしてなぜそんな言葉を発することができる？

男は考える。

「貴様も能力者か。はは、能力者は皆こうだ。無能力者を見下  
しやがって」  
スキスアウト

距離は10mを切っていた。

速度を一定に彼女は男との距離を詰めていく。

男は銃を握る手に力を入れる。

そしてその引き金を引いた。

弾丸は小さな炸裂音と共に彼女の心臓に向かって飛んでいき

しかしその弾丸は彼女の体をなぞるように避けて彼女を通過し後の街灯へと突き刺さった。

距離は5mを切った。

男は有りつ丈の弾丸をすべて発射したがその弾丸は1発たりとも彼女を捉えることはなかった。

弾の切れた銃を投げ捨て男は叫び声と共に拳を振るう。

男は内心分かっていた。銃が効かない相手に拳なんてモノは役に立たない事くらい、こんな軽い拳が彼女を捉える事は出来ない。そんな事は分かっていた。

しかし考えるよりも先に体が動いてしまった。恐怖のあまり体が思考と逆の動きをしてしまったのかもしれない。

男が放った拳は予想通り彼女を捉える事はなかった。まるで油の引いた地面を滑るかのようにその拳は彼女をすり抜けその勢いを利用し春日井美希は男の腕を取り地面へ抑え込んだ。

「ジャッジメント言っておくがお前らを見下してはいない。風紀委員の中にも無能力者（レベル0）は何人もいる。お前が無能力を理由に逃げているだけだ。」

「くっ」

男は何も言い返すことなく施錠をかけられ到着した車へと乗せられる。

男は何も言わない。

逃げているだけ、その言葉が男の頭の中をぐるぐると回っていた。

~~~~~

「雨音、さっきの事件の書類はここでいいのか？」

数枚の書類を片手に大きな棚の前で指をさし春日井美希は雨音唯に問いかけていた。

「そこで大丈夫ですよ」

相変わらずトレイの上に不安定な場所にコップが並びそれを完璧なバランス感覚で保ってお茶を配っている。

「はい、春日井さんもお疲れ様でした」

彼女が席に着くと同時に雨音唯は彼女の机にお茶を置く。

机の傍には未だ片付けられていない段ボールが数個見られる。

風紀委員第177支部。ジャッジメント 風祭竜、雨音唯、九条静香の3人が所属している。

そしてこの9月よりこの第177支部に所属となったのが、第7学区の高校に通う春日井美希。元々他の支部で風紀委員ジャッジメントを行っていたので異動と言う形でこの支部にやって来た。

「何を見てるんですか？」

端末と見らめっこをしている九条静香に雨音唯は話しかける。
その画面には

学園都市における都市伝説

「九条さんこんなのに興味あつたんですか？」

「……………暇つぶし」

と九条静香は単調に答える。
なになに、と春日井美希も混ざり画面を覗き込む。

ギャンブルで一度も負けた事がない男
夜な夜な学園都市の公園を焼き尽くす炎の悪魔
出会うと最後?? 魂を抜かれる謎の生物

「どれも変なモノばかりですね」

などと雑談をしていると

「こんにちは」

と部屋のドアが開かれる。その先には上坂茜の姿があった。

「上坂茜さん、こんにちは」

皆が集まっている姿を見て上坂茜もその端末に近づく。

「何見てんの? 何々? 学園都市における都市伝説、へえこんな
のに興味あるんだ」

と上坂茜も目を通す。

ギャンブルで一度も負けた事のない男

（そんなのイカサマしてるだけでしょ）

夜な夜な学園都市の公園を焼き尽くす炎の悪魔

.....

「誰が悪魔じゃあああ!!」

ちやぶ台をひっくり返しそうな勢いで叫ぶ上坂茜。

「ど、どうしたんですか?」

「い、いや何でも無いのよ、ええと何々? 出会ったら最後、魂を抜かれる謎の生物? こんな胡散臭いモノ本当にある訳がないじゃない」

と手を軽く広げて呆れた表情で答える。

そう都市伝説なんて所詮噂よ、う・わ・さ。夜な夜な学園都市の公園を焼き尽くす炎の悪魔だって噂よ

なんて自分に言い聞かせる上坂茜であった。

そしてポンッと何かを思い出したように上坂茜は手を叩く。

「そう言えば下で春名さんが待ってるのよ。貴方たちまだ仕事あるの？ 無かったら一緒に帰ろうと思って寄ったんだけど」

そう上坂茜は雨音唯と九条静香に訊ねる。

どうやら2人も今日は帰るようであつたので一緒に帰る事になった。

「春日井さんももう帰られますか？」

「そうだな私も帰るとしよう」

それじゃ、と2人は荷物を持ってドアへ向かい、失礼しまゝす、なんて声をかけて部屋を出て行く。

2人の後を追いかけるように春日井美希は机にある荷物を手に取り部屋を出ようとするが、荷物を取ると同時に1枚の資料が机から落ちた。

それを徐に拾い、机に戻す。

その際に資料をチラッと見たがそのまま部屋を後にする春日井美希。

その資料にはこう書かれてあった。

『学園都市内で発生する原因不明の意識不明者についての報告書』

都市伝説（後書き）

新たなキャラ登場しました。

日常の描写っていうのは難しいですね。頑張ります。

現れた何か（前書き）

時間を掛けた割には駄文な気がします。まだまだですね……

ようやく最新話です。

現れた何か

「これどう思いますか？」

雨音唯の声を聞いていると真剣な話も真剣出ないように聞こえてしまいそうなのだが、実は真剣な話をしているのだ。

「そうだな、やはり何らかの事件として調査してみてもいいのかもしれないな」

「……………事件」

ジャッジメント

風紀委員第177支部

棚には整理整頓された資料が内容の頭文字順にファイリングされている。部屋の所々には花や植物が置かれてあり、室温管理は抜群の仕事部屋である。

そんな中央に設置された長方形の机を囲むように3人は難しい顔をしていた。

「こんにちは、って難しそうな顔してどうしたの？」

ジャッジメント

まるで自分は風紀委員です。と言わんばかりに何の違和感もなく上坂茜は部屋に入って来た。それとは対照的にその後ろを申し訳な

さそうな表情で春名星花が続いて入って来る。

「ああ、上坂に春名か。一応ここは風紀委員以外立ち入り禁止なんだが、まあ良いだろう」

ジャッジメント

と春日井美希は机の上にある資料に目を戻す。
それを覗き込むように上坂茜と春名星花も資料を見る。

「学園都市における意識不明者の報告数？」

「ここ最近病院に運ばれる意識不明者が増えていてな、この第7学区だけでも既に50人が意識不明で病院に運ばれている」

50人。年間では無くこの9月になってからの人数である。

「それは何かの病気が流行っているって事ですか？」

「そう言う訳では無いみたいだ」

「じゃあ何が原因で？」

しかし春日井美希は首を横に振る。

原因不明。

学園都市の科学を持ってしても原因を突き止める事には至っていないと言う。

「学園都市全体で224人の学生全てが裏路地や人目に付かない場所で見られている。つまり病気では無く、事件として見た方がいいだろう。それに意識不明に陥っているが誰一人意識を回復した者はいないそうだ。いや、正確には99%だな」

99%？

と言う事は、

「たった1人だけ意識が回復したらしい」

なら話は簡単、事件であるならその学生に話を聞けば何かしらの情報を得る事が出来るのでは？

そう思った上坂茜は訊ねてみるが、

しかしそれは出来ないと言う。

資料によれば、

「その学生は意識は回復したが、人形みたいだそうだ」

人形。

動けない、意思がない、ただ目を開いているだけ。

心がない。

「まるで心を抜き取られた様に」

！？

その言葉に反応するかのように上坂茜はすぐに端末を前に向き合った。

キーを素早く入力し、何かに取りつかれた様に画面へ集中する。
力ち、とある場所をクリックした所でようやく上坂茜は止まった。

これ、と上坂茜が指さす画面に映っているのは

学園都市の都市伝説

出会うと最後、魂を抜かれる謎の生物

「これ何か関係無いかな？」

確かに、とその場にいた全員が頷いた。

都市伝説など作り話が多いが、中には思いもよらぬ情報が紛れ込

んでいる場合もある。ましてここは科学の最先端学園都市。ネットの情報も甘くは見れないと言う事だ。

「静香、お願い」

コク、と頷いた九条静香は席に着くなりその都市伝説についての情報を洗い浚い調べ始めた。

流れる様な指使い、無数にある情報から確信の1つを探し出すように端末の画面は動き続けている。

数分の間無言の状態が続いた。全員が画面に食いつく様に睨みつけている。

スツと九条静香の指が止まった。

カチ、とマウスのクリックする。

そこに出て来たのは

バンク
書庫

学園都市の総合データベースであり、基本的に生徒や能力など学園都市に関わる情報の全てが登録されている場所である。

徐にキーを叩き画面を進める九条静香。

とある病院の診察結果

9月12日、1名の意識不明者の意識が回復。ただそれを回復と

呼ぶかどうかには疑問が残る。偶然による体のみの覚醒と呼ぶべきであろう。様々な検査の結果、演算能力がゼロである事が判明。学生の能力段階は異能力者（レベル2）でありながら無能力者（レベル0）である事が確認された。今後の

レベル2からレベル0へのシフトダウン。

能力の高さとは演算能力の高さである。

意識を失った為に演算能力が無くなったのか、それとも……

九条静香は徐に画面を切り替え別のサイトを表示する。
何やら掲示板の様なサイト

21：学園都市で起きてる通り魔事件の被害者は全員意識不明らしいぞ

22：被害者全員が能力者なんだろう？

23：噂では1人意識回復したって

24：そいつ能力失ってるって話だぞ

25：能力者の仕業？

26：そんな能力者は書庫バンクにいない

27：のぞいたのか

28：登録されてないだけかもよ

「これってBBS？ 単なる書き込みでしょ」

しかし興味深い事はこの先に書かれてある事であった。

102：被害者は外傷ほとんど無いんでしょ？

103：まさか被害者は魂を抜かれた？

104：それ都市伝説のдар？

105：じゃあ破壊された？

106：何を？

107：パーソナルリアリティを

108：そんな事出来るのか？

109：出来ないだろ

110：でもそれなら能力を失う事も説明がつくかもね

111：……ホントに破壊されちゃったの？

112：俺元々レベル0だから大丈夫だな

113：俺レベル1だけど……大丈夫だよ

114：破壊されちゃうかもね

115：夜の外出控えないと……

116：自分の現実を破壊される

117：現実破壊？

118：いや。これは寧ろ

「現実……殺し？」

全員は息を飲んだ。

これは単なる掲示板での会話に過ぎない。根拠も無ければ証拠も

無い。

何しろ目撃者がゼロなのだ。

その犯人から逃れた者はいない。

つまり目撃者は全て意識不明者だ。被害者以外はそれが一体何なのか分からない。

ただ可能性として有り得るのは

「この学園都市に能力を破壊するかもしれない何かがいるって事なのか？」

データーからは狙われているのは能力者ばかりである。しかしそれ以外の学生が狙われないと言う可能性は無いと言う訳ではない。

「これは我々だけでは手に負えない事件なのかもしれない……」

「それならまた私たちの出番かもしれませんね」

春名星花はそんな事を口にした。

しかし彼女以外は何の事か分かっていない。

それでも彼女は荷物を持って部屋を出ようとす。

「ちょっと春名さん?? どこ行くの?」

彼女は答えた。

「上条学院ですよ」

~~~~~

「つまり能力者ばかりが意識不明になる事件が多発していると言っ  
訳だね」

上条学院のとある会議室。

会議室と言ってもただ単に机が長方形に並べられているだけの言  
わば話し合いなどをする様な場所である。

林光一郎は机に両肘をつき窓から差し込む日差しが眼鏡を光らせ  
ている。

まさに会長の名に相応しい。

部屋には既に神岡史貴ともう一人男子生徒が連絡を受けて集まっ

ていた。

「そう言う訳よ。で、そっちの人は初めてなんだけど誰なの？」

相変わらず年上に対して言葉に気を付けると言った事をしない上坂茜であつたが最早そんな事を気にしている者はいなかった。

肩まである黒髪に異様に長い前髪は鼻の上まで覆いかぶさり目は相手側からは見えない。どこか物暗そうな見た目からは、お前友達少ないだろ！　と言われていそうだ。

「君たちは会つのが初めてだね、彼が戦城明君だ」

「……………戦城です」

と女子軍団は一斉に九条静香を見た。

似てる

言わば男性版九条静香と言えるだろう。

「実は既に僕たちもその情報は得ていてね、君たちに協力をお願いしようと思っていたんだ。所でそちらの女性は何方かな？」

「私は春日井美希。この9月より風紀委員第177支部に所属する事になった者だ」  
ジャッジメント

戦城君、の言葉で戦城明は携帯用端末のキーを素早く入力していく。

スツと林光一郎の前に出された画面には書庫に登録されているデータが表示されていた。  
バンク

フムフムと画面と睨めっこする林光一郎。

「新たにレベル4が協力してくれるとなると心強いね」

ありがとう、と端末を退けた林光一郎は、さて、と徐に真剣な表情へ変わっていく。

「今回の事件は少々難しい。まず相手の特定が出来ていないと言う事、次に相手は能力を破壊する可能性があると言う事。現実殺し、すでにネット中ではそう呼ばれているみたいだね。さらに被害者全員が夜に襲われていると言う事から調査をするのであれば日が暮れてからになるね」

「それに範囲も絞った方がいいわね。学生の多い第5学区、第7学区、第18学区この3つがいいんじゃない」

……何よ、と周りを見渡す上坂茜。  
周りはまともな事を言った上坂茜に少し驚いた様子であった。

「ただ3つに絞ったとしても人数がもう少し欲しい所だね。戦城君には残ってもらわないといけないし、九条君と雨音君にも残って戦城君の手伝いをしてもらいたい」

ええ、と雨音唯は残念そうな顔をする。どうやら行く気満々だったようだ。

何故2人が必要かと言うと、戦城明の能力、千浄天眼は能力者の微弱に発しているA I M拡散力場を察知する言わばリーダーみたいなモノである。1度に10人ほどの居場所を把握する事が出来るが能力発動中はその場から動く事が出来ない。

「戦城君には場所の把握、九条君と雨音君には僕たちへの連絡役をやってもらいたい訳だ」

神岡史貴、林光一朗は、上坂茜、春名星花、春日井美希、5人で3学区を割るには最低でも後1人は欲しい所であるが、風祭竜は参加する事が出来ない。

どうにか後1人……  
と、考えようとしていると

「どうやら人手不足の様じゃの」



窓側から聞こえた声に全員が振り向く。

肩まである黒い髪を風に靡かせ窓に腰を掛け腕を組みながらそう呟いた。

「とばあき刀場亜紀！？」

彼女はスツと窓から降りると徐に歩き出す。  
かつて敵対した相手に皆は構えを取る。

そんな事をお構い無しに彼女はゆっくりと神岡史貴に近づき大きく手を広げ

「会いたかったぞ史貴殿」

がばつと神岡史貴の胸に飛び込んだ。

「えええええええ！？」

状況の理解できない神岡史貴は顔を真っ赤にしあたふたしている。  
見た事が無い彼女の上目使いで思考停止に追い込まれると同時に  
押しつけられる豊満な塊が一層神岡史貴の思考を停止へと向かわせ

た。

「あ、アンタ何してんのよ!!」

上坂茜は全身に炎を滾らせて獣の様に吠える。おまけに瞳まで燃えているようであった。

間違いなく室内温度が3度は上昇したであろう。

「何じゃまたうるさい小娘が吠えておる様じゃな」

「誰が小娘なのよ!」

神岡史貴から離れた刀場亜紀と上坂茜は睨み合う。  
既に刀場亜紀の手のひらには風の渦が出来ており、上坂茜も何時でも飛びかかれる様な状態である。

「お、おい2人とも止めろって」

と仲介に入る神岡史貴であったが  
アンタが悪いんですよ! と上坂茜に怒鳴られる始末。  
ただ刀場亜紀の反応は……

「すまなかつた史貴殿」

その素直ぶりに上坂茜は驚いていた。仲介に入つた神岡史貴もこれほど素直に聞いてくれるとは思っていなかった。

「で、アンタは何しに来た訳!？」

「妾は史貴殿に会いに来たのじゃ。あの時以来妾の心は史貴殿の物じゃ」

と神岡史貴の腕に抱きつく。

な!？

「何が史貴殿の物じゃ、よ。いいから離れなさい!」

メラメラと火花の散らすように燃える上坂茜の横で春名星花は顔を赤らめ頬をプツと少し膨らませている。

この4人の世界から放り出されている5人は声を揃えるように呟いた。

修羅場だな

~~~~~

事情を説明した神岡史貴によって急遽参加した刀場亜紀は神岡史貴と共に第18学区を。

班分けに文句を言いながらも第7学区を上坂茜と春名星花が捜査する事になり

そしてこの第5学区をあたる事になった林光一郎と春日井美希は彼女の意見により別々に行動をしていた。

林光一郎は行動を共にする事を提案したが彼女は一刻も早く犯人を見つける為に別々の案を出した。

林光一郎がそれを承知したのは彼女が風紀委員であると同時にレベル4の能力者であった事が大きい。ジャッジメント

また戦城明のリーダーにより場所把握が出来ている事と、もし犯人を発見した場合は応戦せずに応援を待つと言う約束付きだ。

春日井美希はあえて人通りの無い道を選んでいた。

情報によると7割の被害者が裏路地で襲われたと言う事から裏路地が一番犯人との遭遇が高いと踏んだからだ。

時刻は午後の8時20分。

街灯がほとんど無い裏路地。壁際にはいらなくなった自転車や何

かの電化製品、ビールのケースなどが置かれてありほぼゴミ捨て場状態であった。

街の音はほとんど聞こえなくなり、どうやら相当奥まで来てしまったようだ。

集合時間は9時00分。そろそろ戻ろうと振り向いた

その20mほど先

黒いコートに身を包んだ何かが立っていた。

顔を覆い隠す様にフードを被っている為それが男性なのか女性なのかそれとも別の何かなのかは分からない。

ただ1つ言える事は

コイツが犯人に違いない

ピッとポケットにあるスイッチを押す。

霧上常連合？ 本部（戦城家）への救援信号。犯人との遭遇を合図する為の物である。

戦城明の能力により把握した場所を九条静香と雨音唯が5人へと連絡する。

スツと目の前の何かがコートの中から鉄パイプを取り出した。

手に取ったそれはグニャグニャと見る見るうちに形を変えて1本の刀になった。

（鉄を变形させる能力者？）

その刀を振るい勢いよく駆けだし近づいて来る。

（外傷ゼロって話じゃなかったのか？ 応戦しない約束だったか？
れなら……）

降りかかってくる刀を避けようともせずに春日井美希は構える。

左腕目掛けて振り下ろされたその刀が彼女に触れた瞬間

まるで油でも塗ってあるかのようにスルリと肌を滑り刀は地面へと刺さった。

態勢と崩した相手にそのまま左手で裏拳を背中に叩きこむ。

よろつと寄れながら相手は3歩ほど歩き立ち止る。振り向く際に顔を隠してあったフードが揺れる。その隙間から僅かに見えた表情からは

男？

そんな雰囲気を感じた。

「無駄だそんなモノ私に通用しない」

オーバーライド
表面滑走

あらゆる物理攻撃を受け流す彼女の能力の前では刀、弾丸、そう言った物は一切通用しない。しかし受け流せる物は物理のみである為、炎、電撃といったモノを受け流す事は出来ない。

一瞬鼻で笑った様な声が聞こえた。

その男は何かを察したようにコートの中に持っていたもう1本の鉄パイプを投げ捨てる。

同時に男の動きが止まる。

それはほんの1秒か2秒、短い時間であった。何かが出来る時間でも無い、考える様な時間でも無い。

が、次の瞬間

バチン、と男の指から火花が散った。

現れた何か（後書き）

事件の幕開けですかね？

色々と考えてはありますので次回が気になる方はお待ちください。

敗れ去る超能力者（前書き）

久しぶりの投稿になります。

お気に入りが20件になりました。本当にありがとうございます。

敗れ去る超能力者

男の指から発せられているモノ明らかに電気である。

春日井美希は驚き戸惑う。先ほどまで男は確実に鉄を操る能力の類であつた事は間違いない。しかし目の前の男は指からバチバチと火花が散っている。

それはありえない光景だ。

能力は1人につき1つまでと決まっている。

多重能力！？

「お前は何者だ？」

しかし男は何も言わない。

ただ軽く上げた右手の指から電気を発しているだけ。

まるで感覚を確かめる様に数秒ごとに火花を散らしている。

その右手を先ほど投げた鉄パイプに向けて翳すと右手と鉄パイプは電気で繋がれて、いらなくなったモノを放り投げる様にそれを春日井美希へと投げつけた。

パイプは回転するように春日井美希へと向かうがそのスピードはそれほど速くない。弧を描く様に投げられた鉄パイプは春日井美希まで届く事無く目の前で失速し地面へと落下しそうになるが、

「な！？」

パイプが春日井美希の視界から消えた瞬間、そのパイプの死角から突然と男が距離を詰めていた。

無造作に投げられた鉄パイプは攻撃が目的では無く死角に潜り込んで近づく為のモノであつた。

彼女は咄嗟に横へと体を回転させ回避を試みる。それが単なる打撃であれば避ける必要も無い。オーバースライド表面滑走で流せばいいだけの話である。しかし現在男の右手の中にあるモノは

電気の塊。

それは手の平に収まるほど小さなモノだ。

簡単に言えば人工スタンガンと言えるかもしれない。

一〇万ボルト。

これだけあれば人を数秒から一分間動きを封じてしまう。ジャッジメント

長年の風紀委員で多くの無能力者スキルアウトを相手にしてきた春日井美希は

その右手を見た瞬間、それが無能力者スキルアウトが保持しているスタンガンと同じ目的である事を予測した。

即ち相手の動きを封じる事。

その右手に触れてしまうとスタンガンを喰らった様に体の自由を封じられるだろう。そう判断した春日井美希は瞬時に回避を始めた。案の定男の右手は空を切る事となる。

咄嗟の判断による回避に成功した春日井美希はすぐに立ち上がり男との距離を取りながら構える。

男は首だけ振り返りユラッと倒れるように方向を変えて再びその右手を彼女に向けて突きつける様に前に出す。

既に構えを取っていた春日井美希はそれを体を反転させるだけの動作で避け反撃しようと拳を握るが、男は右手を避けられた反動を使って振り子の様に重心を移動させて左手を突き出す。

その手も電気を帯びていた。

今度は後ろへ大きくバックステップを取る様な形でそれを避ける春日井美希。

（今のは少し危なかった）

男との距離は五メートルも無い。

春日井美希の拳を握る手からジワリと汗が滲み出る。

重心を落とし構えを取る春日井美希とは対照的に男は表面を向くと無防備で立ちつくしている。

またも数秒男の動きが止まる。

その瞬間、春日井美希は行動を起こしていた。

五メートルの距離ならば僅か数歩で間合いを詰める事が出来る。

男が何を考えているのか分からないが無防備の瞬間を無駄にする事も無い。

男との距離をゼロにまで縮めた春日井美希は足払いをする様に男の態勢を崩す。まるで人形のように抵抗すらない男はいとも簡単に壁に押し付けられた。

一連の流れの様に拘束用の手錠で壁にある配水管の様なパイプに男の左手を固定する。

カチ、と言う音と共に男を確保した。

「何とかって感じね」

フウ、と自然に息が漏れる。

最後は案外呆気ないモノだった。男は抵抗すらしなかった。

諦めた、と言える様な感じではなかったが、

「とりあえず報告ね」

と彼女はポケットに入っている携帯端末を取り出し画面を見た所で、

異変に気が付いた。

壁に拘束されているハズの男の姿が無かった。

僅か数秒。携帯端末を取りだす一瞬目を離した間に男は目の前からいなくなっていた。

「な!？」

慌てて辺りを確認するために振り向こうとしたのだが、

瞬間

バチ、と言う音と共に全身を電気が走り抜けた。

「が……ッ!」

首だけをどうにか後ろに振り向かせた彼女の目に映ったのは、フードの下から歯をむき出しにして笑う男の顔だった。

背中からスタンガンをぶち込まれた様に春日井美希はそのまま表面から地面へとうつ伏せに倒れ込んだ。

(どう……やって手錠から……)

意識の朦朧とする中、どうにか立ち上がろうと腕に力をいれるが体はビクともしなかった。

顔だけを動かし見上げると、

男は春日井美希の正面に立ちその場にしゃがみこむ。

壁にはパイプに繋がれたままの手錠がそのままぶら下がっている。手錠を壊したのではなくすり抜けたように手錠は輪を作ったままだった。

(まさか……テレポ　)

春日井美希が思考を終える前に男はフードの下から嘲笑う様に歯をむき出しにして、そっと彼女の頭に触れる。

瞬間、

春日井美希の視界は真っ暗となり、ガク、と力が抜けた様に冷たい地面へと向かって降下し、そのまま動かなくなった。深い眠りにつく様に。

男は笑っている。

フードに隠れた顔は全てをさらす事は無かったが、見える口元からは絶えずむき出しの歯が見えていた。

ふ、と男の顔から笑みが消えた。

振り返る先の暗闇から聞こえて来るその足音は徐々に近づいて「どうやら間に合わなかったようだね……」

整えられた黒髪に眼鏡姿。

少し息を切らした林光一郎の姿がそこにあった。

林光一郎は視線を下に向ける。

そこにはまるで眠るように地面に横たわる春日井美希の姿が見えた。

「君が噂の通り魔さんの様だね」

男は何を語らない。

ただフードの下から見える口元は再び笑う。

まるで次の獲物を見つけたハンターのように薄気味悪い笑みを見せる。

ジリ、と林光一郎は足をずらし両足を開いて重心を落とす。

「どうやら言葉はいらないようだね、なら」

スツと林光一郎は姿を消す。

トランスバリエート
万有地変

周辺と同化する事によって姿を隠す能力。

辺りには地面を蹴る足音だけが微かに響く。

林光一郎は一気に男との距離を詰める。

しかし男は何も構えない。ただ突っ立っているだけ。

そしてその男が
瞬！と視界から消えた。

林光一朗は立ち止り左右を確認するがそこに男の姿はない。

だとすると

後ろを振り返ると一〇メートルほど先にその男は立っていた。

（空間移動能力者か……それにこちらの居場所が分かっているのか
テレポーター
？）

しかし、その男は何かを探している様にキョロキョロと辺りを見
回している。

つまりはこちらの位置は把握していないと言う事。

姿を隠せても足音までは消す事は出来ない。その男はただ単に僅
かな足音から近づいて来る林光一朗を感知し移動しただけ。

その男はやがて何かを発見したようにニヤリと薄気味悪く笑う。

数秒男の動きが止まり

男はその右手から渦を巻く様に炎を生み出された。

（何！？）

その男は齒をむき出しにして笑うと、その炎を投げつけた。

（多重能力！？それにやはりこちらの位置が）

しかしそれは林光一朗へ放たれたモノにしては照準がズレている
様に感じた。そしてその軌道の先には……

「しまっ
」

林光一朗の数メートル横には地面に眠るように気を失う春日井美希がいた。

その男が炎を放つ前に見せた表情には、獲物を誘き出す為の良い事を思いついた、そんな意味が込められていたのだ。

林光一朗の位置が分からないのなら誘き出せば良いだけの話し。

「くッ！」

林光一朗は咄嗟に駆けだす。

その炎はまるで計算尽された様なスピードで春日井美希へと向かっていった。走ればギリギリで間に合いそうな何とも嫌らしいスピードで。

その炎は春日井美希へ直撃する前に何かに当たって小さな爆発を起こした。

言うまでも無い。林光一朗に当たったのだ。

「が、は……っ！！」

その炎は全てを燃やし尽すあの灼熱炎帝コロナリオンの様な威力があつた訳ではない。炎の大きさから見てもレベル2かレベル3と言った程度だろう。

しかしいくら威力が低いと言っても炎は炎だ。その塊が体に直撃すれば徒では済まないだろう。

姿を現した林光一朗の背中中は服が焦げて丸い円を模って、その背中中は火傷を負っていた。

ズキズキと痛む背中に歯を食いしばりながら、林光一朗はホツとしていた。

目の前の春日井美希に炎は届く事は無く、地面に倒れている。意識が無い事に変わりは無いのだが、炎を食い止める事が出来て彼女

は炎に晒される事は無かった。

カツ、と言う足音。

ホッとしたのもつかの間。振り向く先には、見つけた、と言わんばかりに歯を見せて笑う男の姿があった。

見つかったならまた姿を隠せば良いだけの話しだが実際はそんなに簡単なモノではない。

トランスバリエント

万有地変の能力は名の通り有らゆる地（風景）に変化（同化）する能力であるが、それは消える訳ではない。

動くたびに周りの風景は変化する訳であってそれらを全て計算しながら動き、尚且つ周りに同化しなければならぬ。その為には複雑な演算が必要なのだ。

余分な雑念、激痛、焦燥、混乱、そう言ったモノは演算能力を大幅に減少させる。

一歩進む。これだけの動作でも完全に相手から姿が見えない様にするためには自分の位置、周りの風景、座標、有らゆる物質などを把握し常にコンマ刻みで能力を発動する必要がある。

しかし背中に火傷を負ってしまった今、能力を封じられてしまったを言っても過言ではない。

林光一朗が自分を鍛える理由は傷を負わない、激しい運動でも演算に支障がでない、そう言った事も目的に含まれていた。

林光一朗は勢いよく走りだす。

もはや鍛えられた肉体のみが武器となる。

一〇メートルあった距離を一瞬にして詰める。

男はやはり何もしない。ただ立っているだけ。

テレポート
また空間移動か？

しかし振り抜かれた中段蹴りは男の腹部を直撃した。

のだが、それはまるで油でも引いているかの様にスルリと表面を滑り空を切る事になる。

勢いを殺せずに相手に背を向ける事になってしまった林光一朗。

男はその背中の火傷部分にまるで林光一朗を真似るかの様に足を振り抜き蹴りを放つ。

避けられないと悟った林光一朗は前方に飛ぶように蹴りの勢いを殺す。

前方に受け身を取る形で飛んだ林光一朗は何とか直撃を免れたが、背中の痛みは増すばかりであった。

（あの能力は間違いない）

瞬間、男の姿が消えた。

テレポート
「また空間移動」

そして間もなくしてゴン、と言う音と共に上空から豪雨の様な水が降って来た。

男は建物の屋上にある貯水タンクを破裂させた。そして再び何事もなかったかのように林光一朗の前に現れた。

降り注ぐ水は辺り一面を覆い、地面は林光一朗の周りそして一〇メートル後ろの春日井美希の所まで及んでいる。

「クッククック」

初めて声が聞こえた。

しかしその声は男の声でもあって女の声でもあってそしてどちら

でも無い様な声。

断定が出来ない。

そのいくつもの声が重なりあつた様な声は

「「「おやすみ」」」

そう発した瞬間、男の両手から放たれた電撃が濡れる地面を走り、
「がああああ」

林光一朗の全身を駆け巡った。

（この男の狙いはこの僕の　　）

倒れる際に林光一朗が目にしたモノは、嘲笑うかの様な歯をむき出した笑みと、毛細血管が全て浮き出たように真っ赤な眼。

男はまだ意識の朦朧とする林光一朗に近づきしゃがみこむ。
そして頭に右手を添えると

「「「まずは一人目」」」

その声を聞いた林光一朗は意識を失い、深い眠りについて行った。

敗れ去る超能力者（後書き）

久々の投稿になりました。申し訳ありません。

現在とある魔術の天の住人も連載しております。そちらに集中しすぎました。

宣伝になりますが、ぜひそちらも1度どうぞ。

今回は展開が早くなってしまいました。

もう少し詳しく書ければよかったのですが、

こんな簡単に負けてもいいのか！？ と思いましたが、こんな戦いしか思いつきませんでした。力不足。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3215n/>

とある科学の原点帰還(アトミックルーツ)

2010年12月7日14時02分発行